

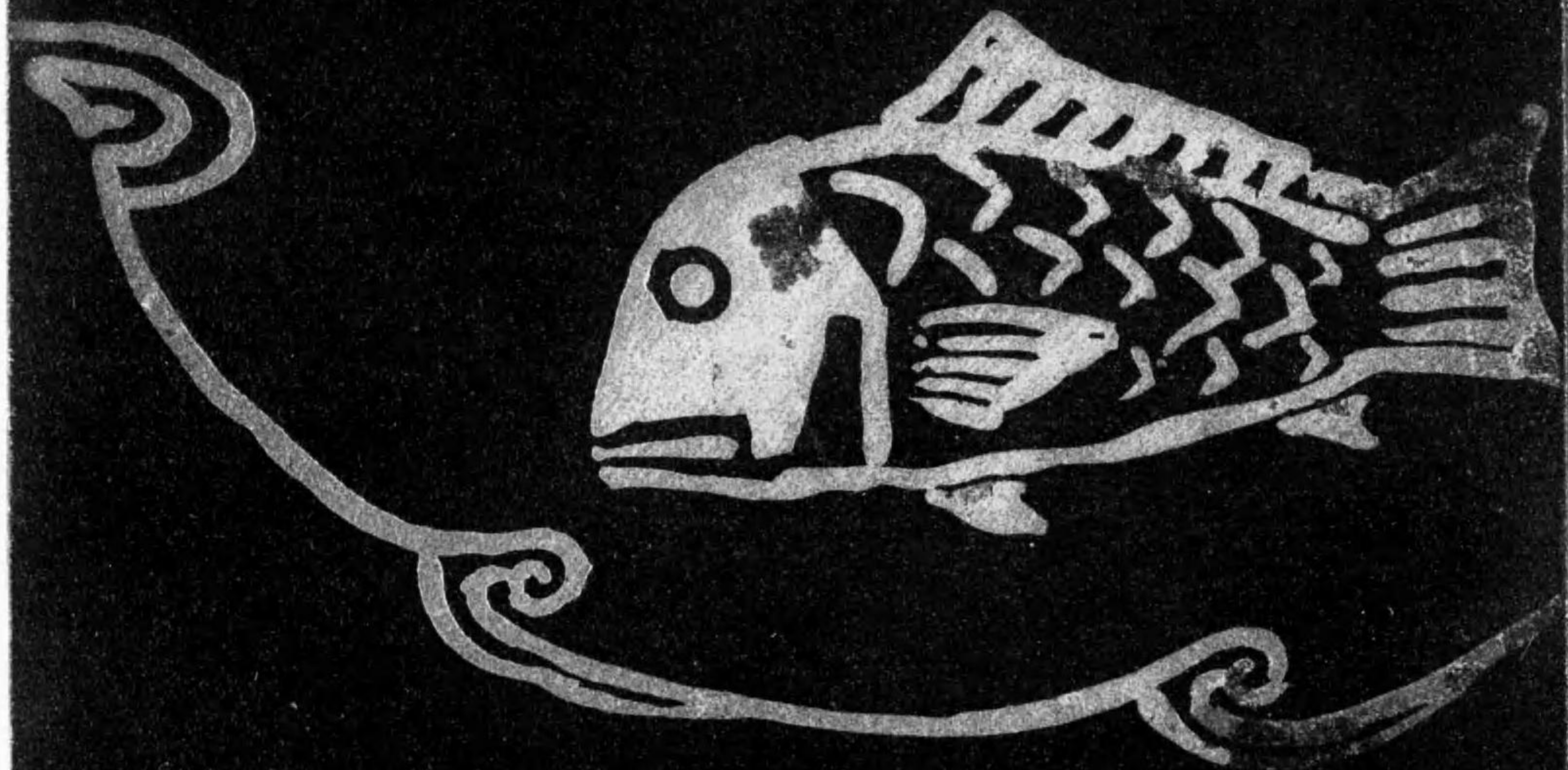
554
144



始



554
144



賜台覽

謹告

本町志ハ客秋宮内次官關屋貞三郎閣下
ヲ通シ今上陛下攝政宮ニ在ラセラレシ
時謹テ奉獻シタルニ御嘉納アラセラレ
畏クモ台覽ヲ賜リタル趣吾等町民ノ光
榮之レニ過ギザル儀ト存候此ニ舊町民
諸君ニ御報告申上候

朝役神役ノ記事ハ本志第二八頁以下ニ之レアリ候



宮田志



編者 寄贈本

内閣總理大臣

若槻禮次郎君題辭

内務次官

川崎卓吉君序

大阪府知事

中川 望君序

大阪市長

關 一君序

內閣總理大臣若槻禮次郎君題

頌
頌
頌
頌

丙寅夏月

克勤

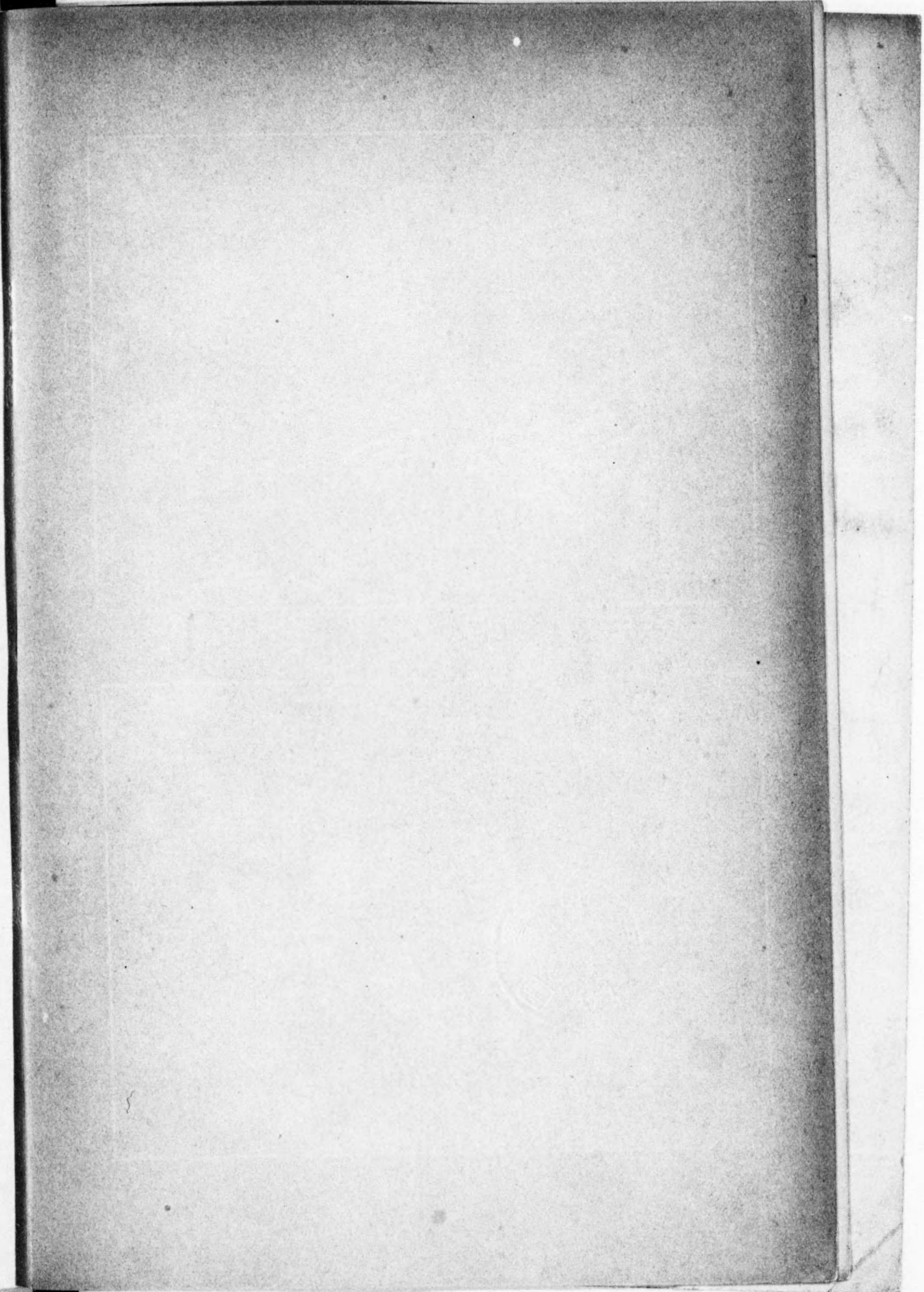


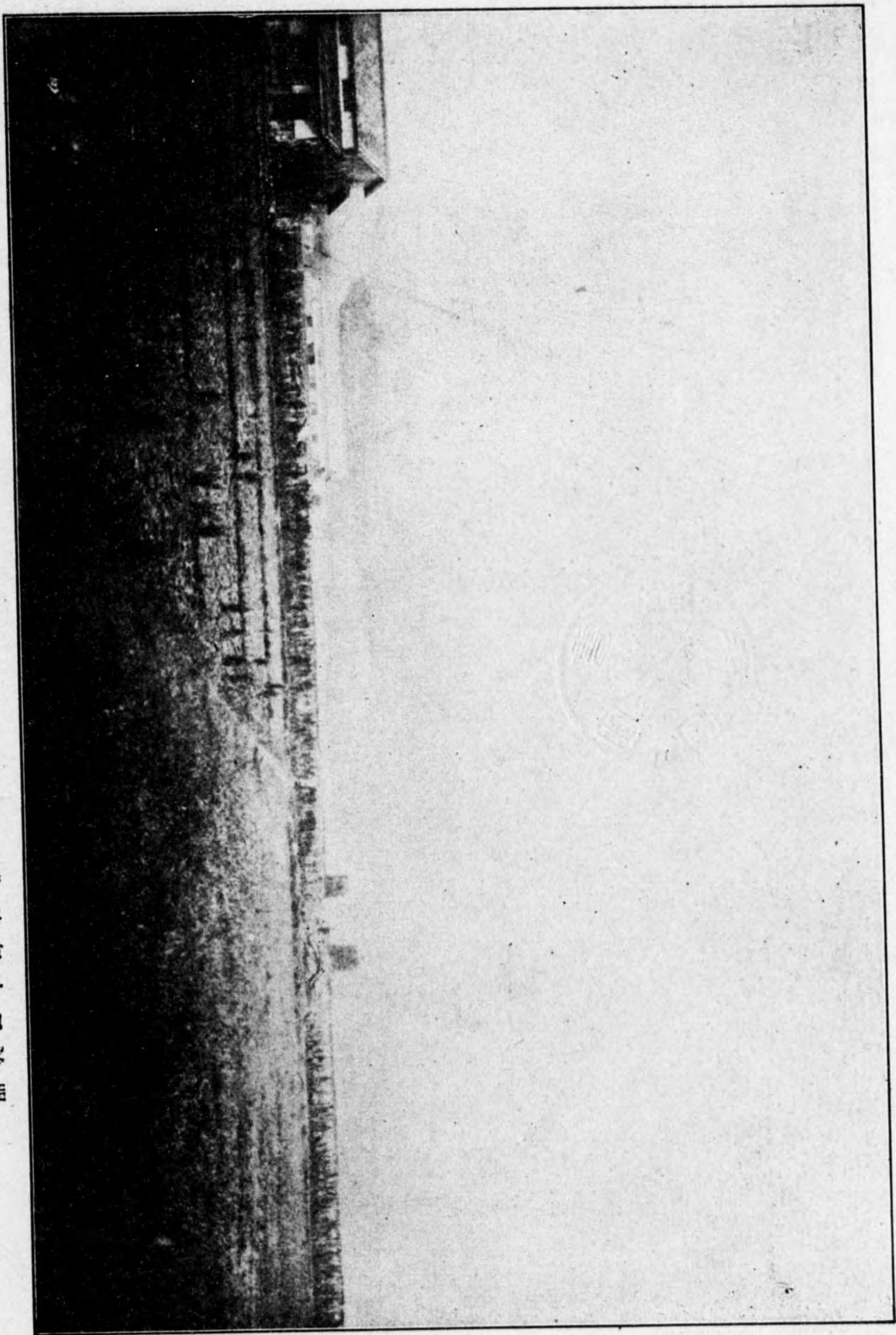


明治七年の今宮村地圖

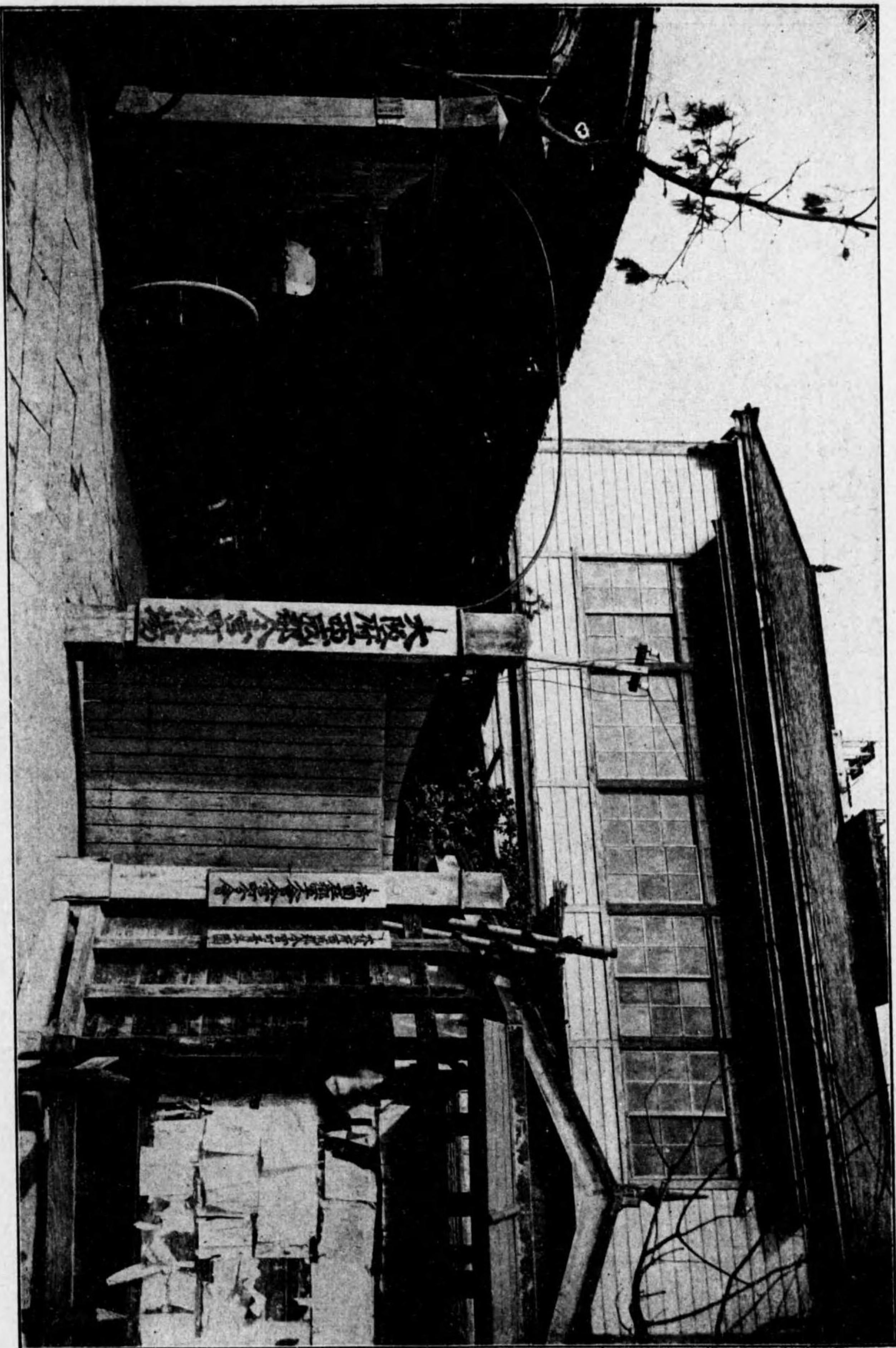


明治十五年の今宮村地圖



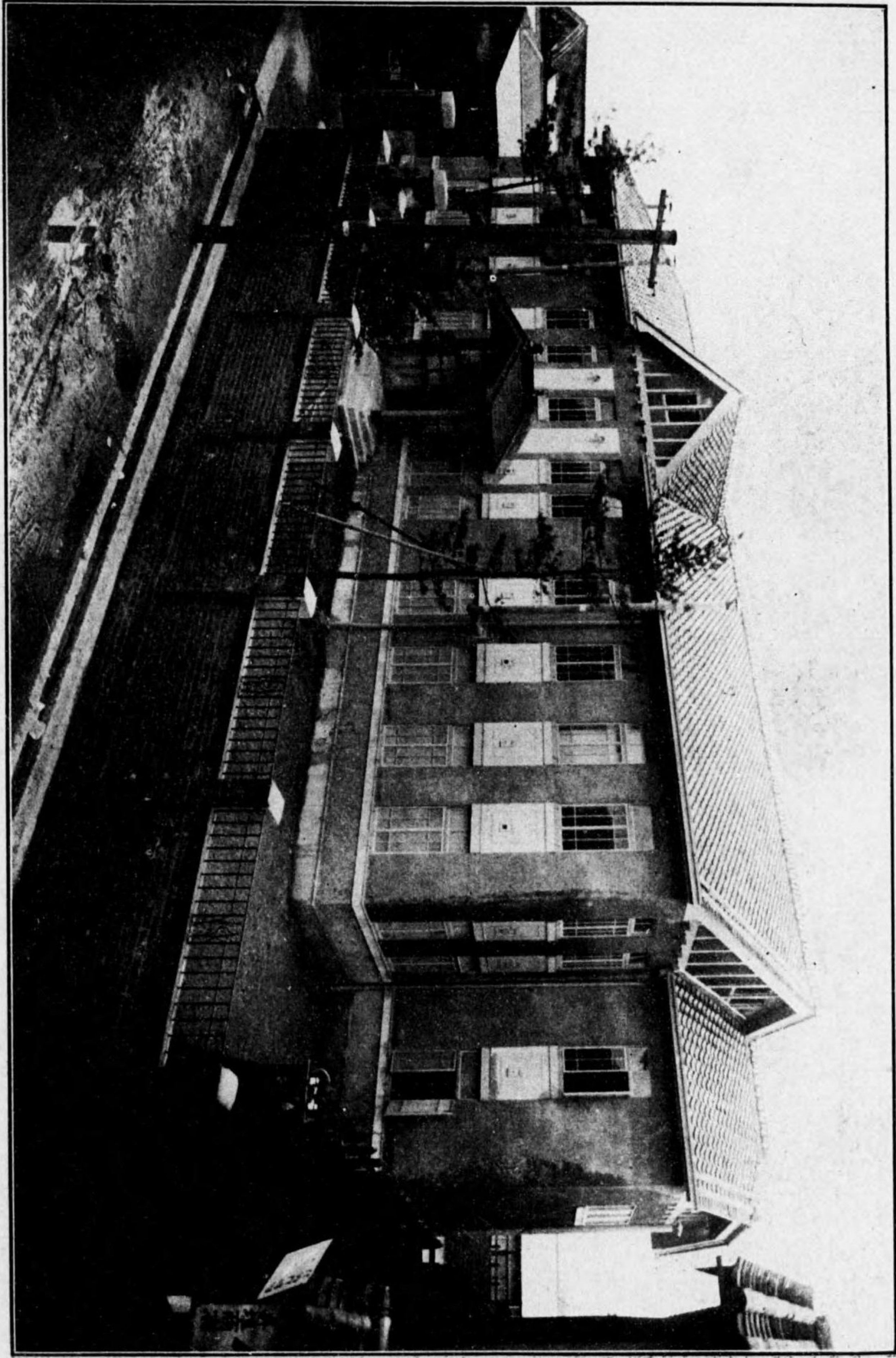


(明治三十三年今宮町附近) 新世界一里寺望む



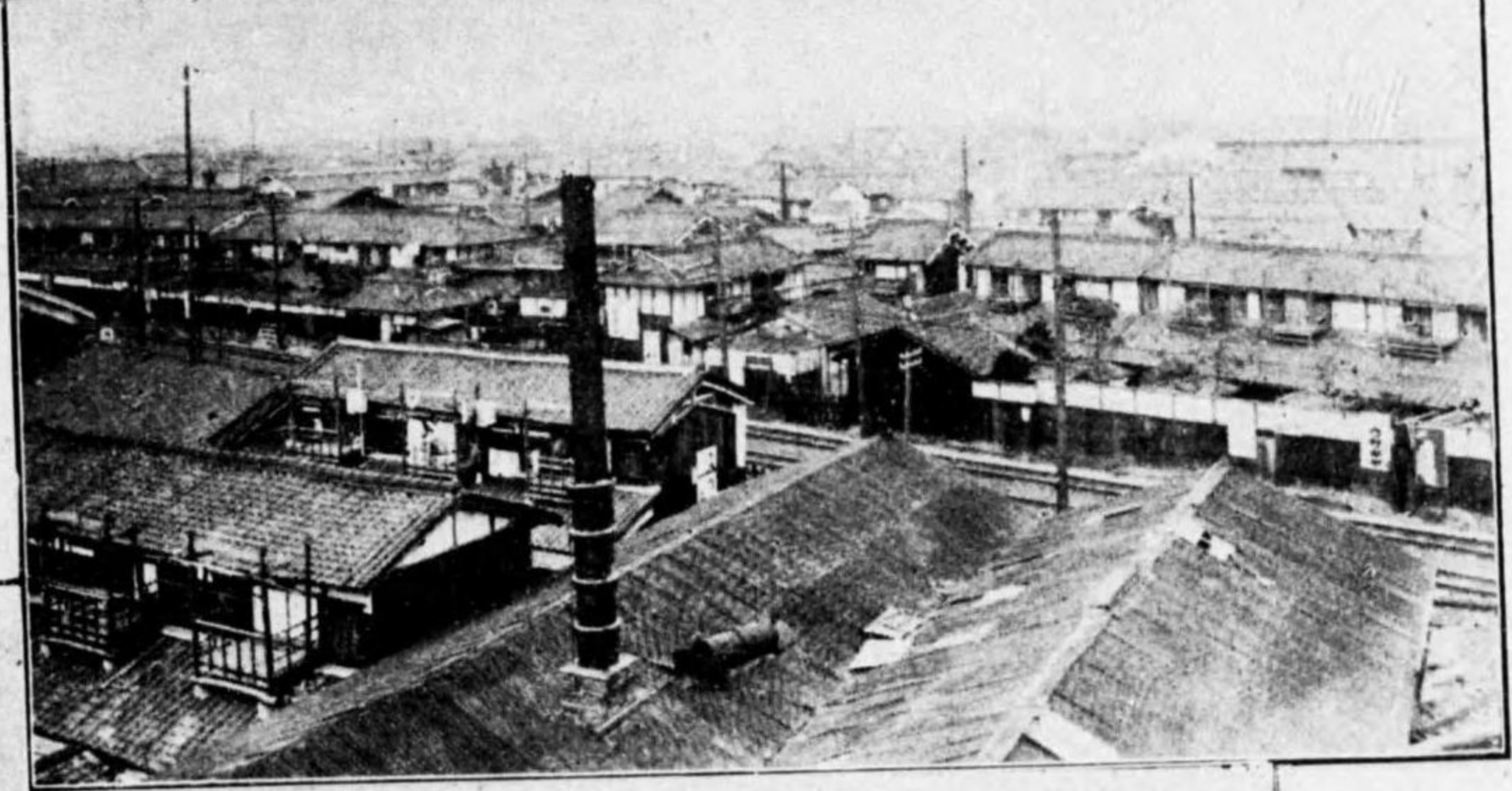
今宮町 廳舎

今宮町立公民病院



(南望)

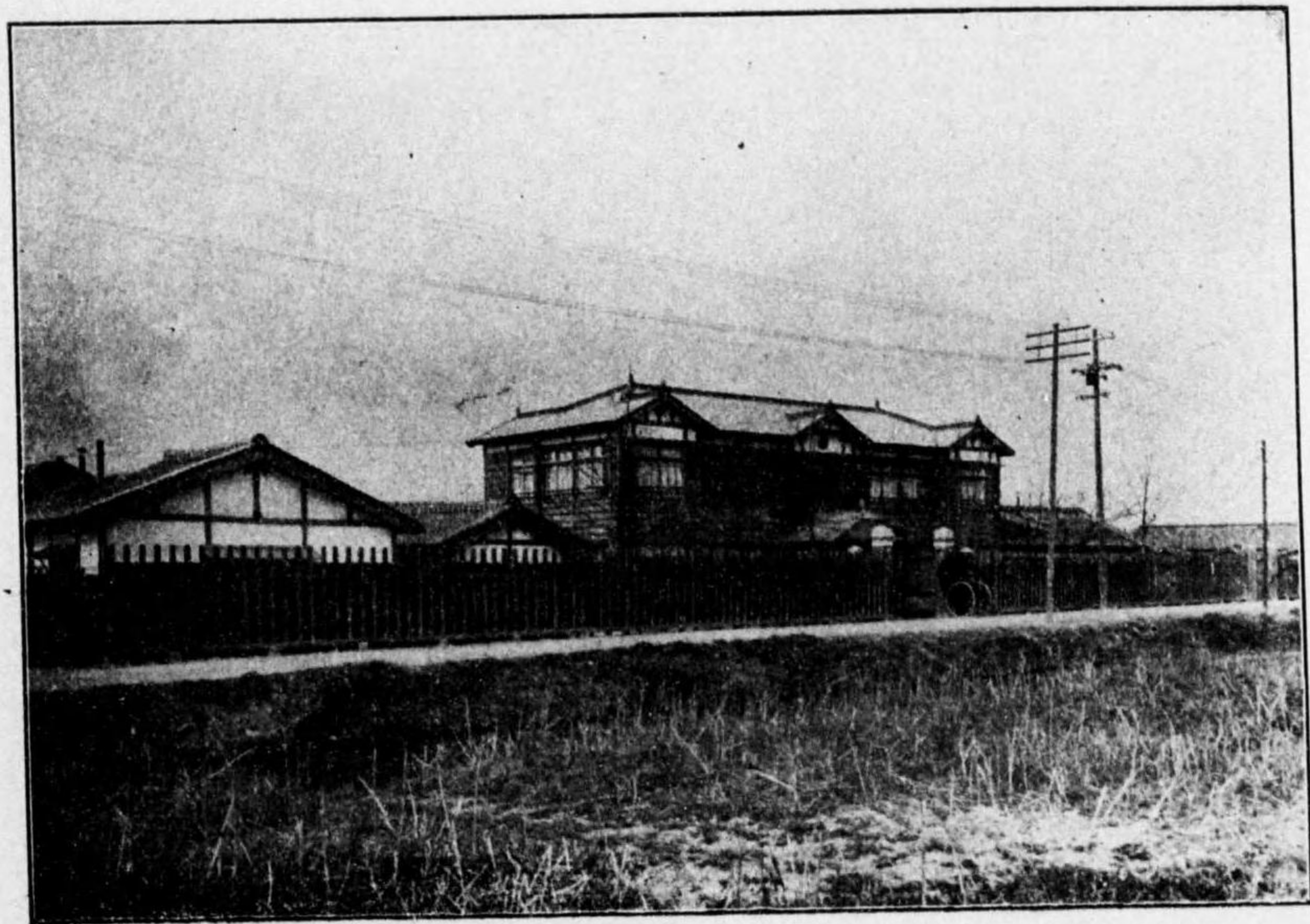
展望上屋舎



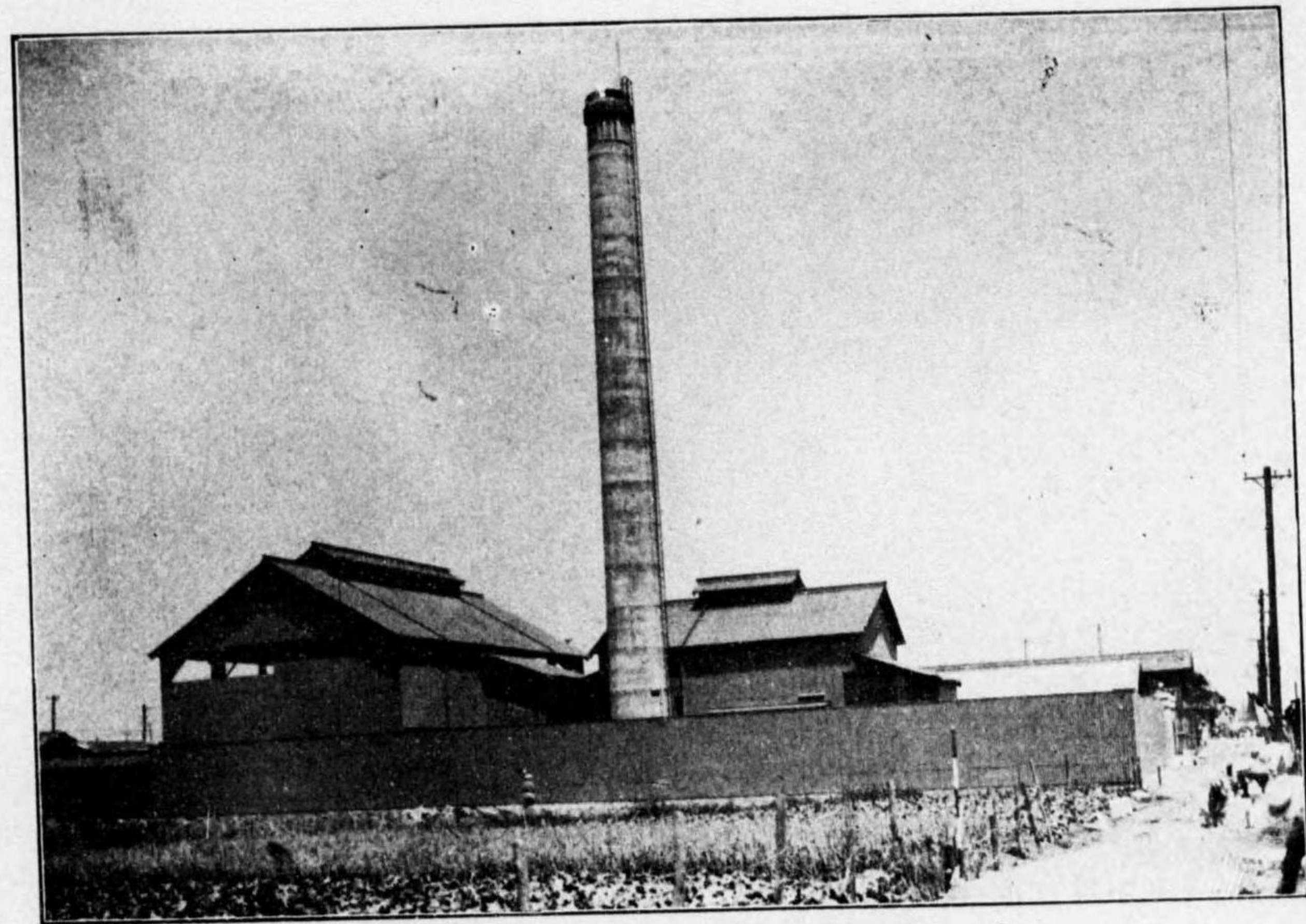
(東望)



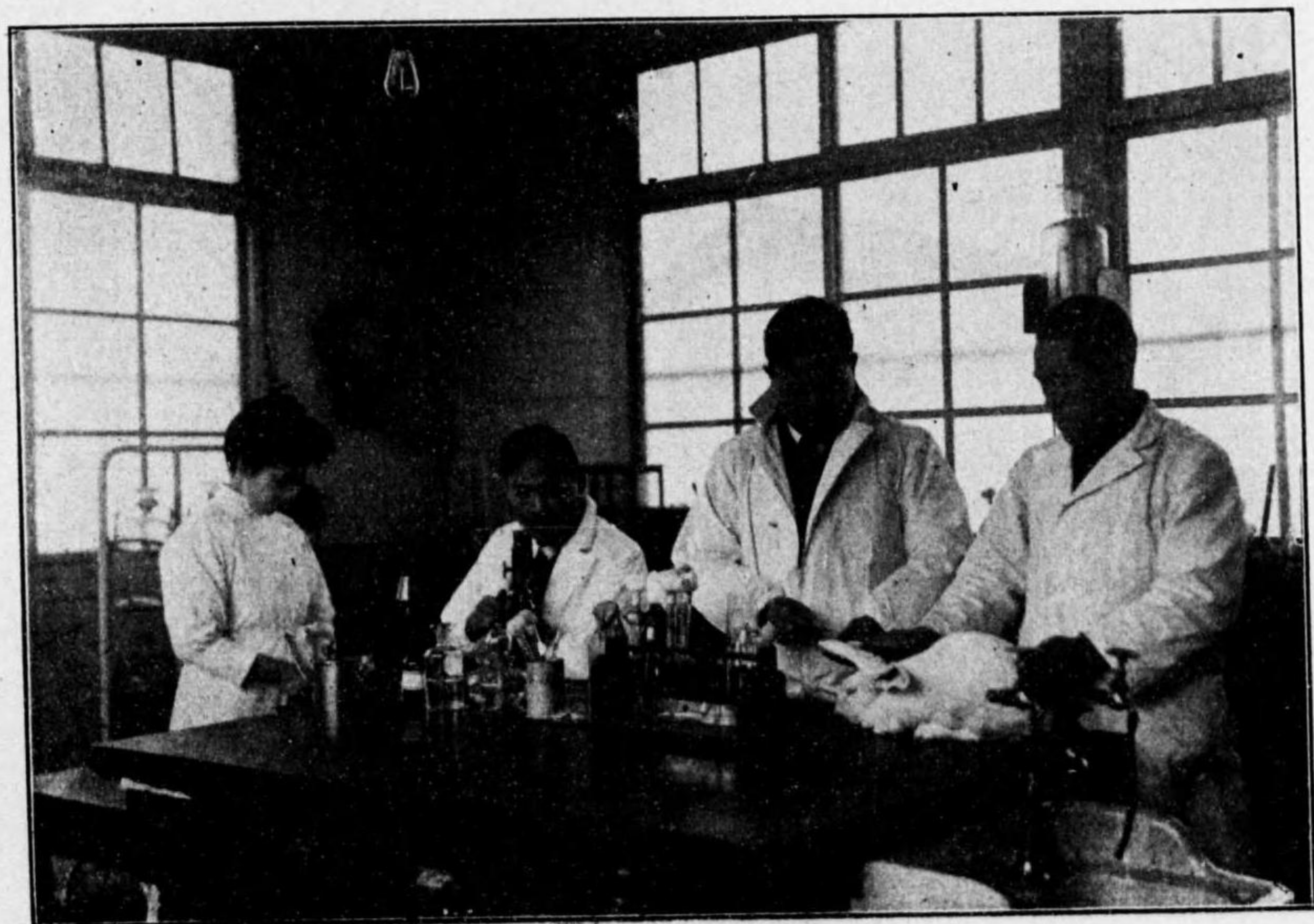
(西望)



組 合 病 院 全 景



今 宮 町 麻 芥 燒 却 場



組 合 病 院 研 究 室



今 宮 町 立 職 業 紹 介 所



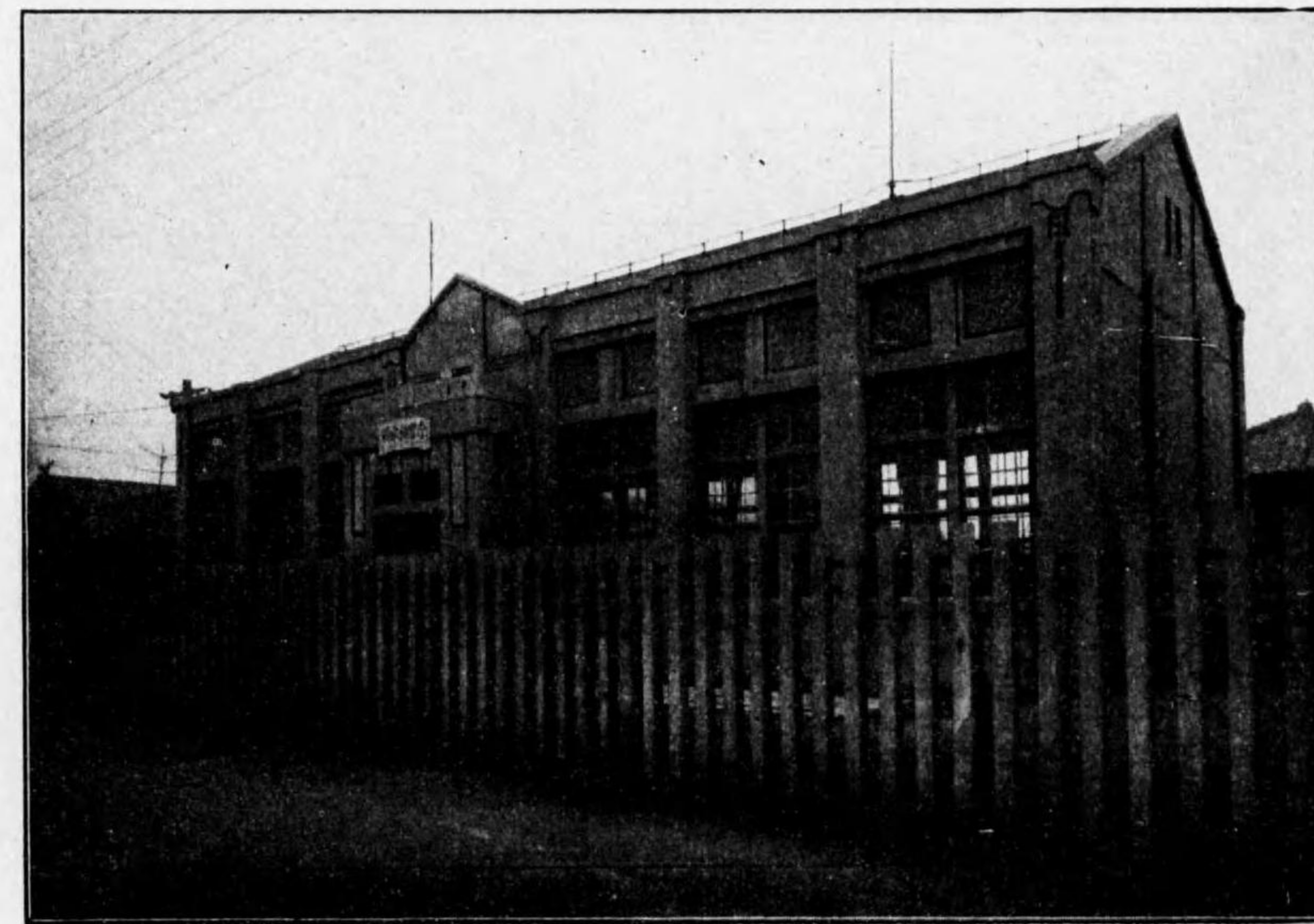
町營鶴見橋公設市場



町營花園公設市場



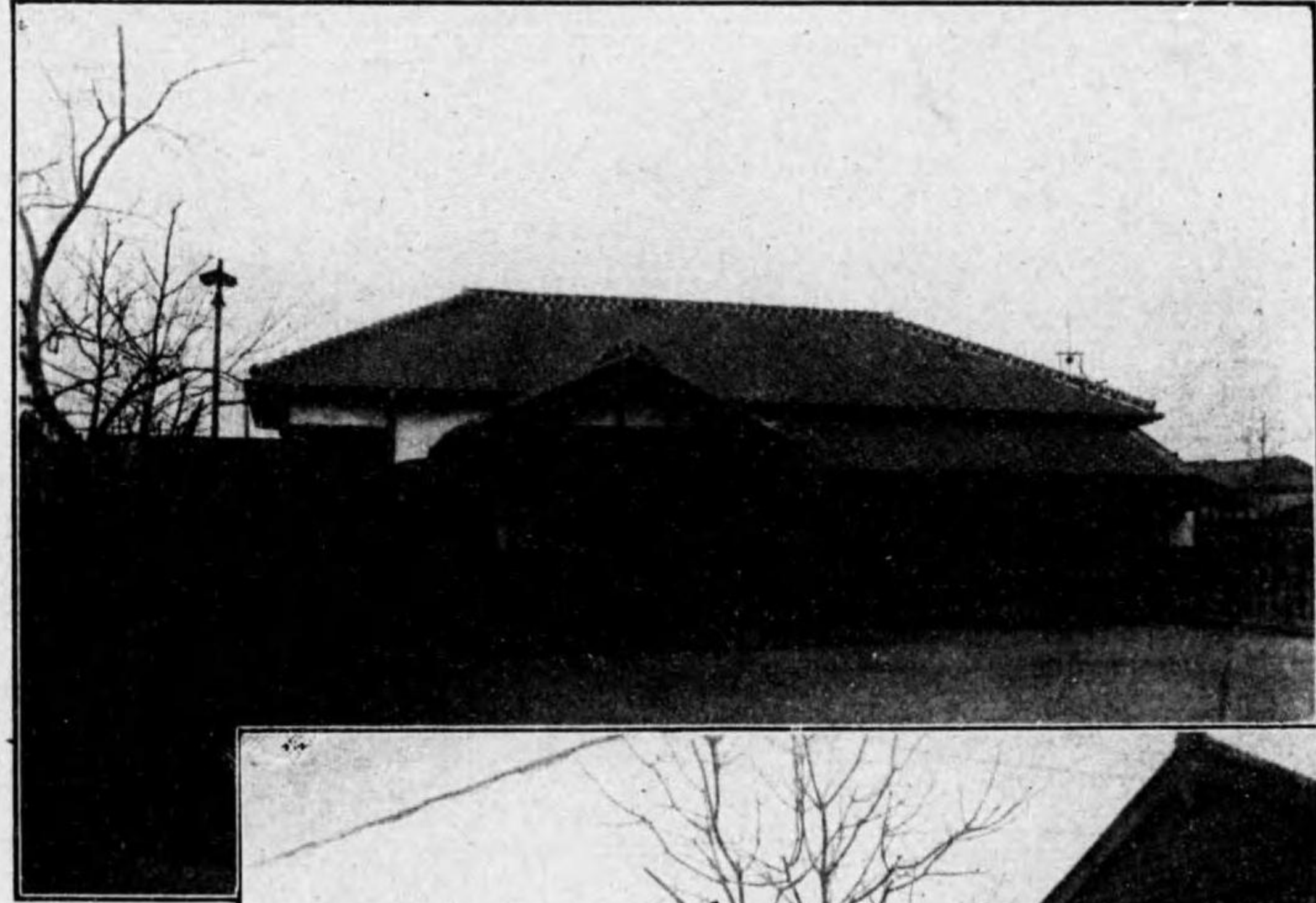
今宮村水道布設工事



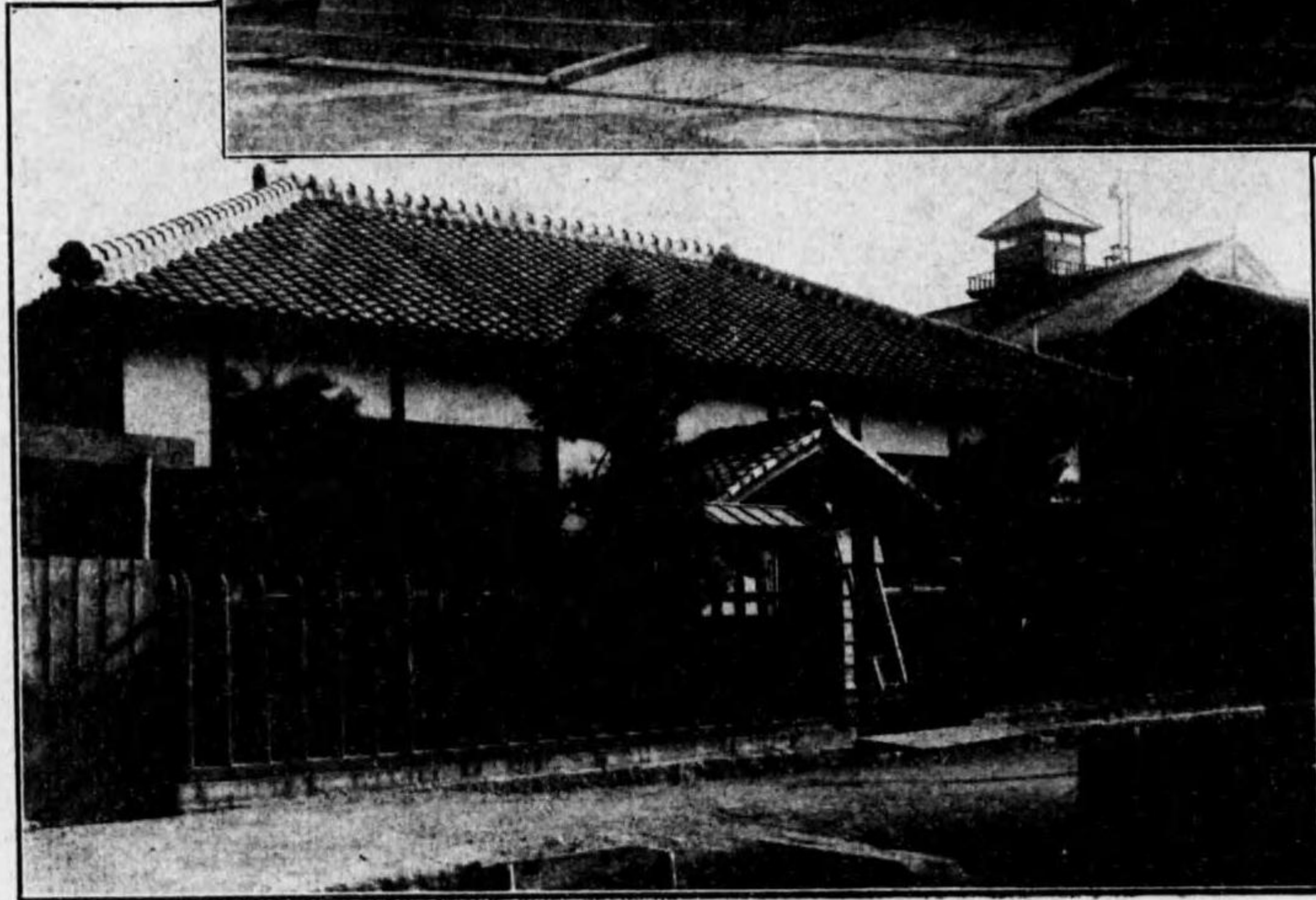
大阪今宮抽水所

前記左より 四谷村長、柴田助役、宮本議員、藤田収入役、伊原議員、柴議員、東野監督、中央向テ左ヨリ、三人目、安部主任

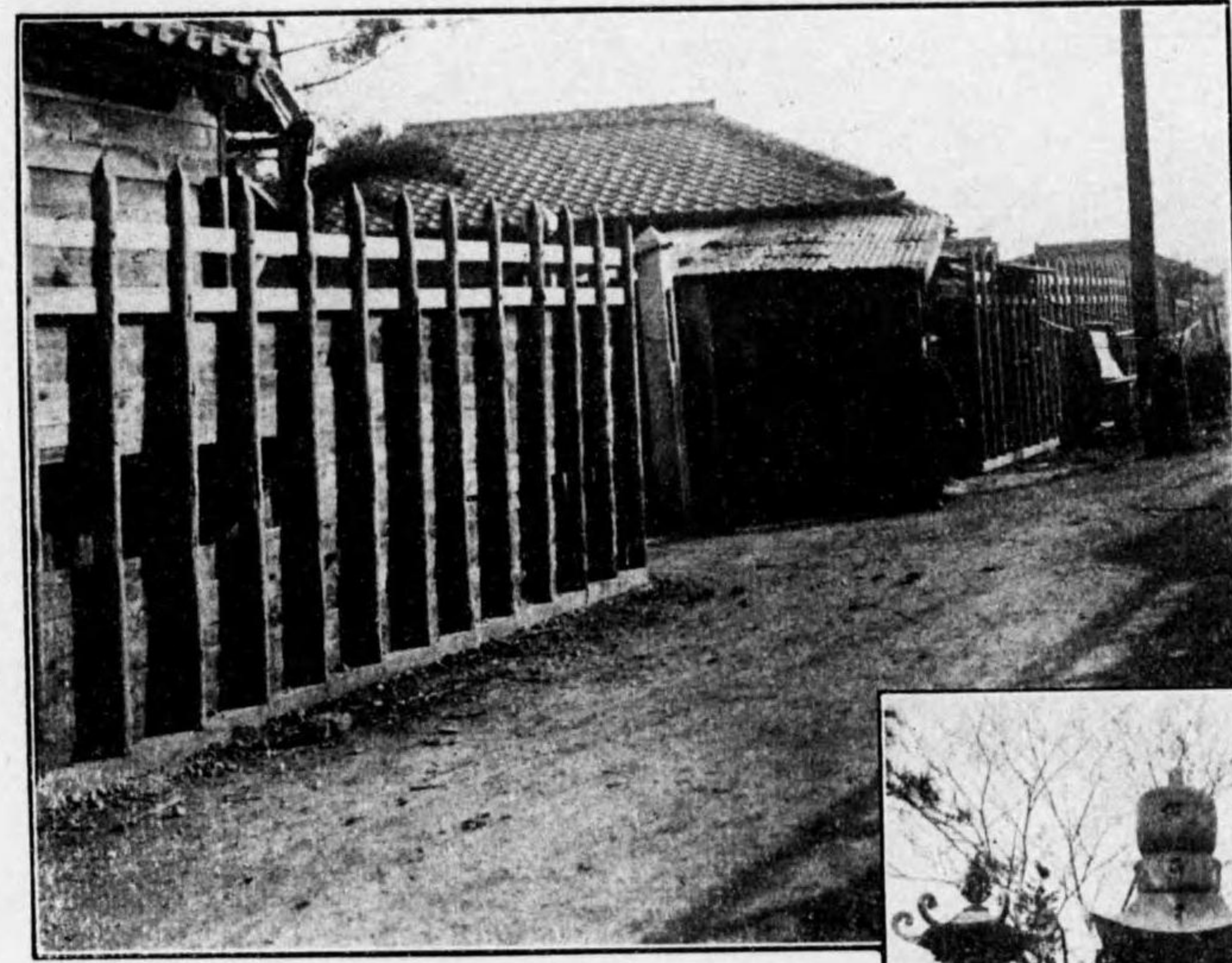
四 恩 學 園



自 彊 館



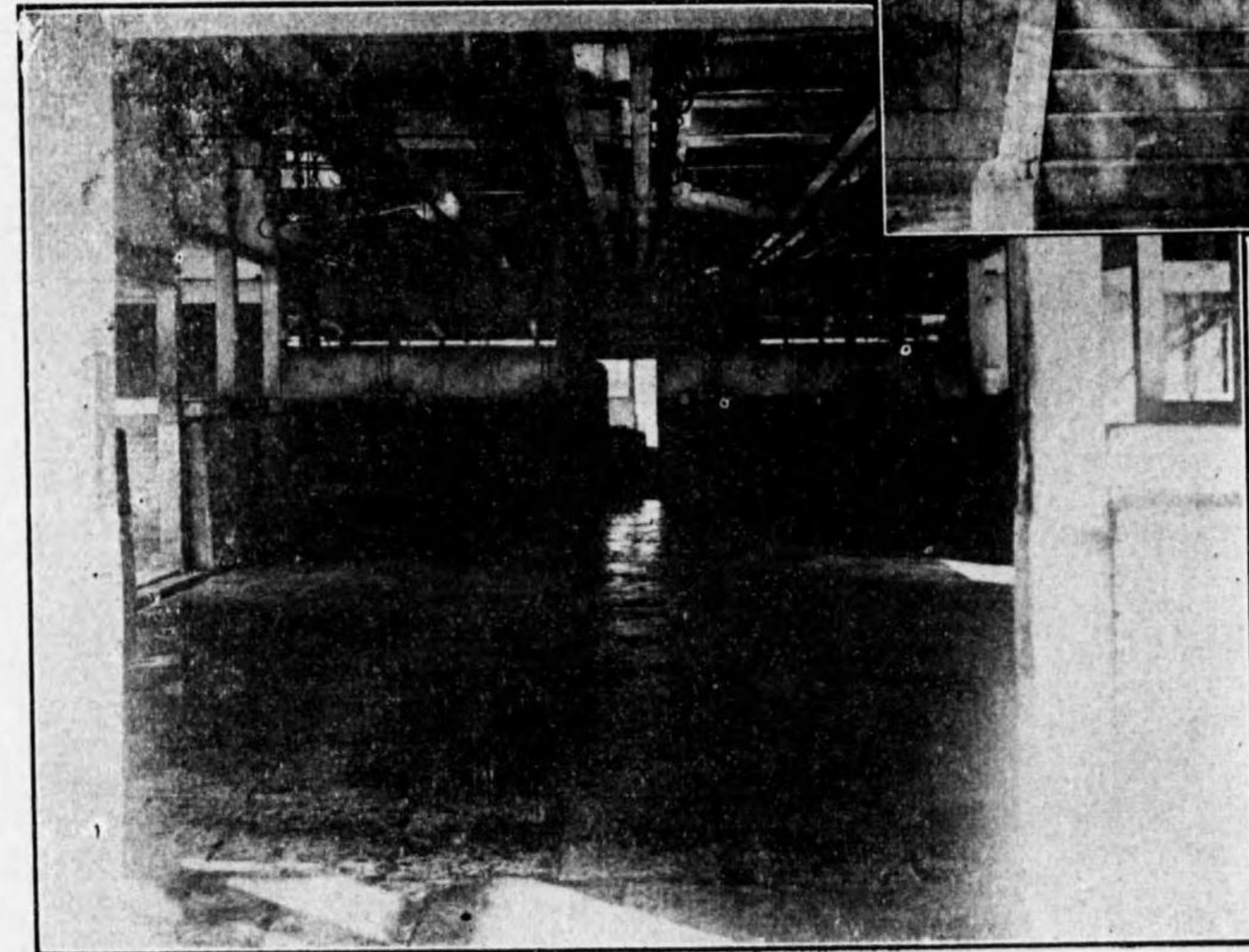
館 書 圖



屠 牛 場 入 口



牛 魂 碑



屠 殺 場



御 繪 旨

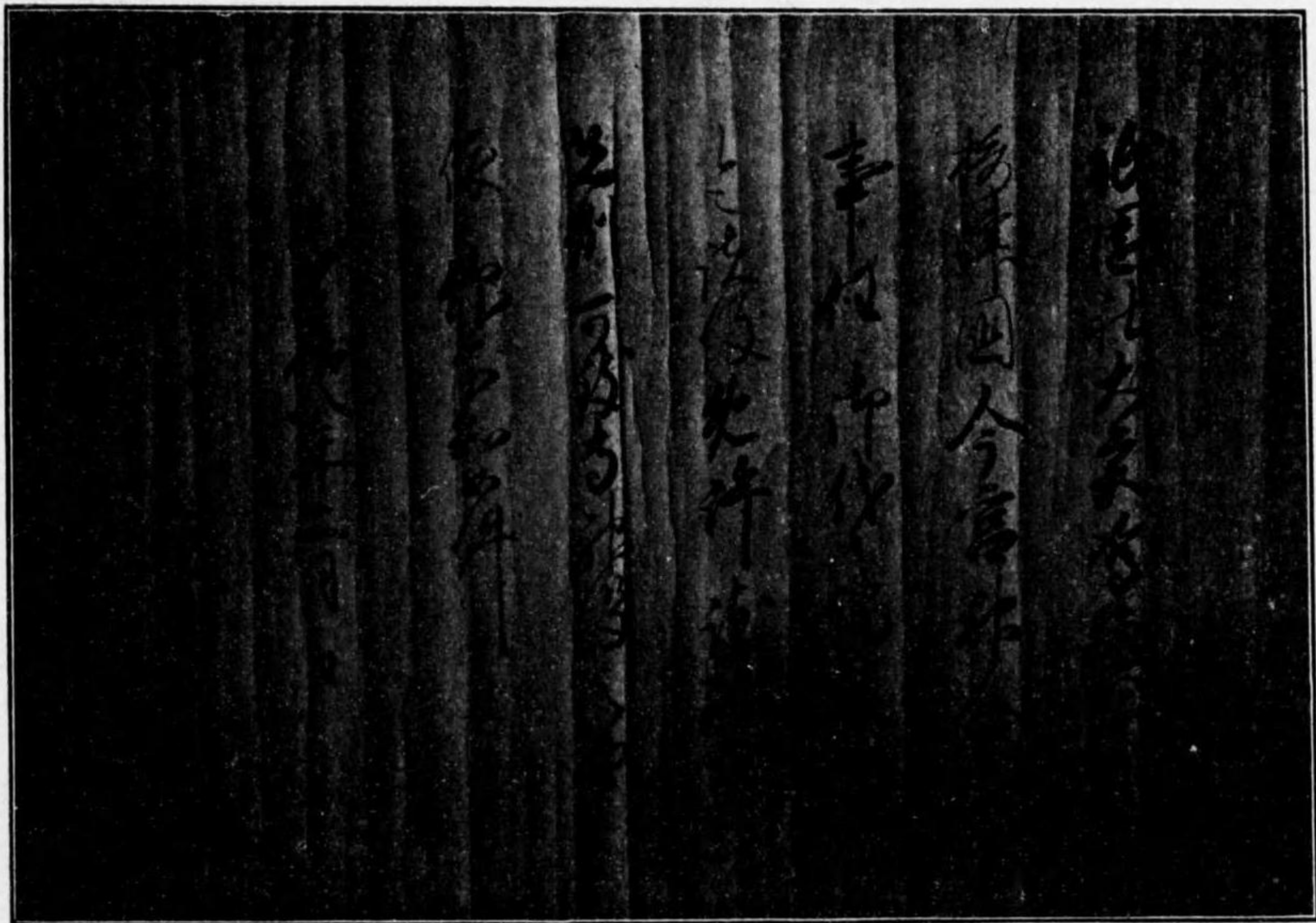
今宮神社寶物(一)



宣 旨

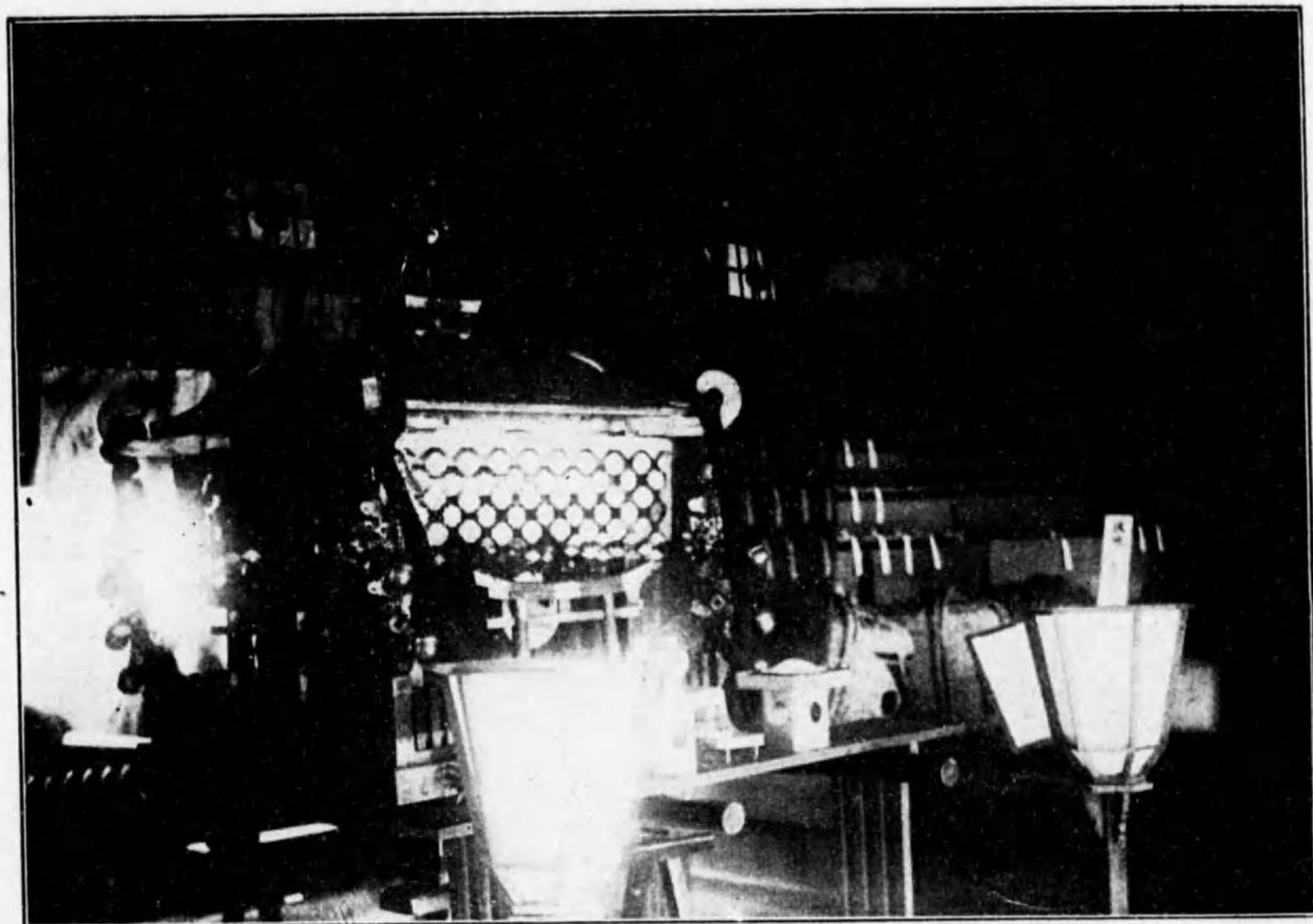


下 知 狀



下 知 狀

今宮神社寶物(二)



與 神 戎 日 十



者 詣 參 の 戎 日 十



下
知
狀



禁
裡
御
用
札

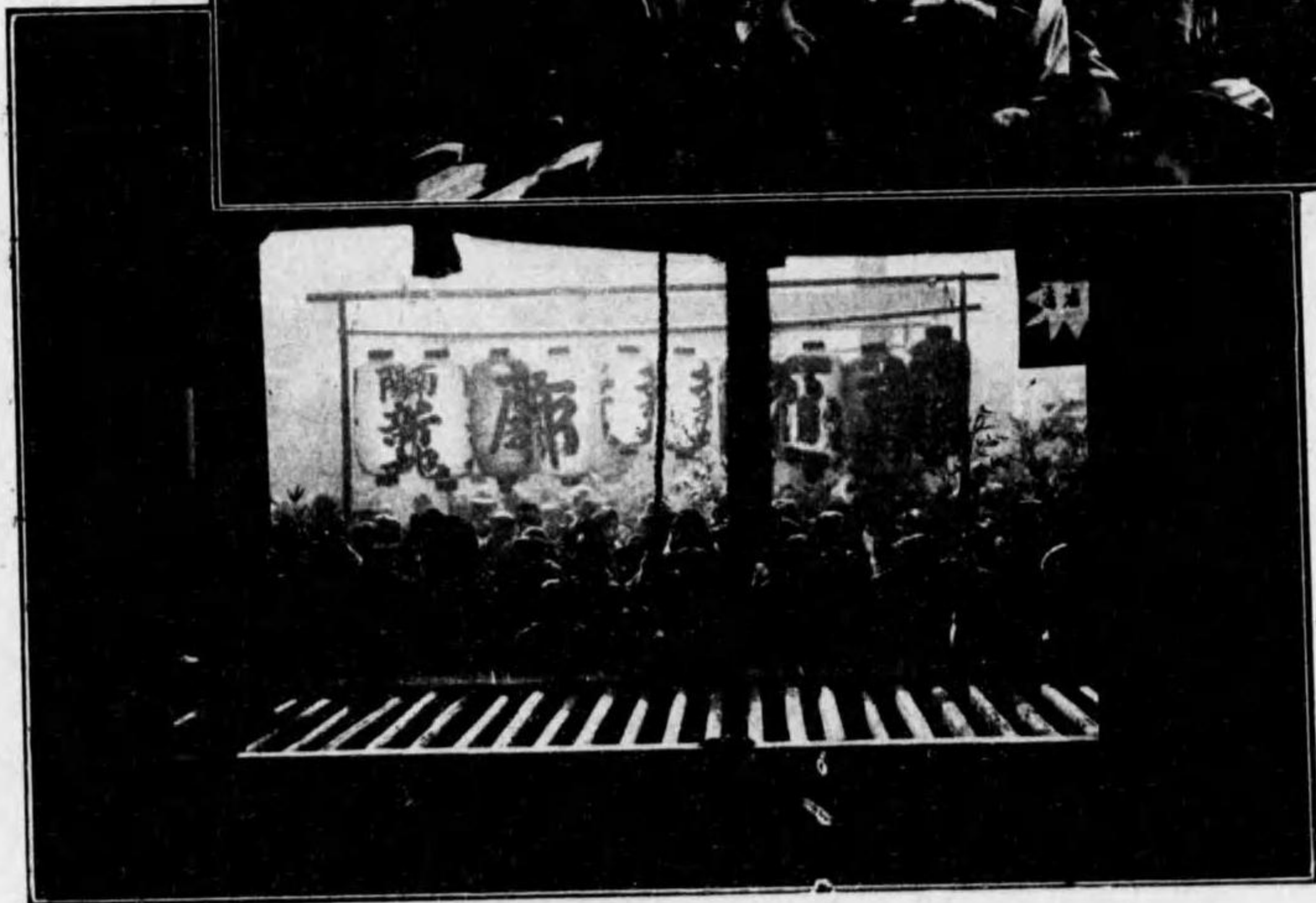
(三) 物 寶 社 神 宮 今



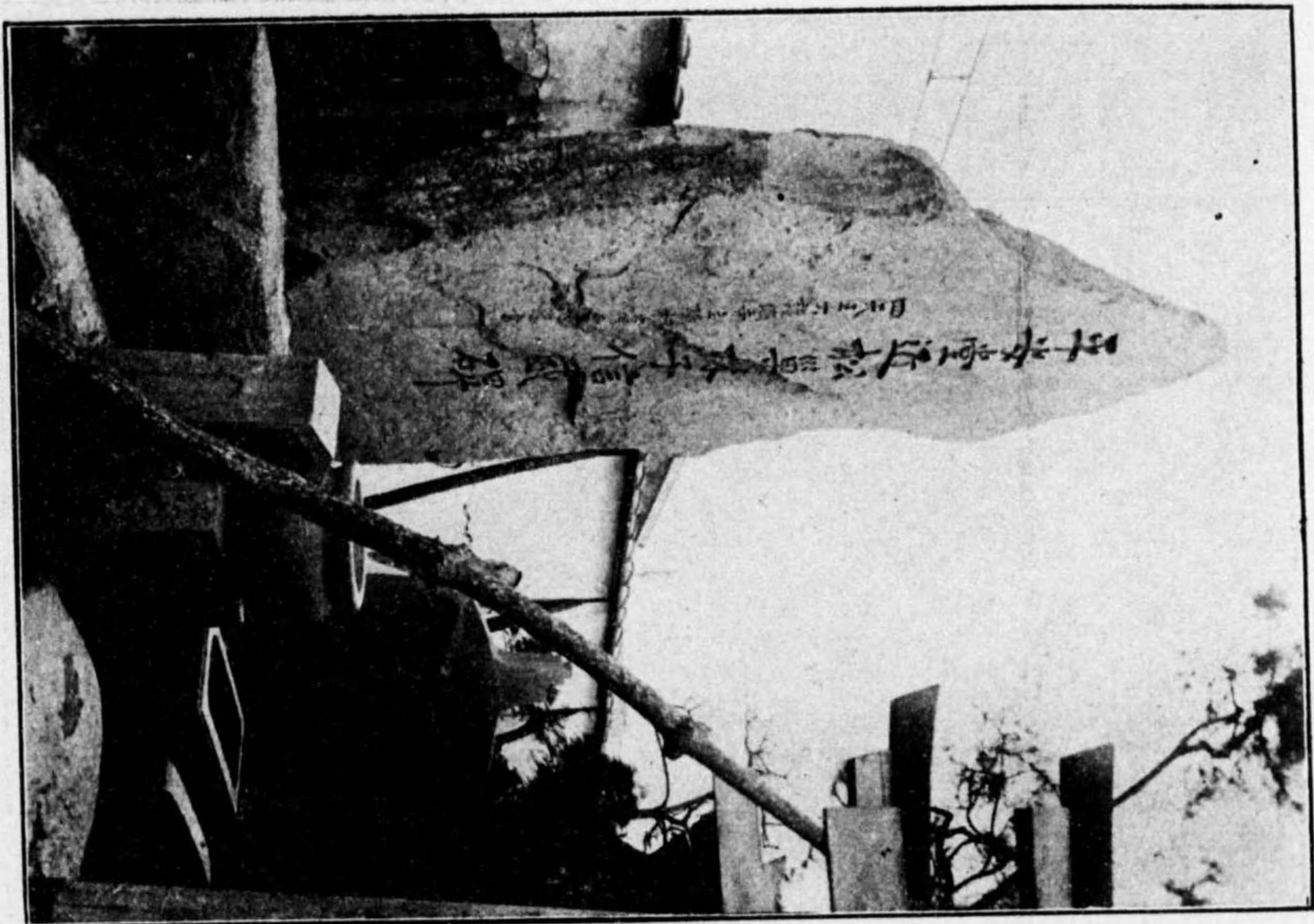
(一) 詣参の君游戎日十



(二) 詣参の君游戎日十



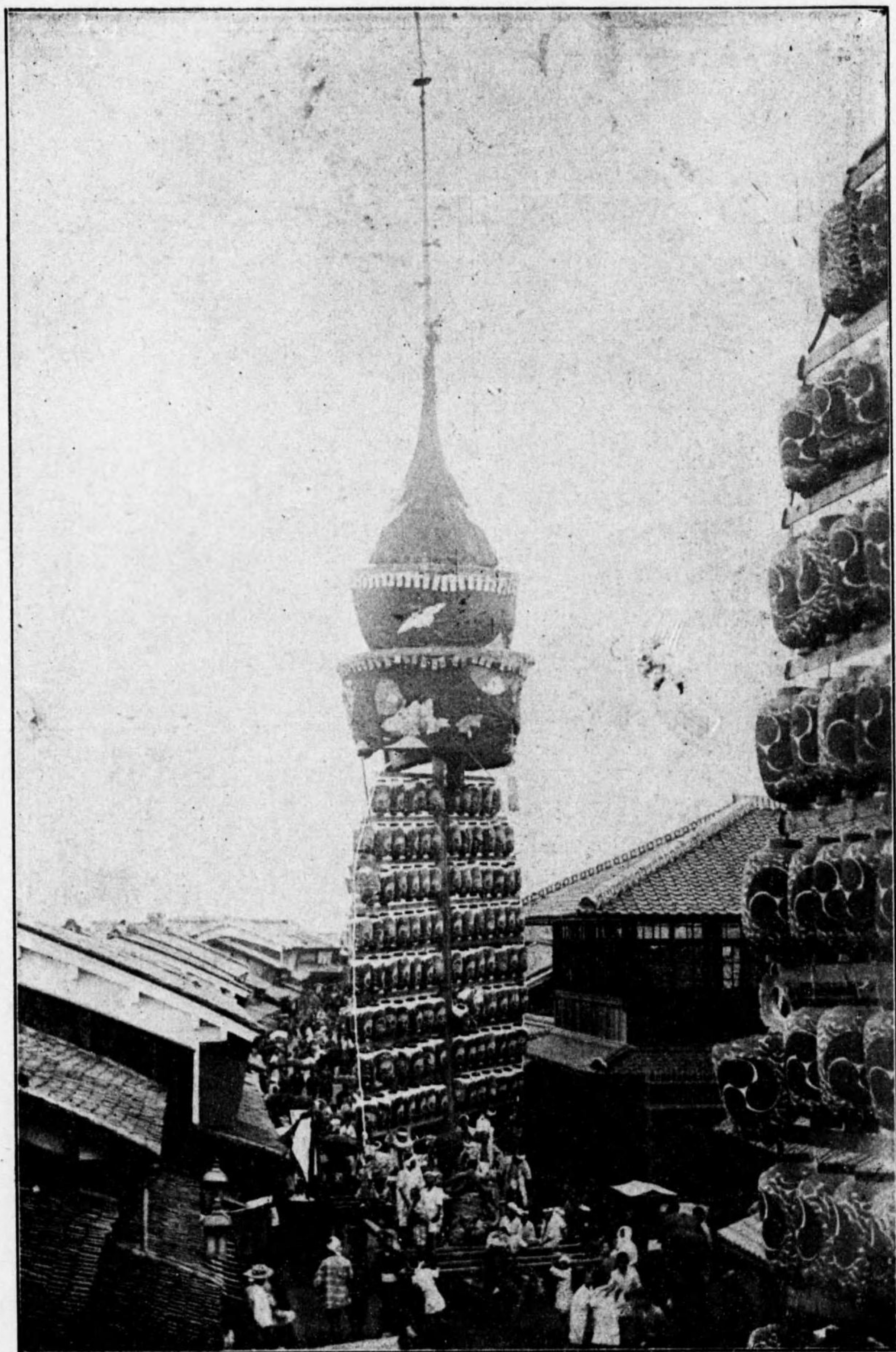
景状の祭大戎日十社神宮今



猫塚及近松集林子碑



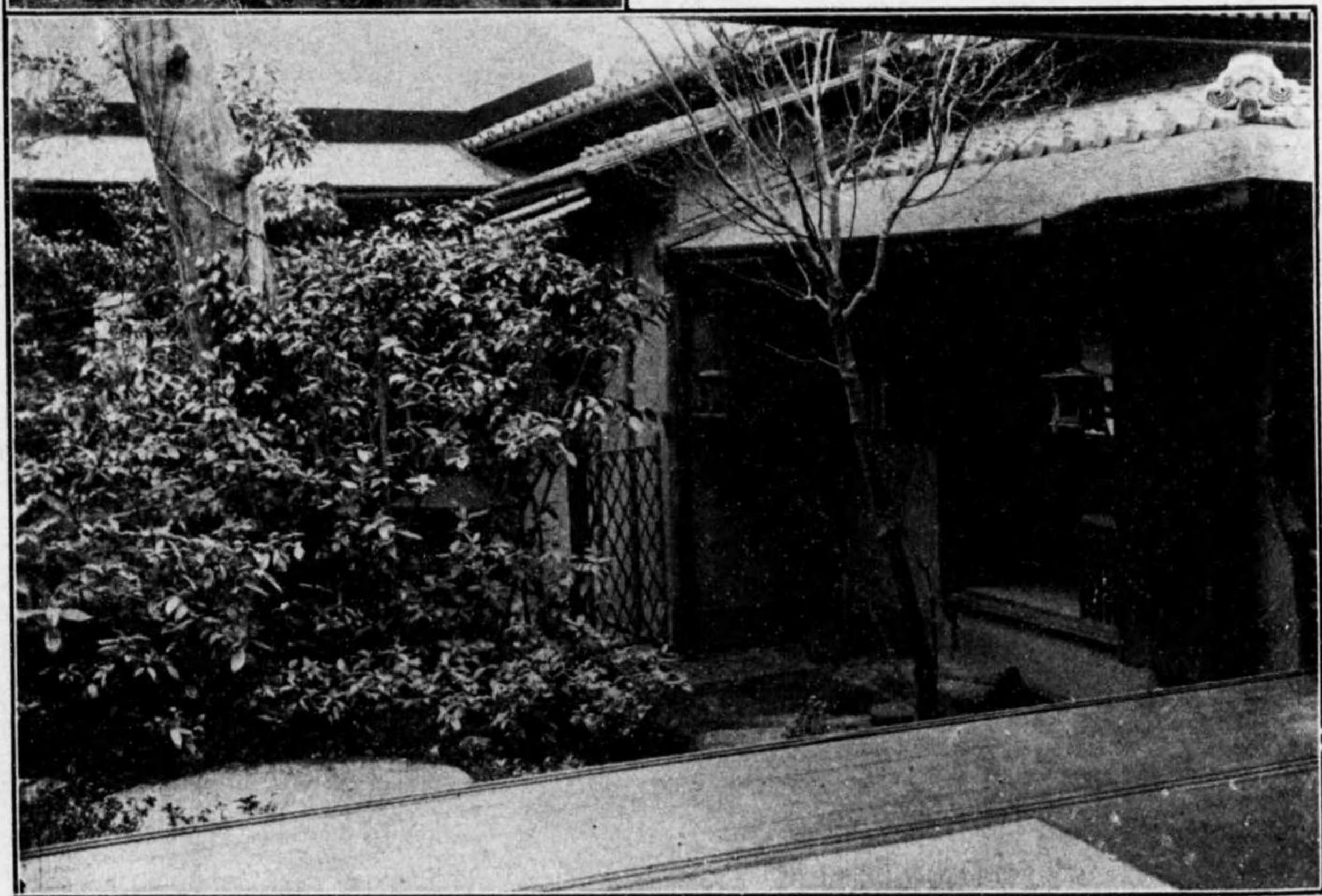
木津勘助像



臺泉の實況



今宮來山偽藏
古今利美人人形
來山人形記二卷添

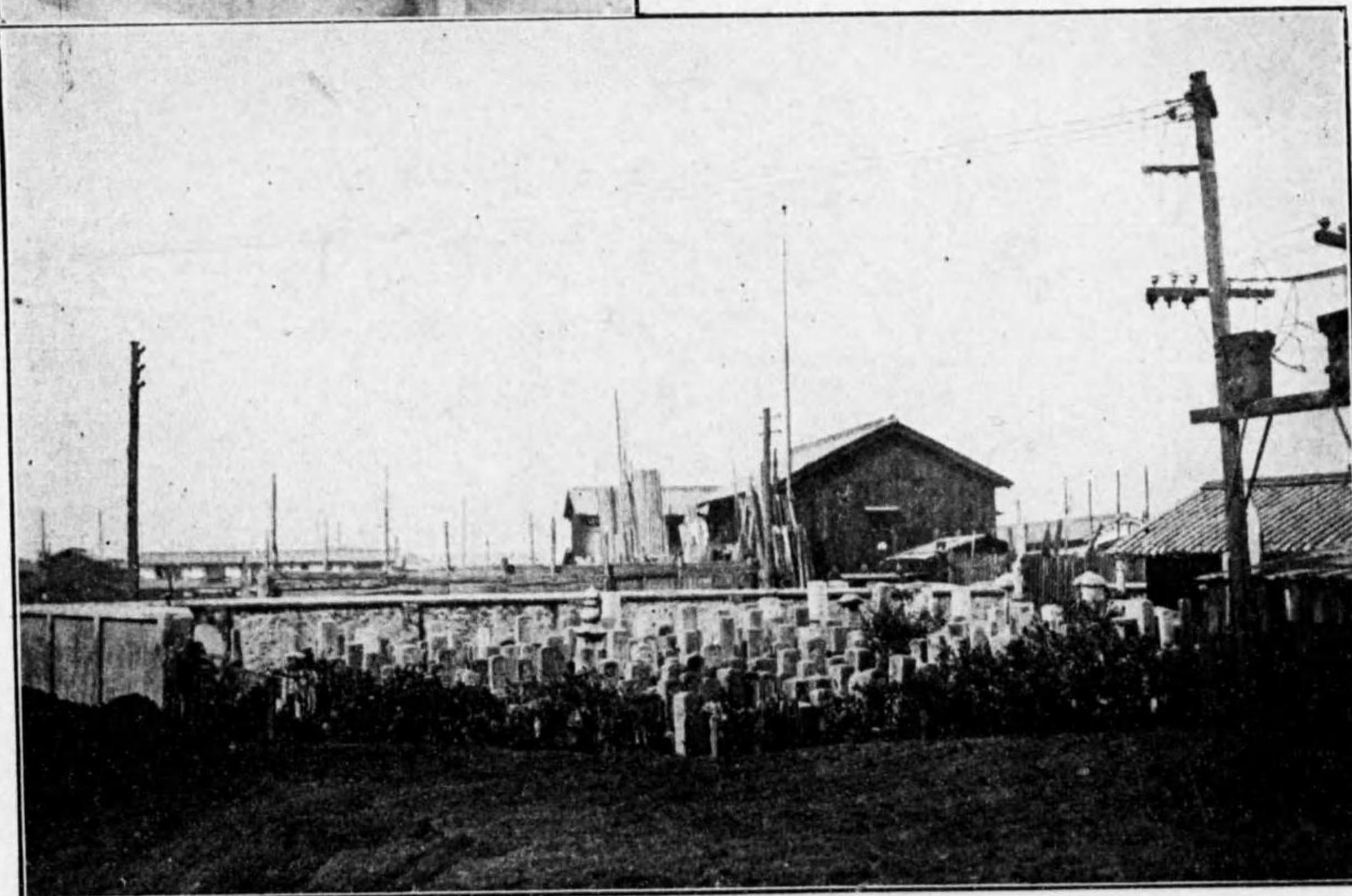


間山茶來(下) 墓山來(左上) 形人玩愛山來(右上)

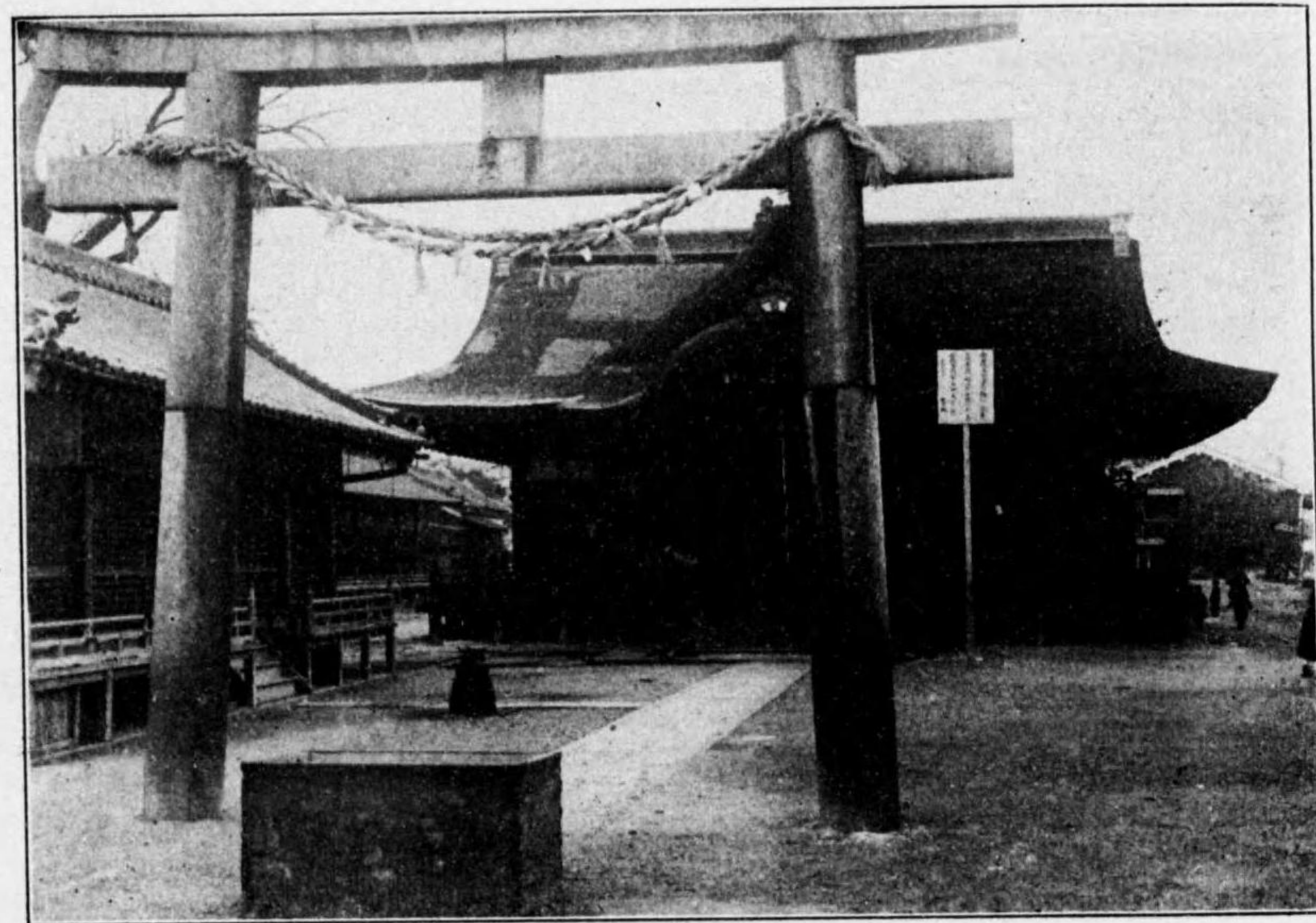
向佛(一體)



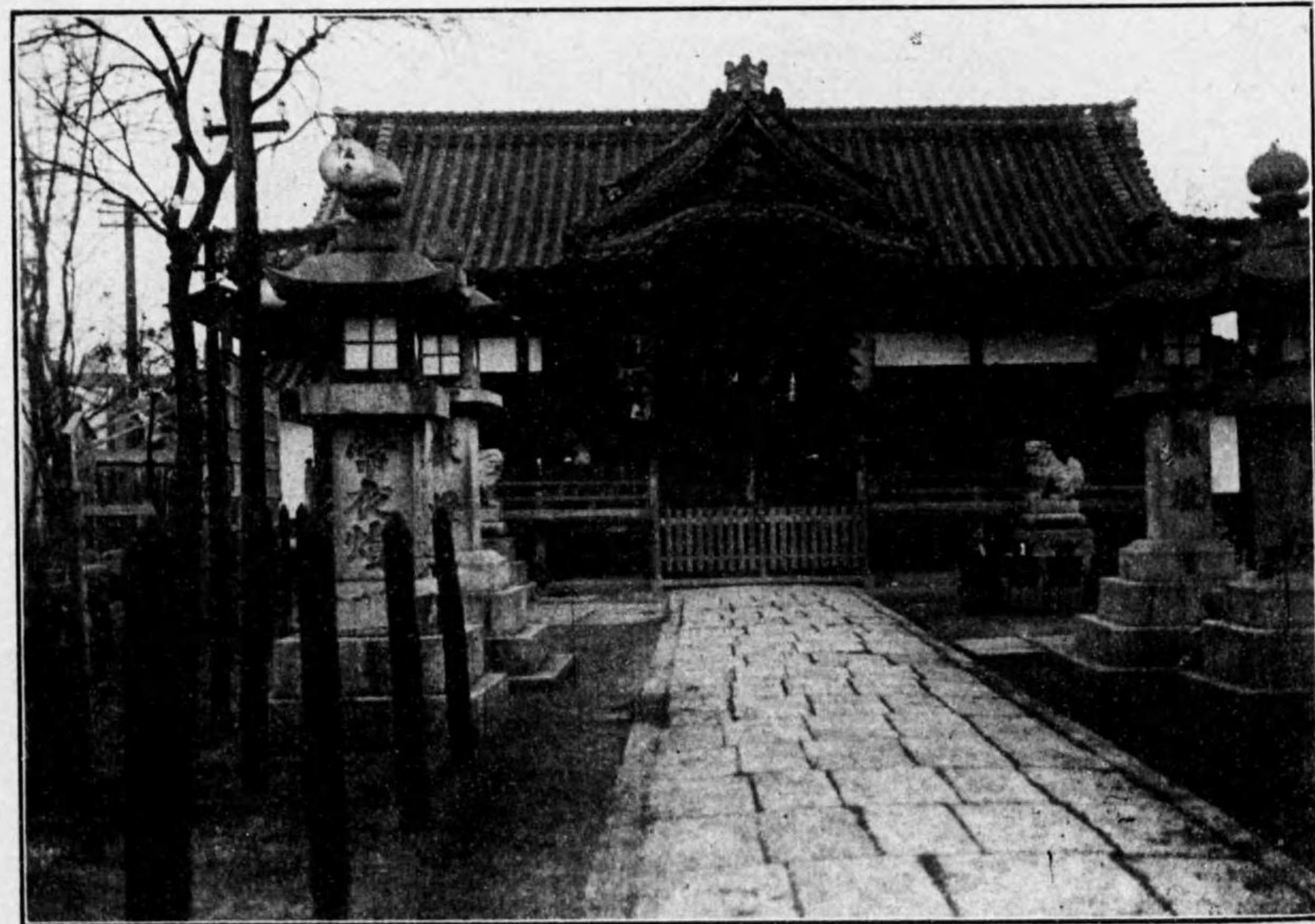
飛田墓址の殘碑



元木津の墓地



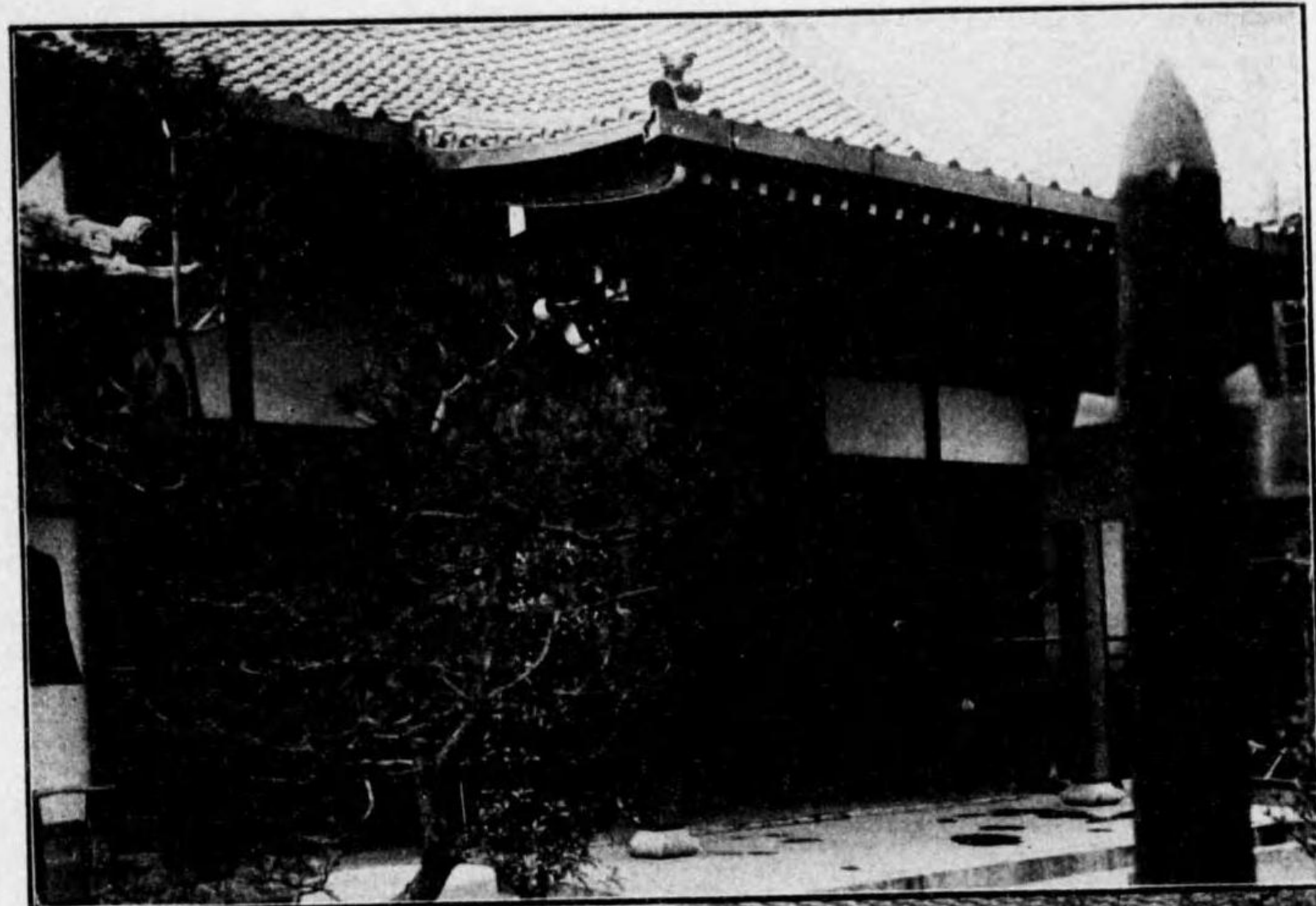
今宮神社正殿



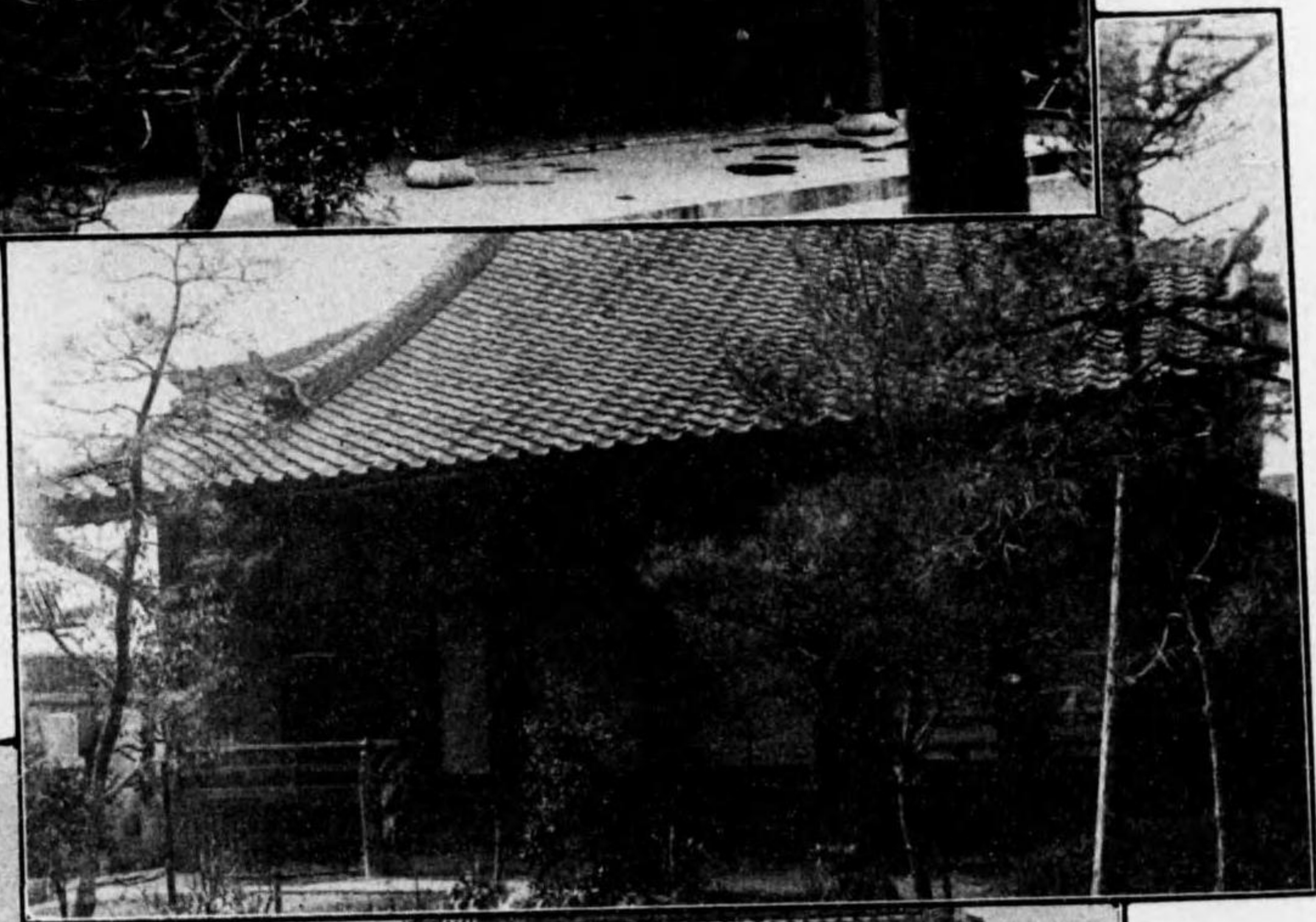
廣田神社正殿



(上左) 鐘 (上右) 來山筆蹟 (下) 來山像及女人形



圓融寺

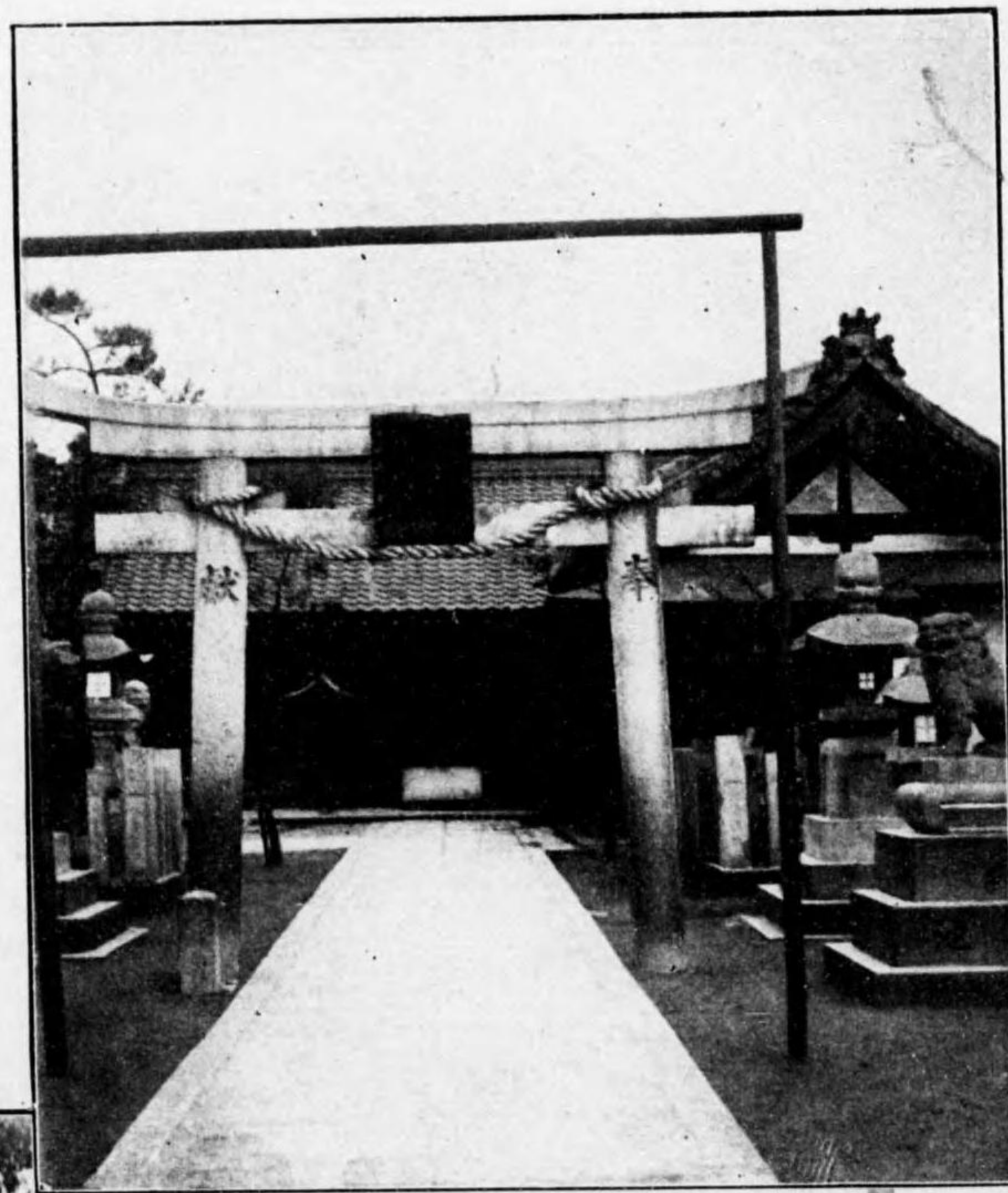


正樂寺



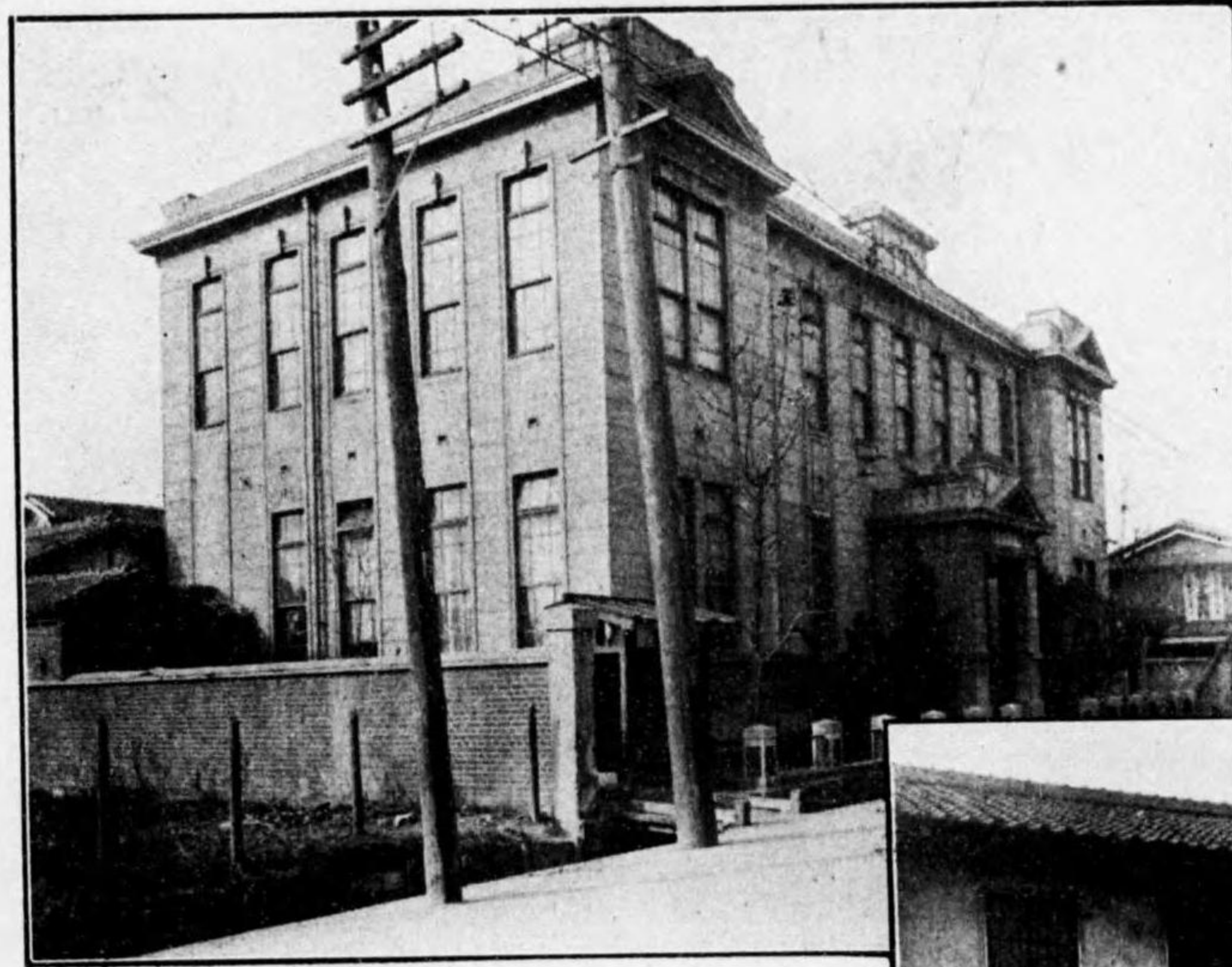
淨安寺

大國神社



敷津松ノ宮神社

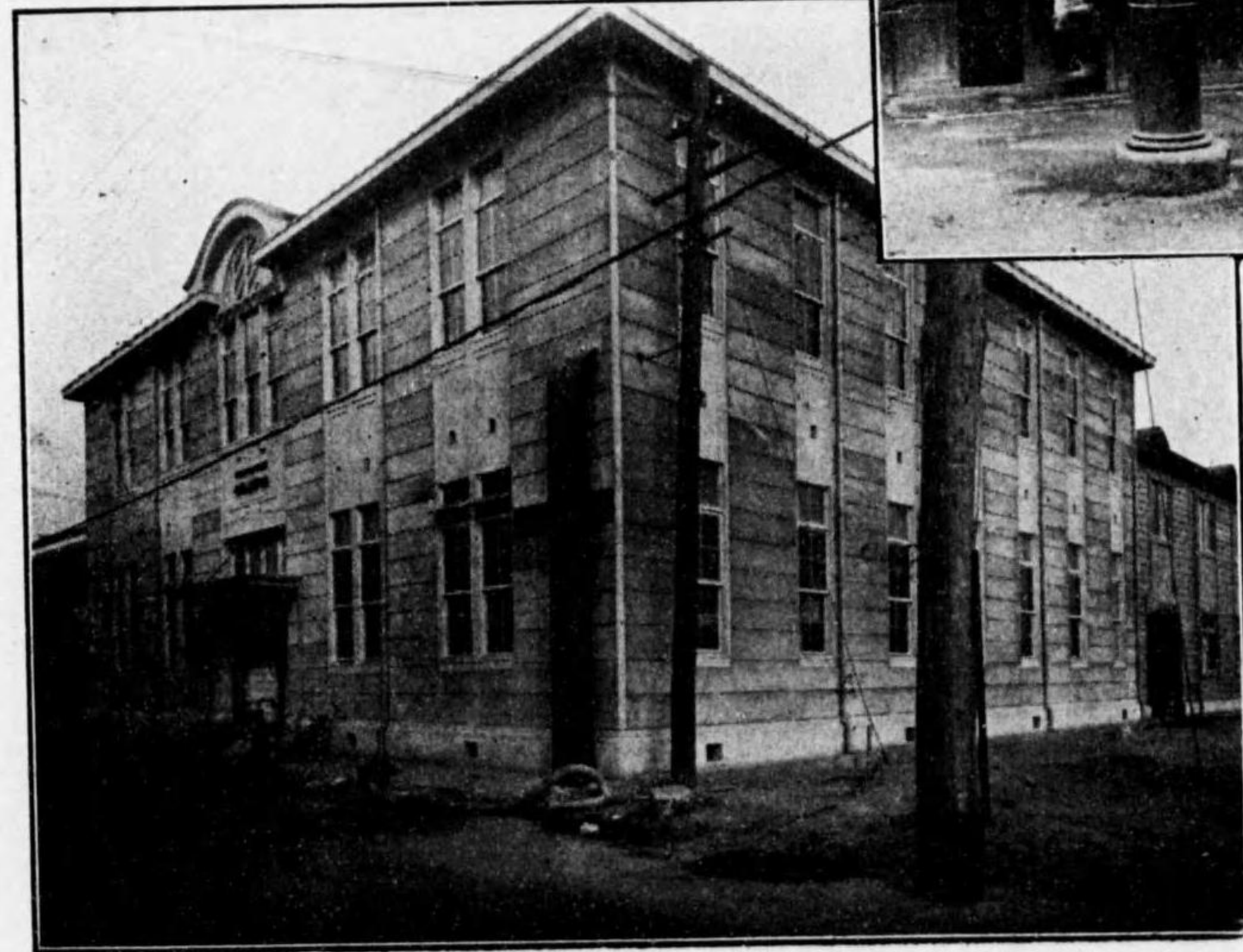
(種三) 景光の時ヶ釜



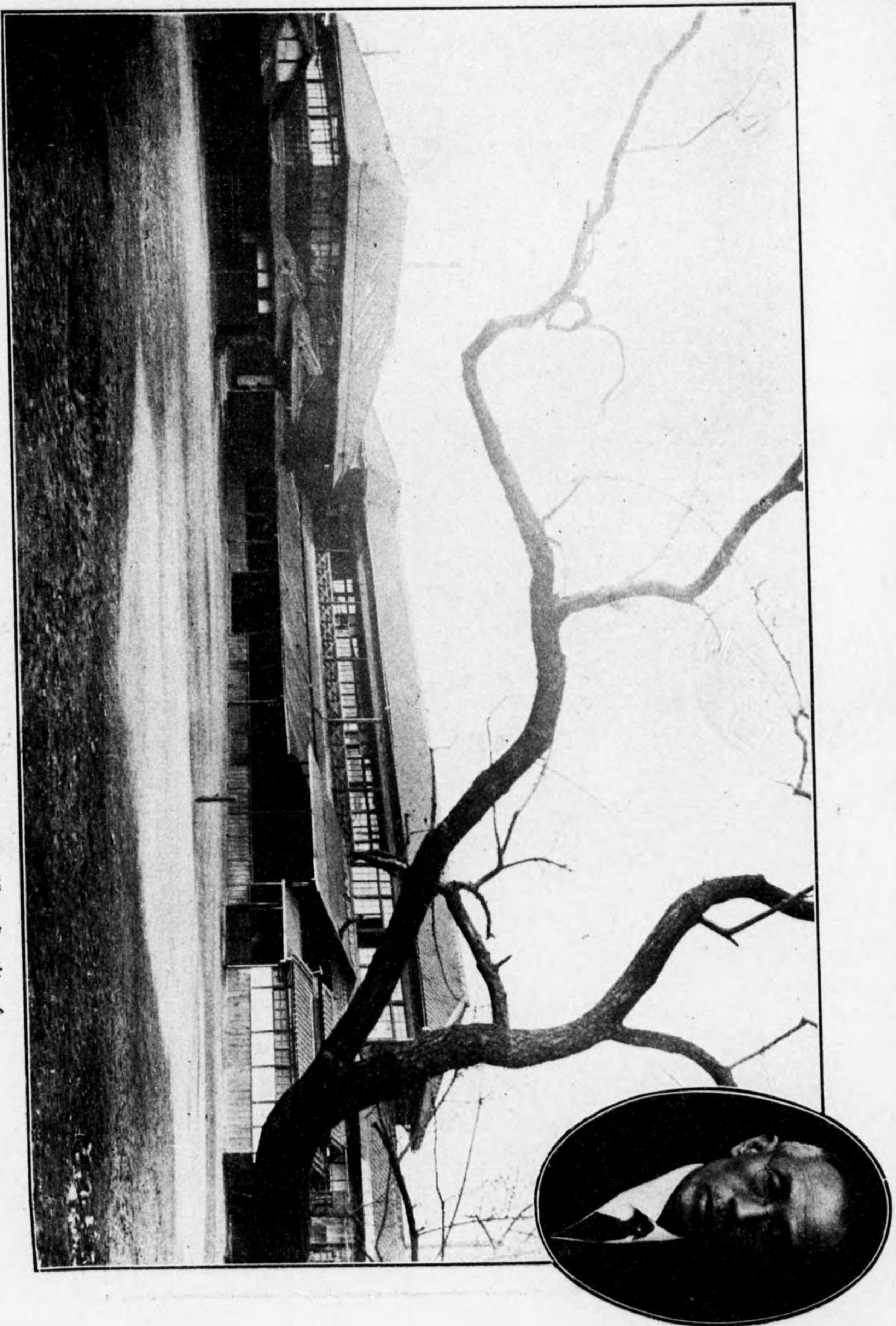
今宮警察署



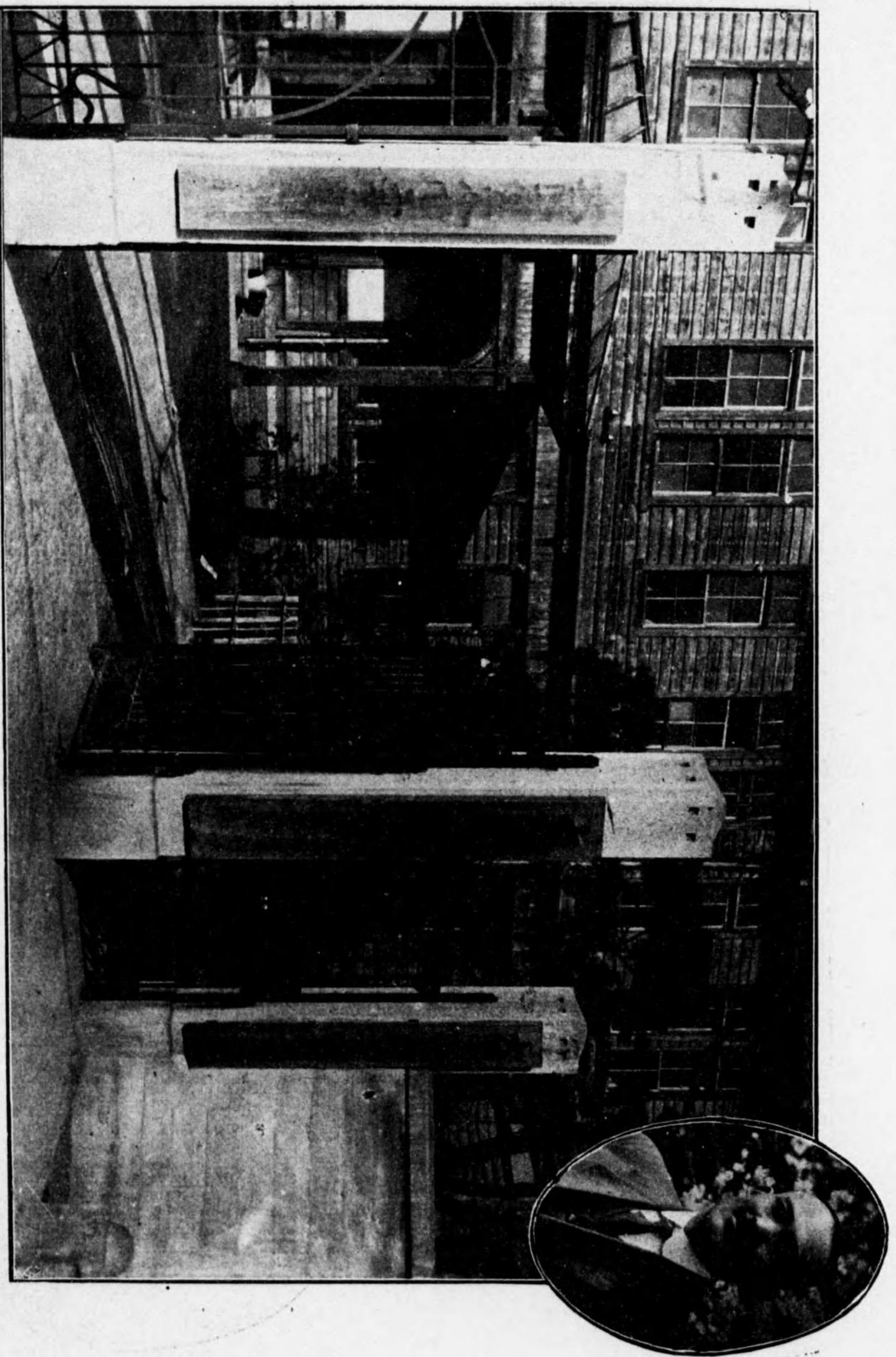
萩の茶屋郵便局



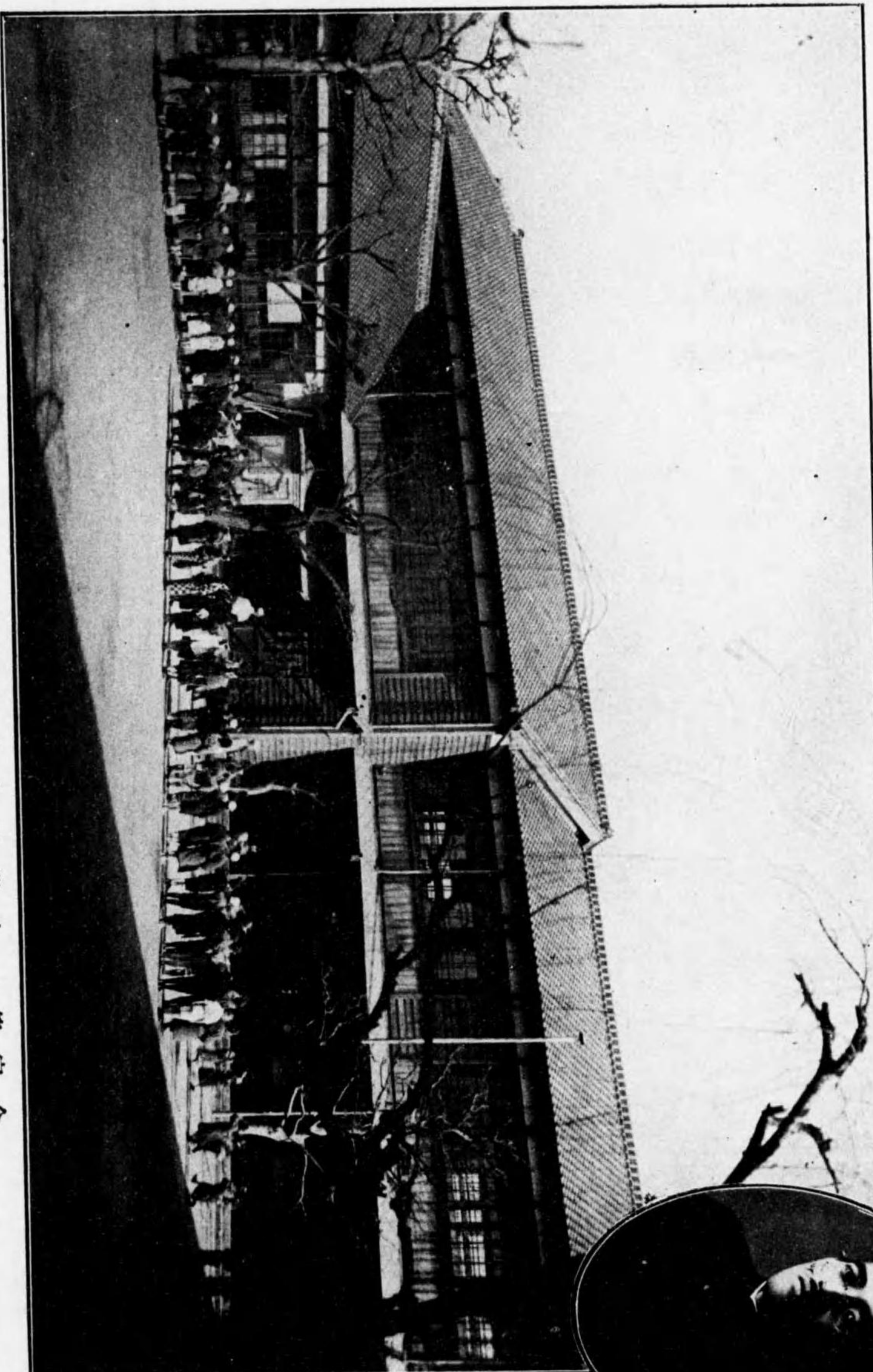
天下茶屋郵便局



今宮成器商業學校及棍山延太郎氏



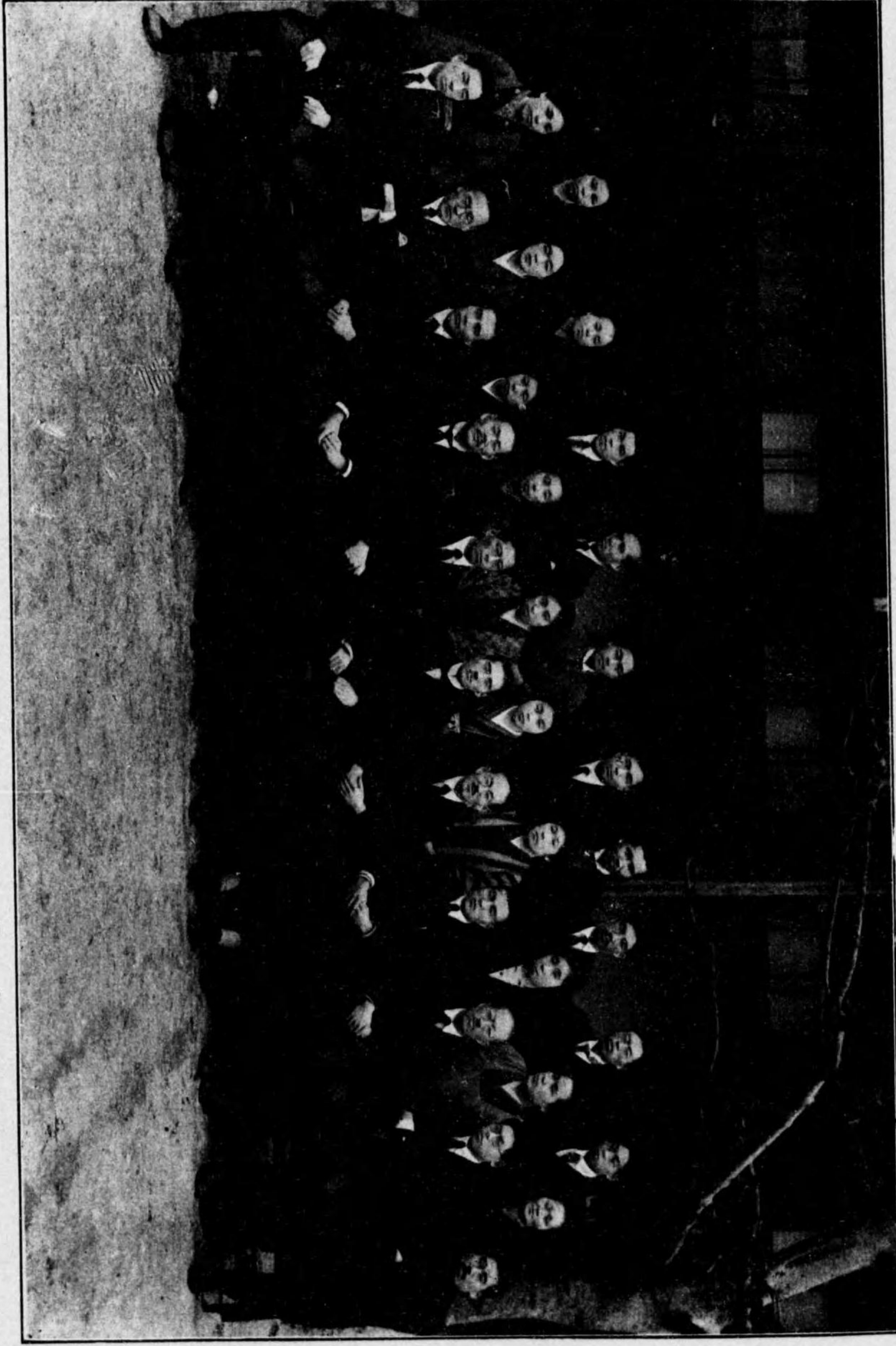
今宮職工學校正門及校長佐藤秀也氏



今宮第一小學校及校長坂部健太郎氏

- 津野親義氏
- 使丁實井氏
- 長尾次良吉氏
- 田中眞三郎氏
- 水見さわ氏
- 風文治郎氏
- 木下勲氏
- 高橋少子氏
- 伊勢田懋氏
- 山中伊次氏
- 西田仁太郎氏
- 上原滿喜子氏
- 貫名衛氏
- 岡本直一氏
- 片岡勢虎氏
- 坂部健太郎氏
- 酒田松次郎氏
- 田中又三氏
- 森岡登氏
- 西口佐三氏
- 嵐はつ氏
- 荒井市平氏
- 木村道衛氏
- 木田カネ氏
- 谷本一氏
- 松本義憲氏
- 難波千代野氏
- 上中義雄氏
- 新谷工一氏
- 三宅恭子氏
- 小柴恒治氏

同 一 員 職 校 學 小 一 第 宮 今



- 小 柴 武 郎 氏
- 三 宇 恭 子 氏
- 藤 谷 エ 卜 氏
- 上 中 義 雄 氏
- 藤 本 義 惠 氏
- 藤 本 義 惠 氏
- 谷 本 一 一 氏
- 木 田 武 木 氏
- 木 林 重 潜 氏
- 栗 井 市 平 氏
- 西 口 菊 三 氏
- 森 岡 憲 氏
- 田 中 八 五 氏
- 野 田 啓 次 郎 氏
- 坂 井 勤 太 郎 氏
- 中 岡 義 美 氏
- 岡 本 直 一 氏
- 貫 谷 清 氏
- 上 原 漸 喜 十 氏
- 西 田 仁 太 郎 氏
- 山 中 伸 次 郎 氏
- 野 田 櫻 氏
- 高 橋 〇 十 十 氏
- 木 下 謙 氏
- 風 文 啓 郎 氏
- 水 原 ち ぢ 子 氏
- 田 中 菊 三 郎 氏
- 長 瀬 次 良 吉 氏
- 野 丁 實 井 氏
- 新 櫻 藤 壽 氏

川原滿養氏

小笠原齋氏 田中源之進氏

森岡 稔氏 高名トモエ氏 中野孝三郎氏

坂部 健太郎氏 葦原なつ氏 石村良祐氏

鳥飼 卯之助氏 山崎安太郎氏 上田正興氏

貫名 齋氏 鹽山重憲氏 岩崎彌一郎氏

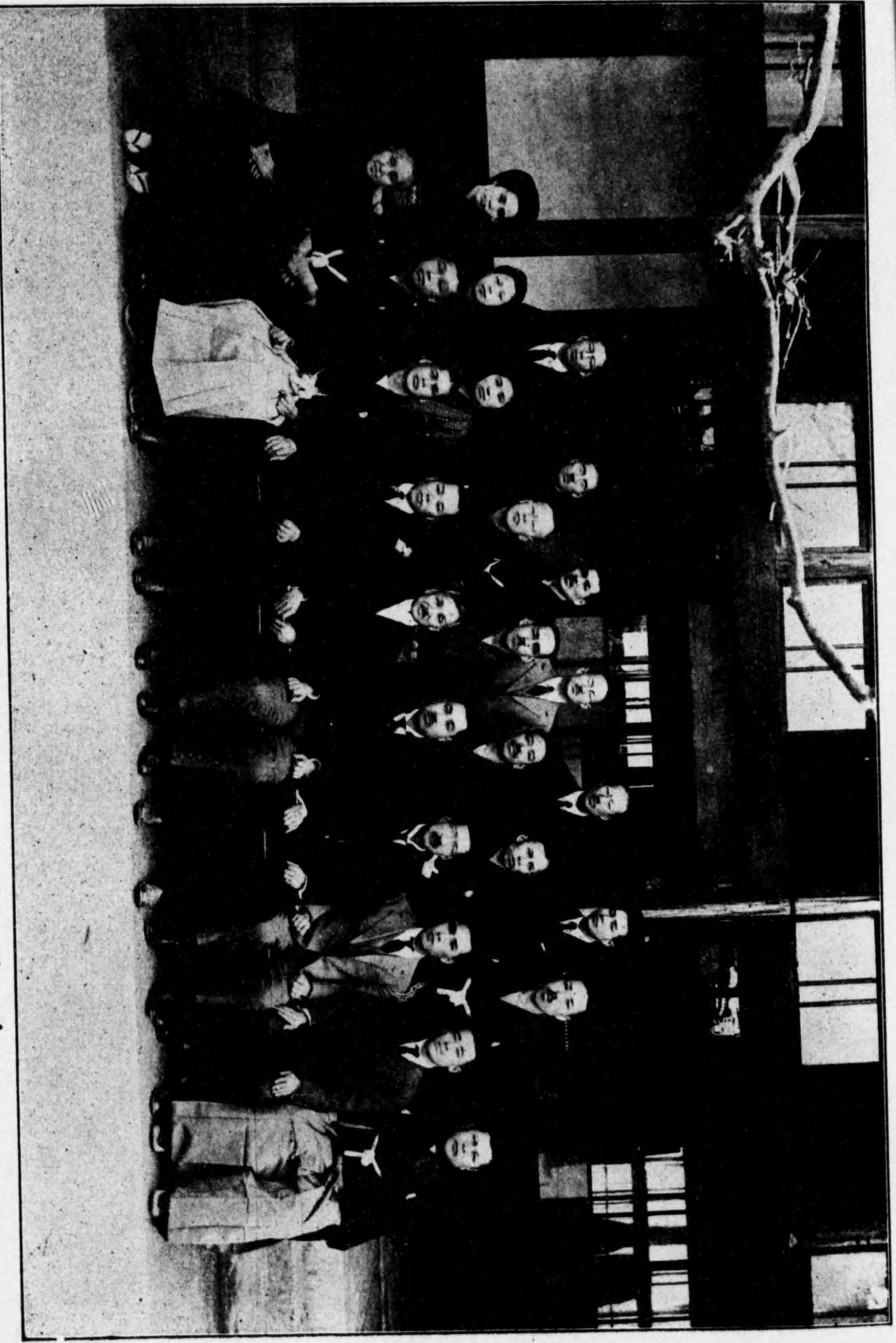
木下 勲氏 高谷清吉氏 吉田繁治郎氏

平林 一氏 狩野 信氏 永田亮一氏

追口 太一氏 辻岡岩治氏

雲雀伊藏氏

今日第一小學後援會役員



川原 漸 齋 氏

小笠原 齋 氏 田中 爾之 蘇 氏

森 岡 登 氏 高谷 一 五 氏 中野 孝三 氏 氏

坂詰 勤太 氏 葦原 公 二 氏 石 林 貞 滿 氏

島崎 眼之 郎 氏 山崎 安太 氏 土田 五 興 氏

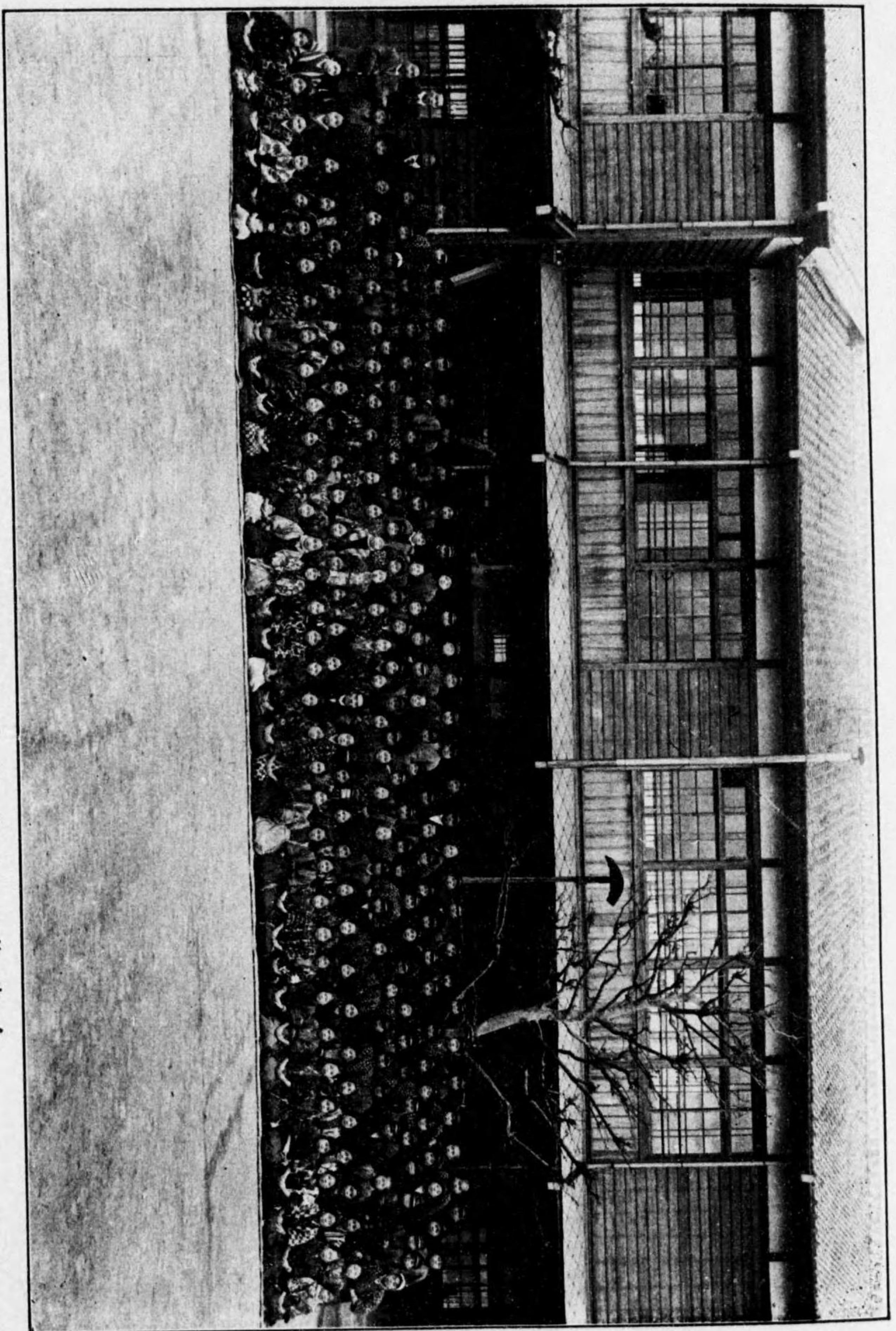
買 谷 禮 氏 鹽 山 重 藏 氏 岩 崎 隆 二 氏 氏

木 下 禮 氏 高谷 漸 吉 氏 吉田 繁 吉 氏 氏

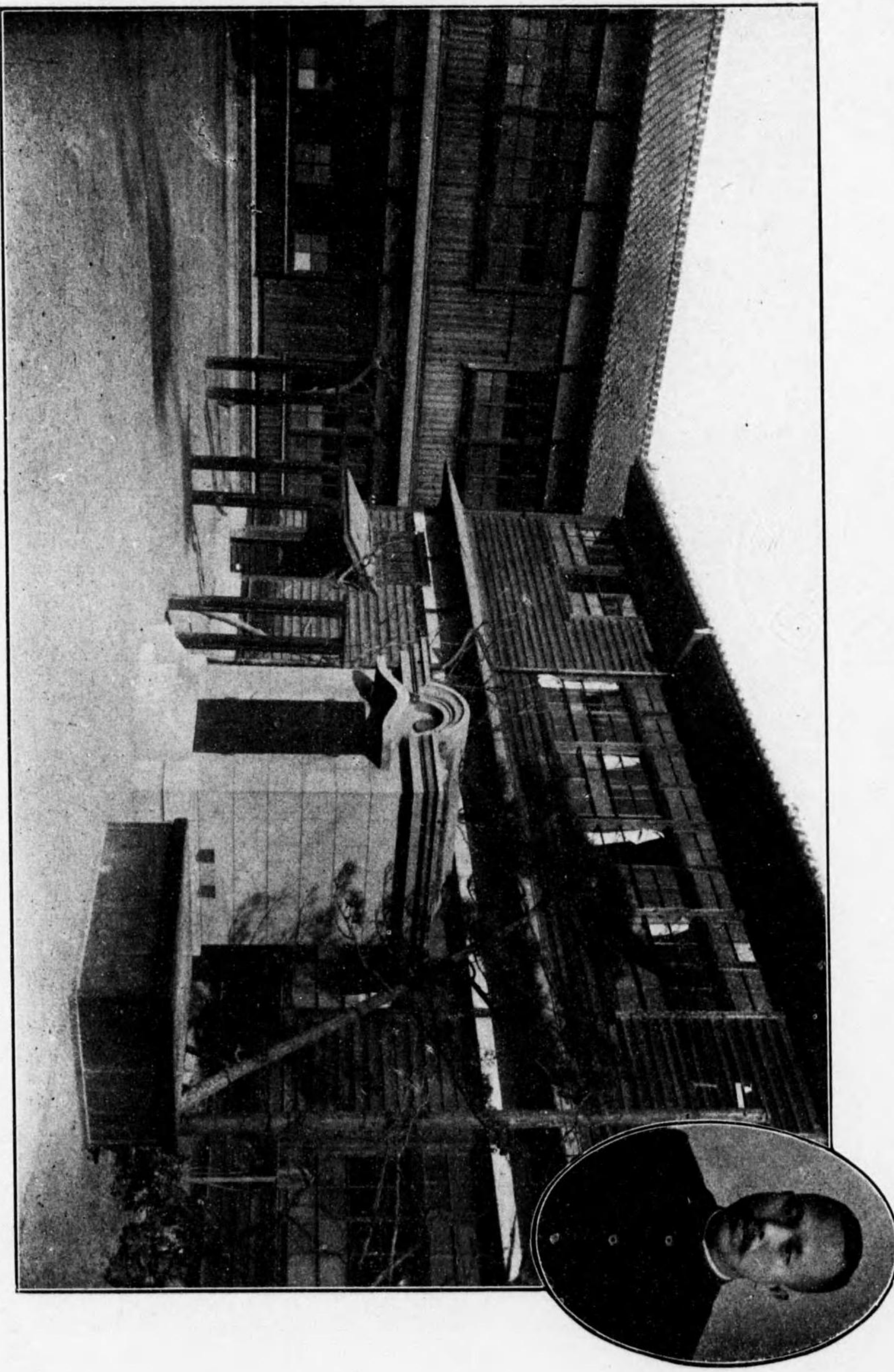
平林 一 一 氏 嵯 理 言 氏 永田 表 一 氏

鎌 口 太 一 氏 長 岡 崇 吉 氏

齋 齋 尚 彌 氏



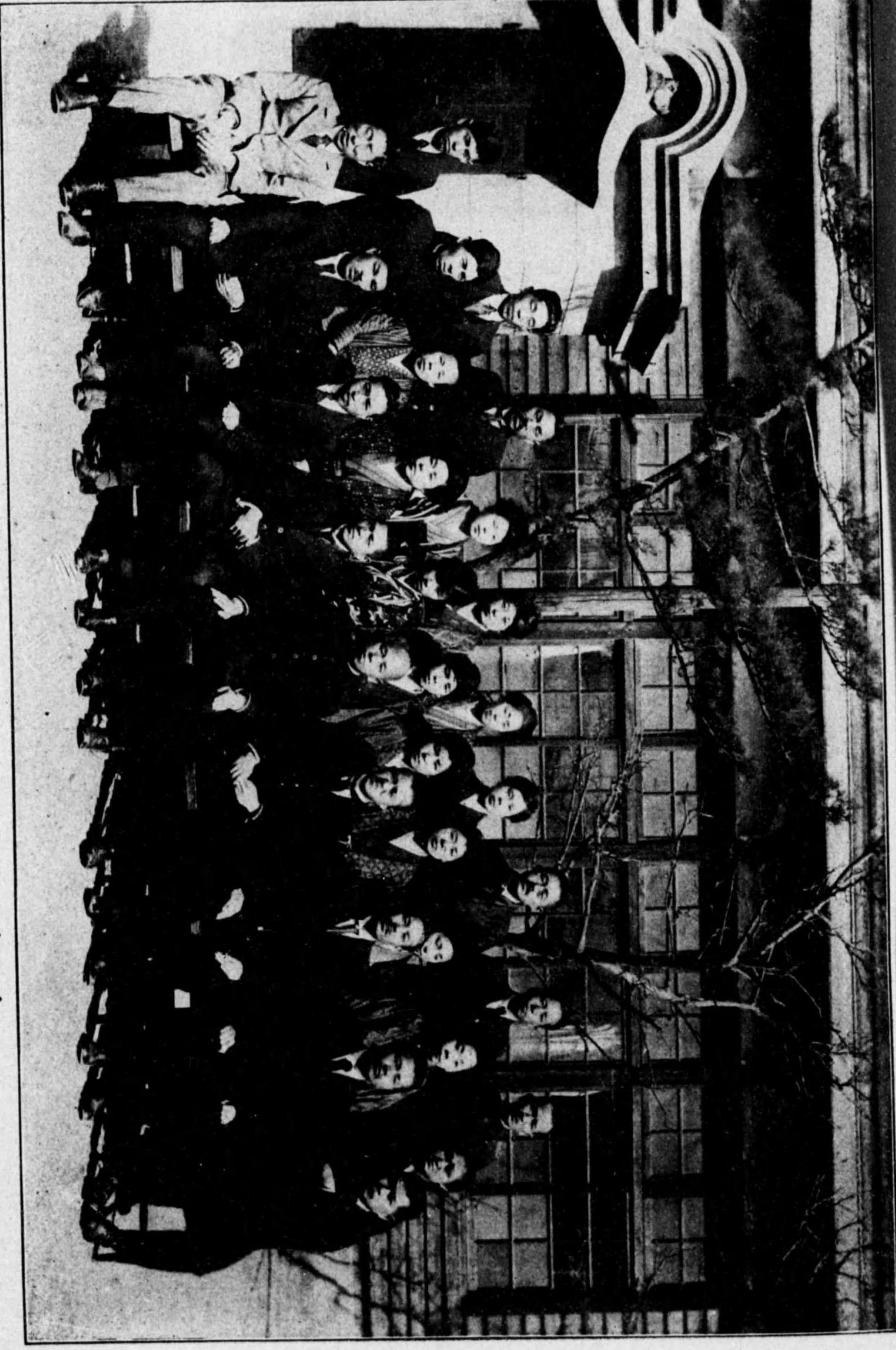
(庚年三十) 生業科常尋校學小一第宮今



今宮第二小學校及校長與本民藏氏

- 中野リ才氏 岸本光里氏
- 佐野辰藏氏 坂本了才氏
- 野村宇次郎氏
- 牧野武夫氏 高屋みづえ氏
- 谷後直市氏 地子繪入氏 河合龜太郎氏
- 林カヅ氏 尾前コト氏 以倉藤三氏
- 吉田マサノ氏 遠藤ミエ氏 奥本民三氏
- 筈井ヤイノ氏 本間芳子氏 水福恭一氏
- 鈴木芳子氏 武藤ユキ氏
- 梅川喜代遊氏
- 刀彌長藏氏 中野好野氏
- 岡本勇氏 赤松清三郎氏 新谷吉太郎氏
- 岩崎邦彦氏 尾立正龍氏

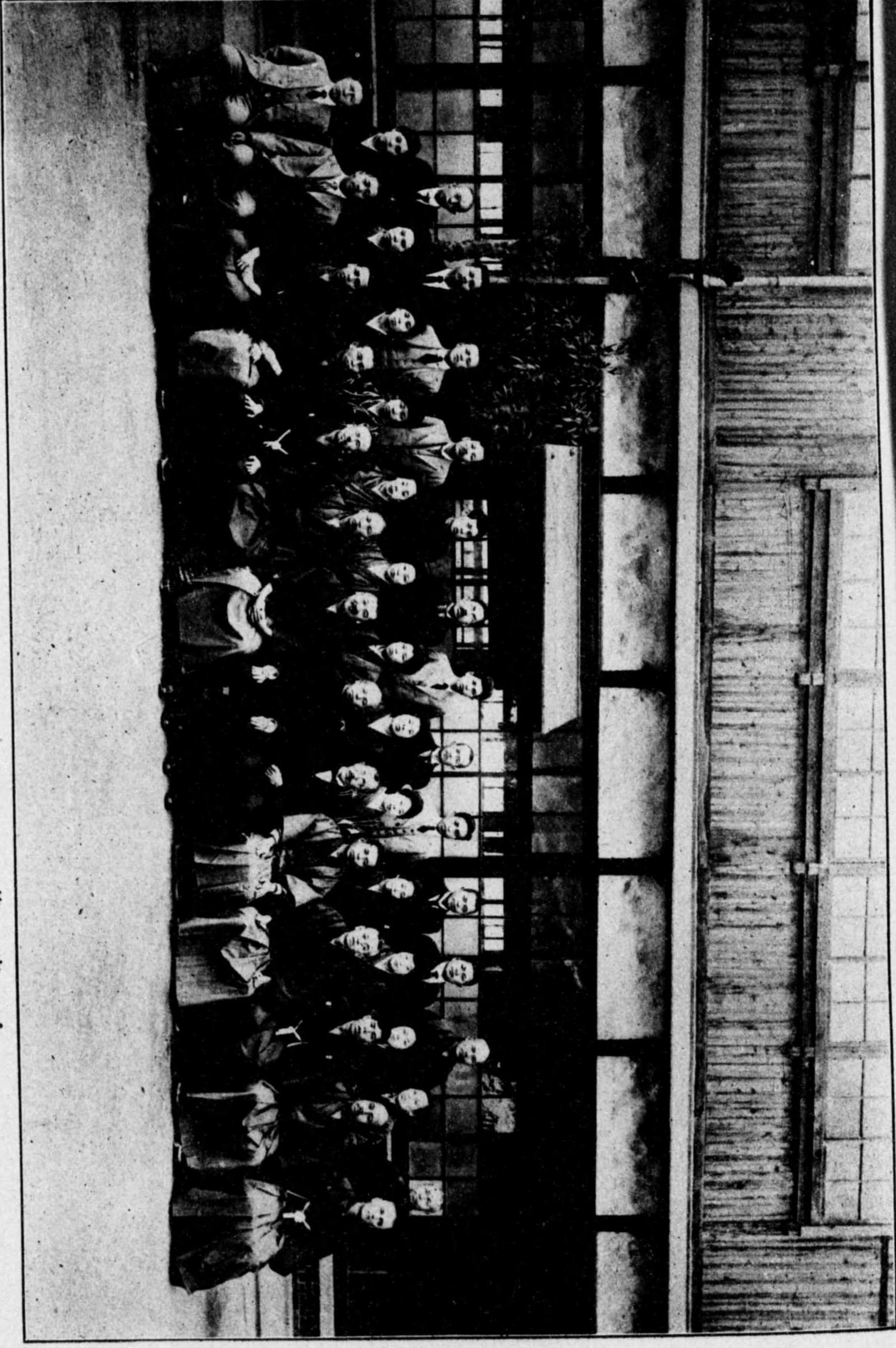
同 一 員 職 校 學 小 二 第 宮 今



岩 神 雅 孝 氏 風 立 五 郎 氏
 岡 本 眞 氏 赤 松 善 三 郎 氏 藤 谷 吉 太 郎 氏
 川 崎 長 彌 氏 中 村 義 理 氏 津 川 喜 介 郎 氏
 橋 本 茂 子 氏 坂 藤 三 子 氏 水 原 恭 一 氏
 笠 井 十 十 郎 氏 本 間 茂 子 氏 奥 本 三 郎 氏
 吉 田 了 之 氏 藤 藤 三 郎 氏 以 倉 藤 三 郎 氏
 林 武 郎 氏 原 前 三 郎 氏 岡 合 藤 太 郎 氏
 谷 野 直 吉 氏 藤 子 節 八 郎 氏 櫻 林 宇 次 郎 氏
 中 村 義 夫 氏 高 風 三 郎 氏
 中 村 義 理 氏 藤 本 三 郎 氏 岩 本 水 里 氏
 中 村 三 郎 氏

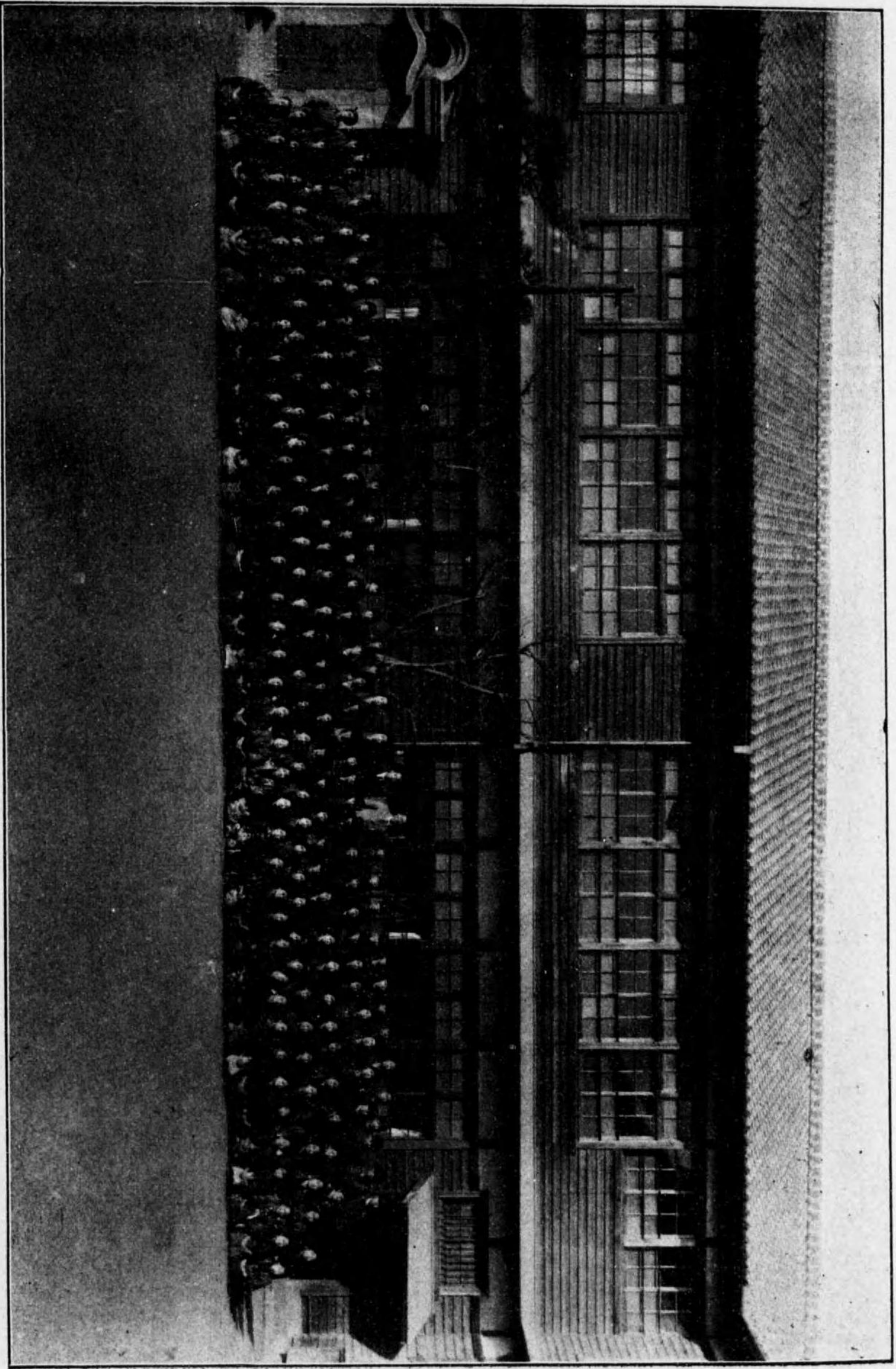
小野 謙之丞氏 小野 謙之助氏 小野 謙之助氏
林 カ 少 氏 中川 寅次郎氏 川井 才藏氏
野村 宇治田氏 遠藤 ミ 工 氏 浦上 谷治郎氏
以倉 藤三氏 西村 久吉氏 本間 芳子氏
河合 龜太郎氏 緒原 宇之吉氏 赤松 清三郎氏
坂本 了 一 氏 山根 武之助氏 刀彌 長藏氏
武藤 エキ 氏 齋藤 順次郎氏 岩崎 邦彦氏
尾前 コト 氏 奥 本 民藏氏 佐野 辰藏氏
地子 給 ス 一 氏 佐々木 彌太郎氏 梅川 喜代藏氏
鈴木 孝子氏 吉田 マサノ 氏 永福 卷一氏
梶 貞次氏 笠井 マノ 氏 岸本 光里氏
高屋 みづえ 氏 赤野 桑治郎氏 田村 善太郎氏
中野 好野氏 中野 謙太郎氏 中野 謙之丞氏
高瀬 朗氏 小島 德松氏

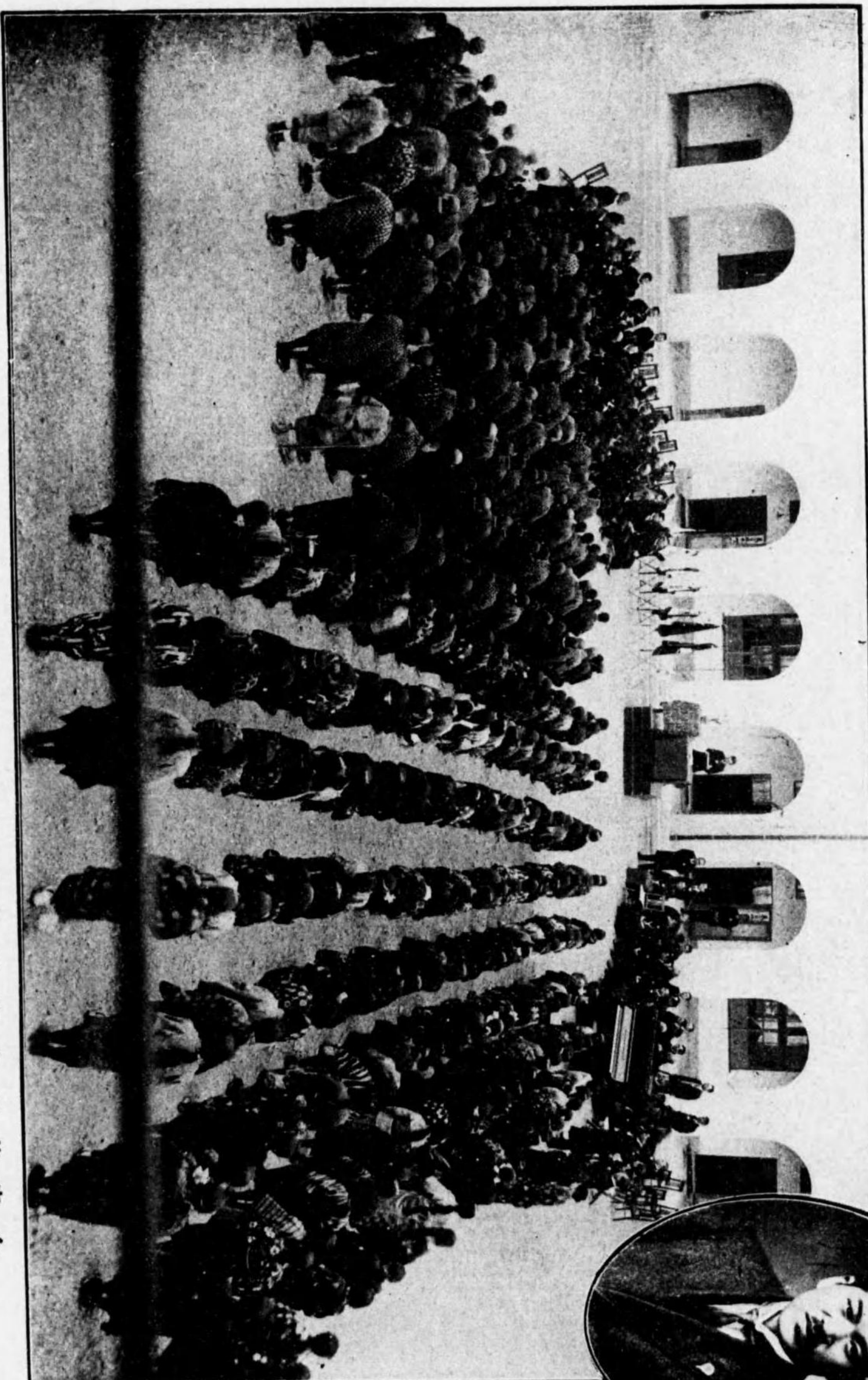
今宮第二小學後援會役員



- 川井 本 彌 氏
- 林 女 〇 氏
- 中川 寅次 彌 氏
- 小裡 湖之世 氏
- 須 郷 〇 氏
- 前上 谷 哲 彌 氏
- 櫻林 宇 哲 田 氏
- 藤 藤 〇 氏
- 以會 藤三 彌 氏
- 西林 八 吉 氏
- 本間 甚 千 氏
- 藤原 宇之吉 氏
- 阿合 龜太 彌 氏
- 坂本 〇 氏
- 赤坂 新三 彌 氏
- 山田 虎之世 氏
- 丸 藤 〇 氏
- 川 藤 是 彌 氏
- 藤 藤 彌次 彌 氏
- 眞 前 〇 氏
- 岩 神 秩 彦 氏
- 眞本 男 彌 氏
- 坂 宇 哲 〇 氏
- 吉 理 彌 彌 氏
- 吉 〇 木 藤 太 彌 氏
- 藤 崎 木 甚 千 氏
- 藤川 喜升 彌 氏
- 香 理 新 吉 氏
- 吉田 〇 〇 氏
- 水 藤 恭 一 氏
- 眞 夫 氏
- 坂 花 〇 〇 氏
- 眞本 水 里 氏
- 高 野 〇 〇 氏
- 赤 理 兼 哲 彌 氏
- 田 林 藤 太 彌 氏
- 中 理 我 理 氏
- 高 藤 〇 氏
- 中 理 藤 之 丞 氏
- 小 島 藤 彦 氏

〔度年三十〕生業卒科常尋校學小二第宮今

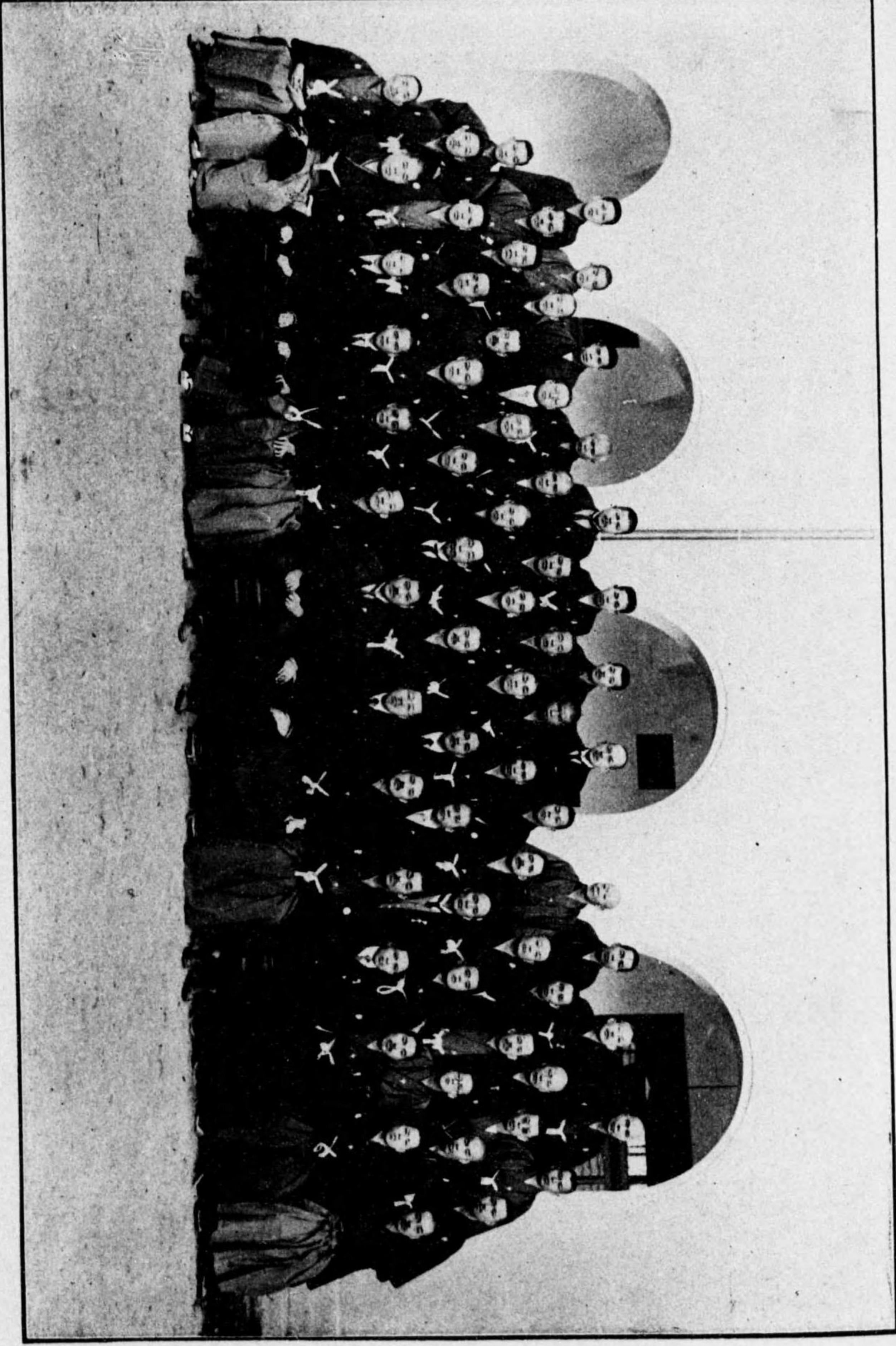




今宮第三小學校新築落成式(講堂)及校長田寬三氏

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|---------|---------------|--------|--------|---------------|--------|---------------|---------------|--------|---------------|--------|---------------|--------|---------------|--------|---------------|---------------|--------|---------------|--------|---------------|--------|---------------|--|--|
| 中浦 重正氏 松村若之助氏 | 赤尾 顯太郎氏 | 河合福太郎氏 植田 竹藏氏 | 垣内 力松氏 | 伊藤孫次郎氏 | 平賀 八藏氏 山岸三三郎氏 | 大塚孝太郎氏 | 植田彌壽慶氏 渡邊 熊八氏 | 進藤 武藏氏 加部 富志氏 | 河合福次郎氏 | 山本字太郎氏 山本雅太郎氏 | 竹村 米藏氏 | 大井 茂市氏 長田 寛三氏 | 岡村 八郎氏 | 坂上 英夫氏 九野 德松氏 | 關 彌平太氏 | 宇繩 應吉氏 井上孝太郎氏 | 脇富德三郎氏 有岡 信藏氏 | 上林 敬自氏 | 堀川寛次郎氏 武田 正國氏 | 萩原 三郎氏 | 上田保次郎氏 高谷變次郎氏 | 吉田 繁重氏 | 大野安之助氏 安良又兵衛氏 | | |
| | | 伊川字之助氏 香川市太郎氏 | | 後藤 孫七氏 | 小川重太郎氏 | 伊藤 覺一氏 | 岩間 繁吉氏 | 松井平三郎氏 竹村 米藏氏 | 佐谷 岩吉氏 | 井邊 榮一氏 西村 清吉氏 | 久保善代吉氏 | 佐原 道雄氏 | 萩田 直吉氏 | 山西庄次郎氏 | 三木房次郎氏 | 御宮司 繁吉氏 | 石合 勲氏 尾子 泰一氏 | | | | | | | | |

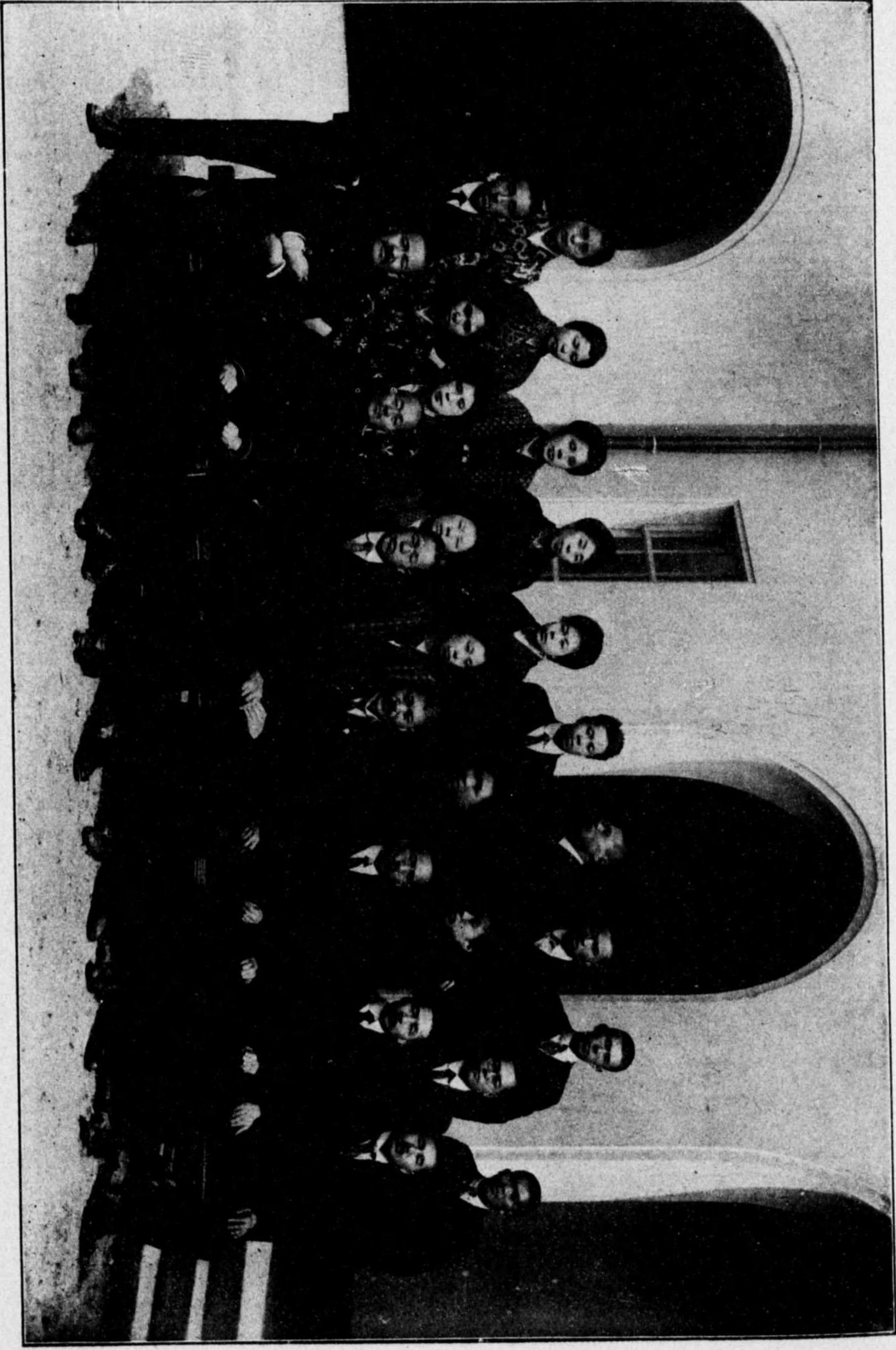
今宮第三小學校後援會役員



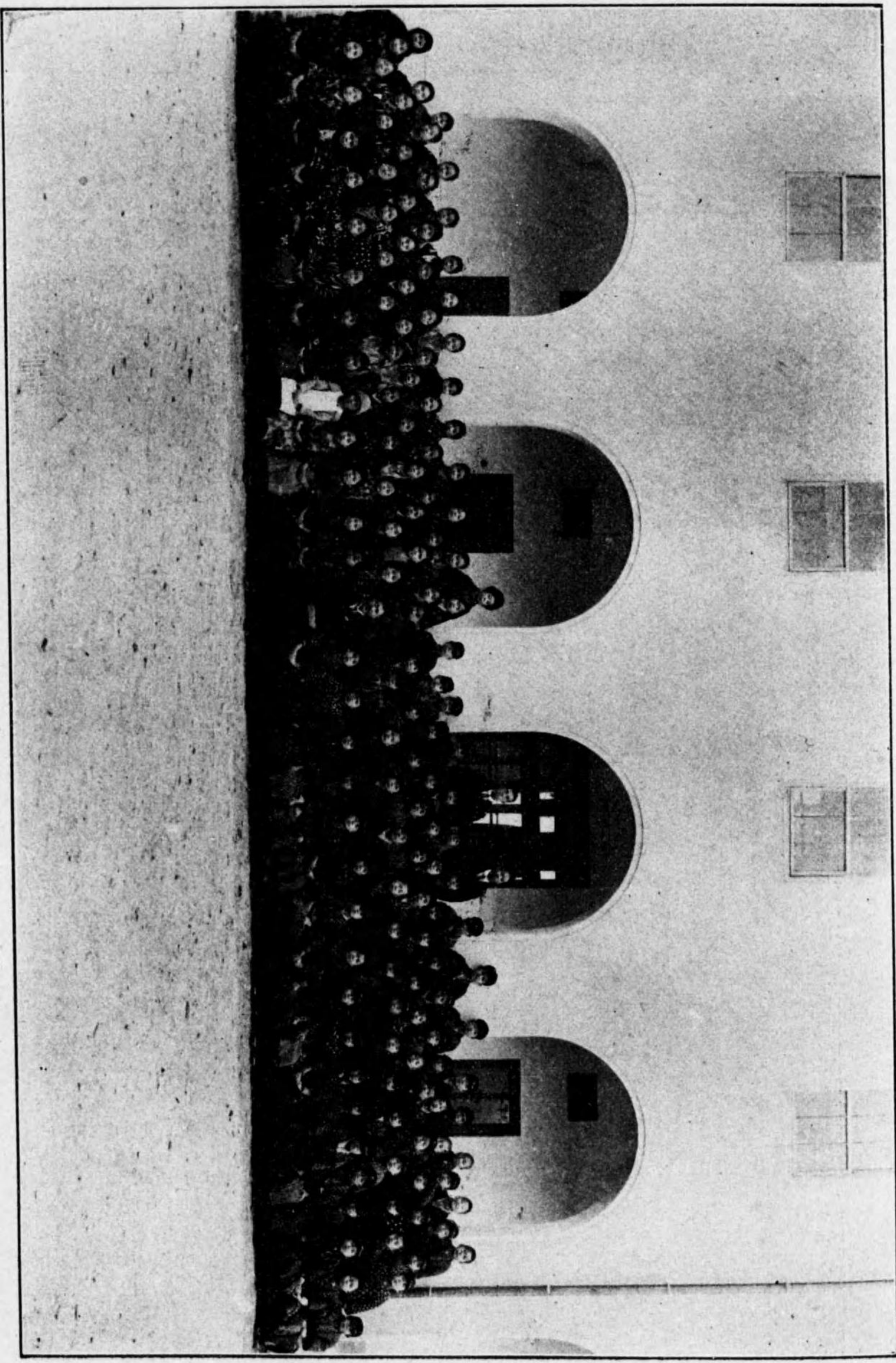
大裡 交之助 丸	安貝 又兵衛 丸
吉田 兼重 丸	
石合 徳丸 且子 泰一 丸	土田 裕太郎 丸 高谷 榮太郎 丸
藤原 三郎 丸	藤川 寛太郎 丸 佐田 五郎 丸
廣宮 辰泰 吉 丸	三木 徳太郎 丸 土村 徳昌 丸
山西 丑太郎 丸	湖富 勝三郎 丸 吉岡 貞彌 丸
八尋 喜升 吉 丸	藤田 直吉 丸
井 繁 榮一 丸 西村 新吉 丸	宇野 龍吉 丸 井上 英太郎 丸
關 平太 丸	大井 英夫 丸 大裡 勝盛 丸
丸谷 崇吉 丸	岡村 八郎 丸
岩間 養吉 丸	大井 英市 丸 長田 實三 丸
藤田 豊一 丸	藤井 米藏 丸
小川 重太郎 丸	山本 宇太郎 丸 山本 藤太郎 丸
石合 彌太郎 丸	熊藏 爲藏 丸 砥 富彦 丸
大塚 英太郎 丸	新田 隆義 丸 新 繁 八 丸
平賀 八郎 丸 山根 宇三郎 丸	翁藏 源十 丸
時 藤 裕 夫 丸	新木 昌藏 丸 高木 時之吉 丸
香川 宇之助 丸 香川 市太郎 丸	
坂内 次盛 丸	松本 由太郎 丸 藤田 常重 丸
大裡 時三郎 丸	
石合 彌太郎 丸 藤田 竹藏 丸	竹谷 末太郎 丸 山口 甚吉 丸
赤引 隆太郎 丸	
中筋 重五 丸 藤林 保之助 丸	

森島貞三氏
井川義淳氏
富田貞三氏
荒木莊三氏
武田ヨシエ氏
森田かめの氏
黒田美氏
藤原ヨシエ氏
今川政子氏
山中敬孝氏
前田眞次氏
嘉納義宏氏
津田道雄氏
早野貞女氏
高塚美子氏
松田シヰ氏
木村遊津子氏
徳原喜壽子氏
安藤茂氏
村岸俊一郎氏
長田寛三氏(校長)
川崎友之助氏
和田莊司氏
和田道雄氏

同 一 員 職 校 學 小 三 第 町 宮 今

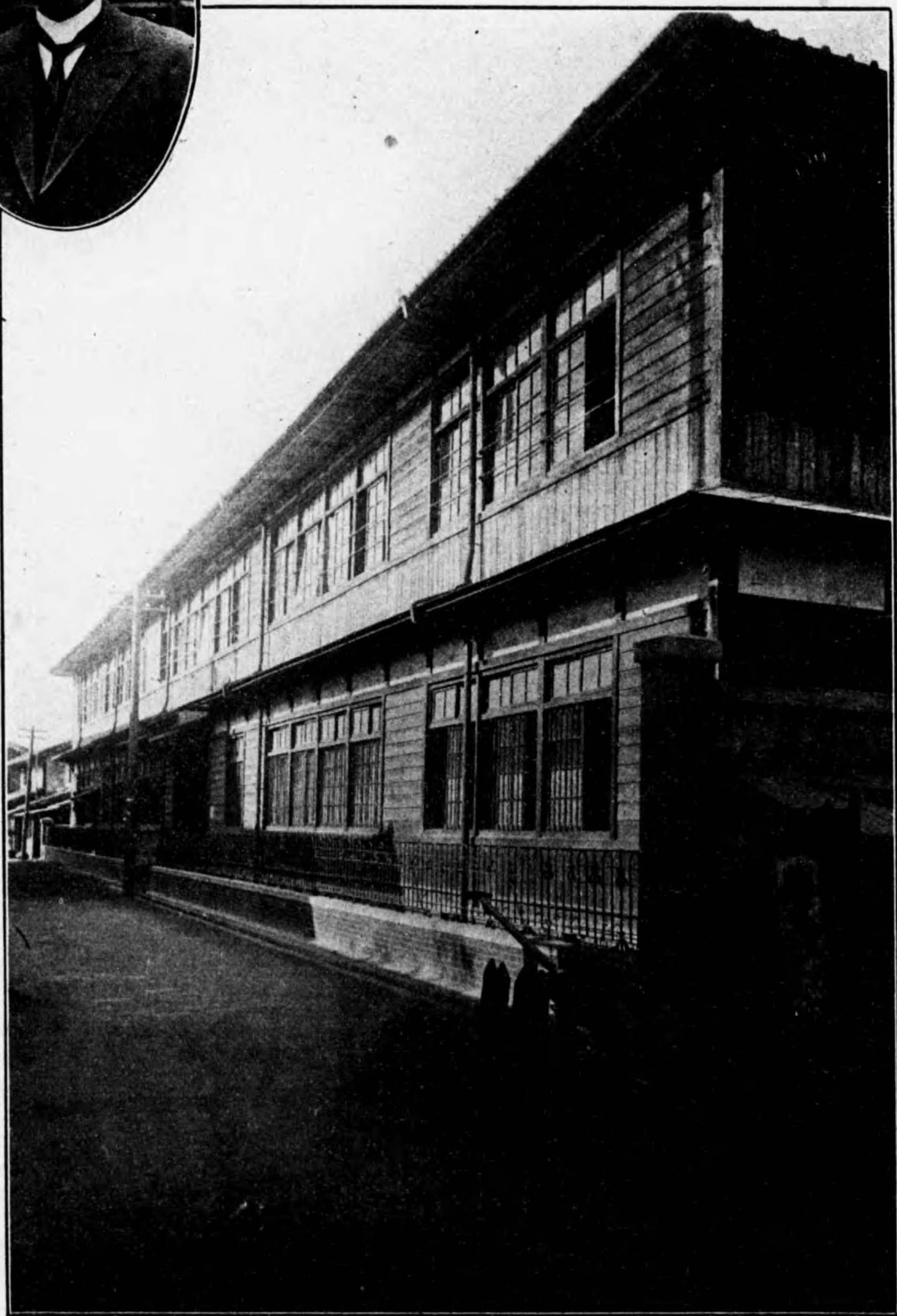


今川 英子氏	安藤 英氏	
藤原 昌子氏	藤原 喜重子氏	堀田 市氏
黒田 美氏	木村 尚子氏	川瀬 文子氏
藤田 昌子氏	松田 昌子氏	味田 振子氏
丸田 昌子氏	高瀬 美子氏	長田 真三氏(校長)
渡木 振三氏	早理 貞子氏	林 崇 貞二氏
富田 貞三氏	近藤 昌子氏	新田 重 敏氏
中川 善子氏	藤原 善子氏	前田 貞 夫氏
森 貞三氏	山中 妙子氏	



今宮第三小學尋常科卒業生(十三年)

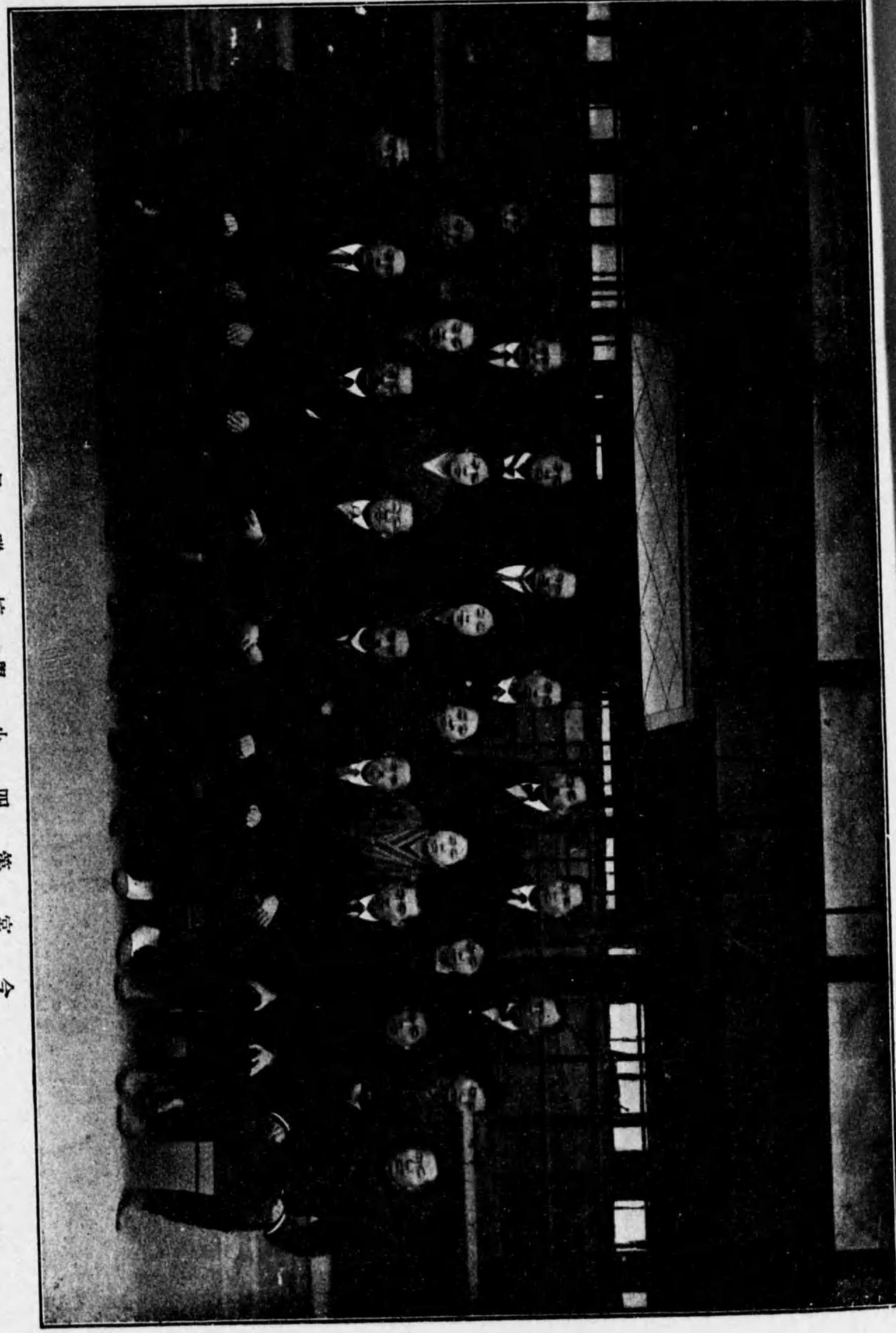




今宮第四小學校舍及校長安福敏照氏

瀧川 訓導
 兒島 訓導 鈴木 訓導
 神保 訓導 稻葉 訓導
 仲川 訓導
 豊島 訓導
 上田 訓導 三善 訓導
 堀口 訓導
 米田 訓導 高瀬 訓導
 安福 校長
 廣瀬 訓導 大森 訓導
 宮本 訓導
 五十嵐 訓導 堀 訓導
 菅沼 訓導
 鳥 訓導 平井 訓導
 大北 訓導
 松本 訓導 山瀬 訓導
 井島 訓導

同、一、員、職、校、學、小、四、第、宮、今



森本 聞 華	山崎 聞 華	共 島 聞 華
島 聞 華	平井 聞 華	大 井 聞 華
五十嵐 聞 華	藤 聞 華	菅 野 聞 華
廣 崎 聞 華	大 森 聞 華	宮 本 聞 華
米 田 聞 華	高 崎 聞 華	交 藤 好 貞
土 田 聞 華	三 善 聞 華	浜 口 聞 華
轉 須 聞 華	笠 兼 聞 華	豊 島 聞 華
泉 島 聞 華	益 木 聞 華	中 川 聞 華
		藍 川 聞 華

後列
中列
前列

梶本 留吉氏 木越多津次郎氏

安福 敏昭氏 目黒 芳橋氏 中尾 賢次氏

江畑 彌惣吉氏 片岡 昌司氏 渡邊 熊八氏

柳本 松太郎氏 石川 文作氏 柳澤 卯之松氏

根本 徳茂氏 宮崎 瀧之助氏 野口 安五郎氏

柴田 長兵衛氏 土井 丑之助氏 倉田 貞一氏

禰原 皇治氏 寺澤 己之助氏 横田 原三郎氏

瀧 成太郎氏 久下 松之助氏 飛鳥井 源七氏

竹上 庄次郎氏 吉岡 又兵衛氏 横田 甚三郎氏

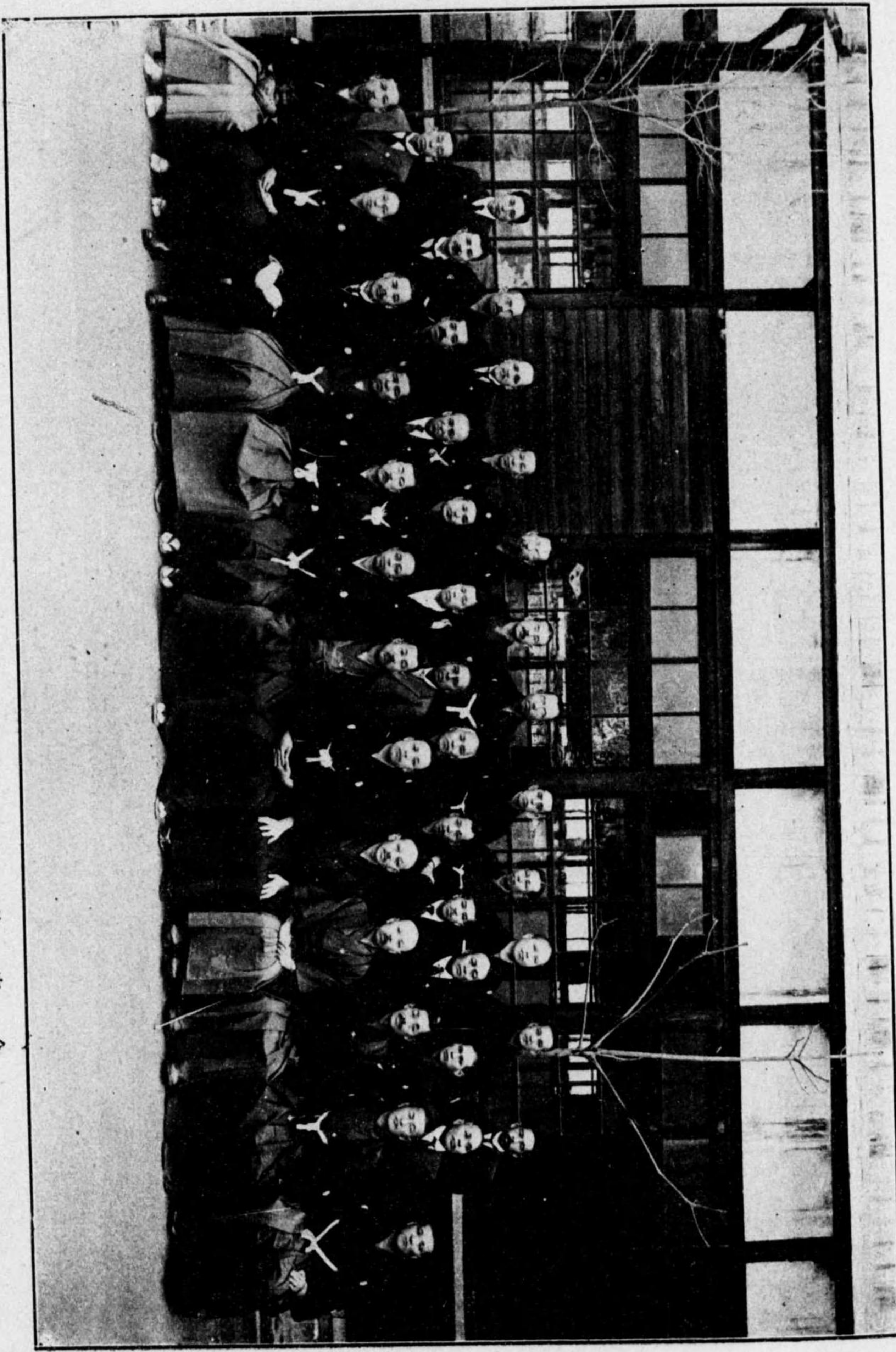
井村 久米三氏 津田 治三郎氏 森 彌 平氏

安滿 勝憲氏 横田 吉二郎氏 四ノ谷 福松氏

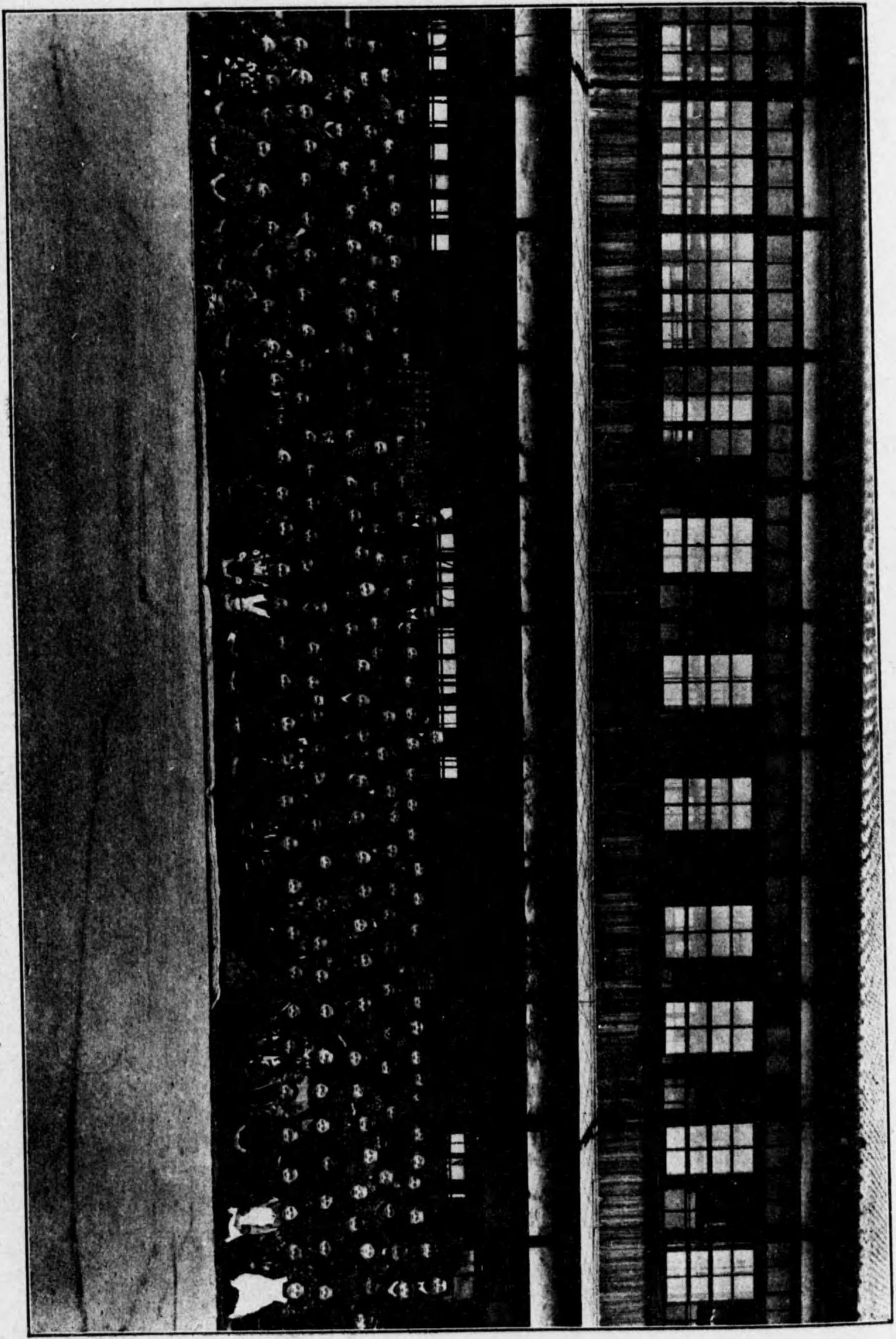
林 鐵二氏 堀井 喜三郎氏 蛭川 芳雲氏

中井 喜之郎氏 丹波 道彦氏

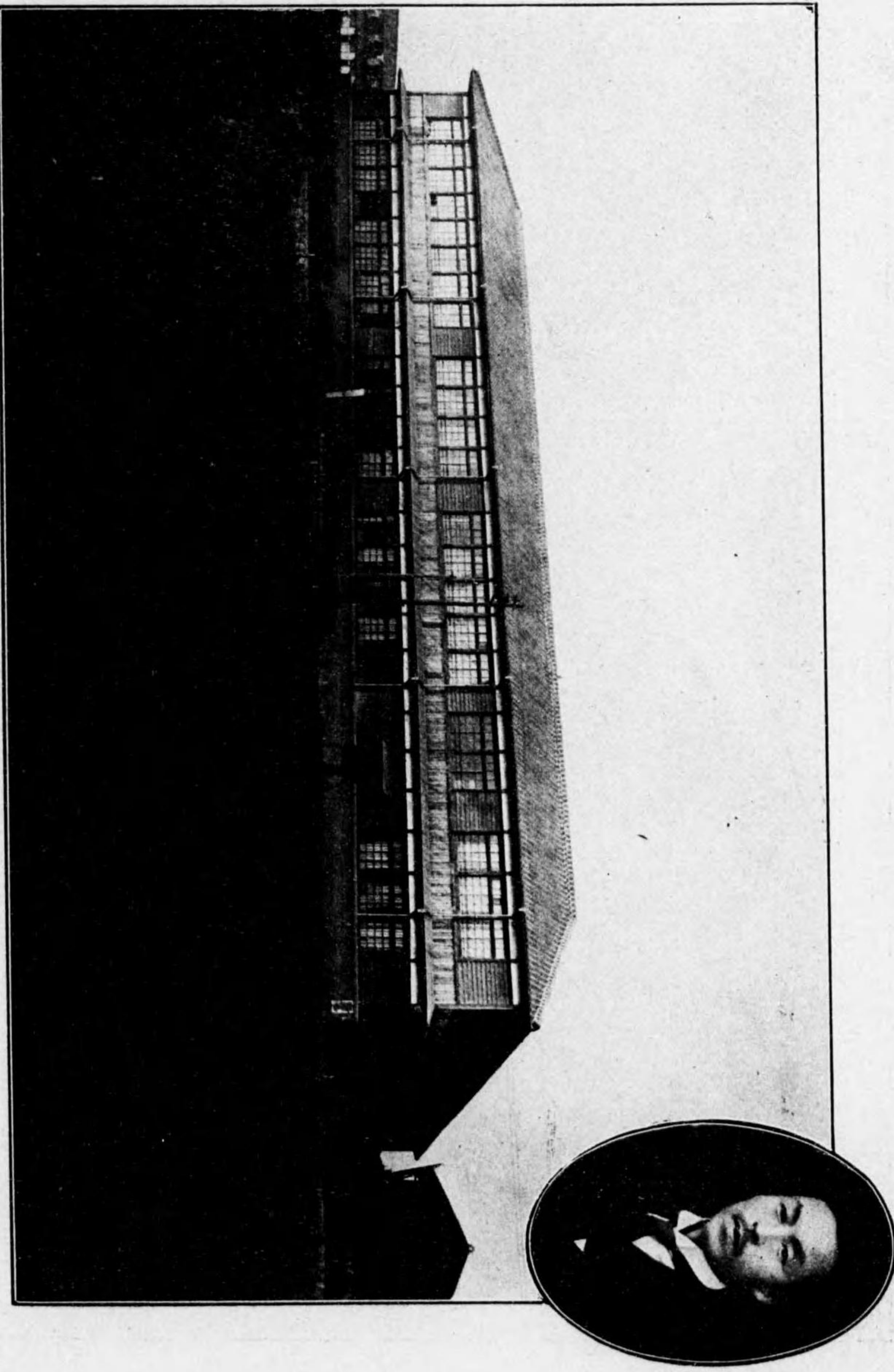
今宮第四小學校後援會役員



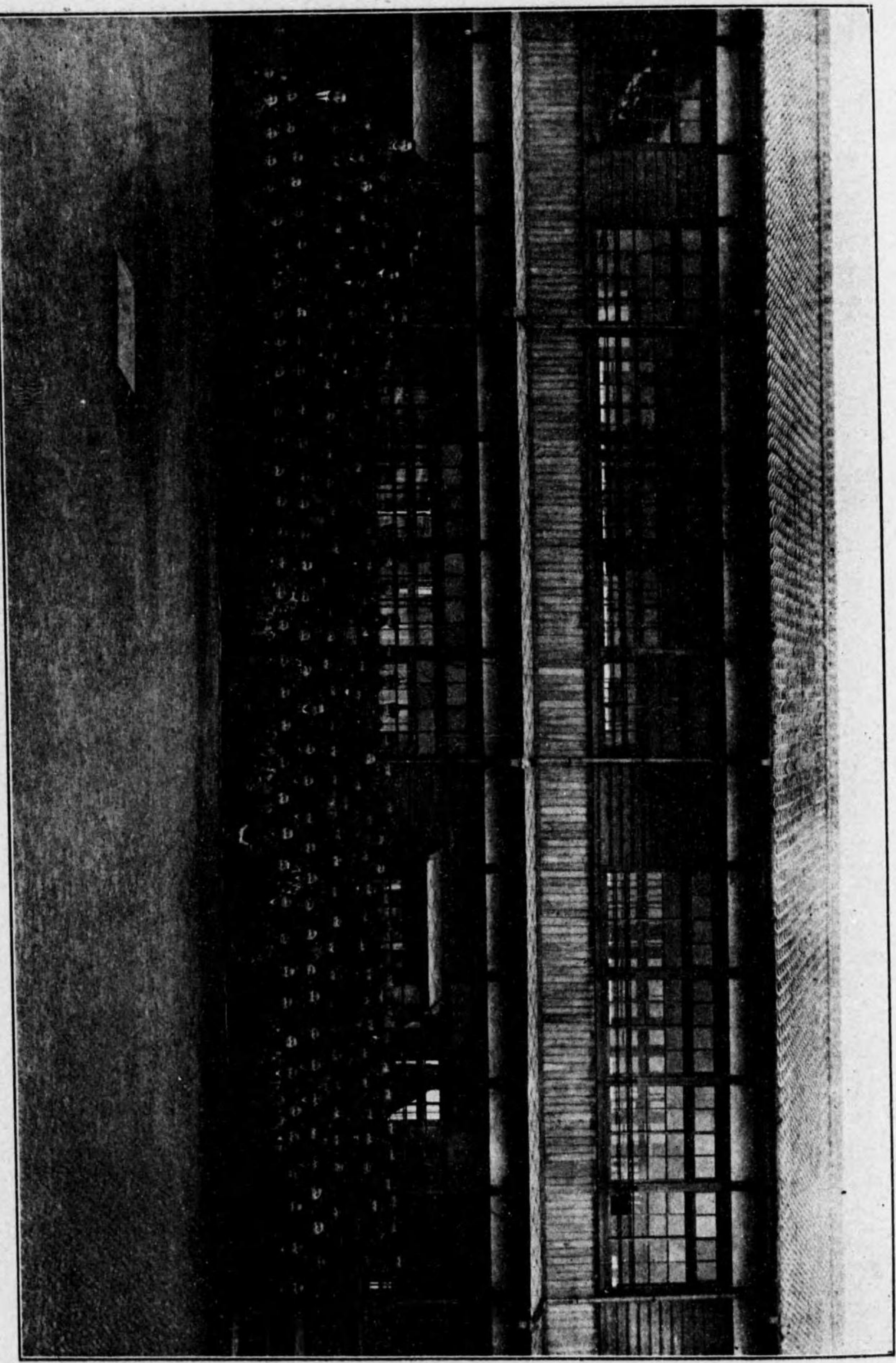
林 隆二氏	中井 喜之助氏	氏 彰 雄 彦 氏
安 瀬 龜 藏 氏	藤 井 喜三郎氏	瀧 川 茂 雄 氏
井 林 八米三氏	齋 田 吉二郎氏	四 谷 彌 彦 氏
竹 土 丑 次 郎 氏	井 田 信三郎氏	森 藤 平 氏
藤 須 太 郎 氏	吉 岡 又 次 郎 氏	齋 田 甚三郎氏
轉 風 是 郎 氏	人 才 啓 之 郎 氏	熊 島 半 助 氏
柴 田 甚 次 郎 氏	寺 野 弓 之 郎 氏	齋 田 鳳 三 郎 氏
母 本 勝 英 氏	土 井 莊 之 郎 氏	倉 田 貞 一 氏
轉 本 甚 太 郎 氏	宮 御 斷 之 郎 氏	禮 口 空 正 郎 氏
馬 岐 龍 造 氏	石 川 文 吉 氏	轉 野 忠 之 郎 氏
安 藤 雄 助 氏	丸 岡 昌 匠 氏	新 藤 兼 八 氏
	目 黒 茂 雄 氏	中 原 夏 次 氏
	轉 本 賢 吉 氏	木 越 參 事 次 郎 氏
後 席	中 席	前 席



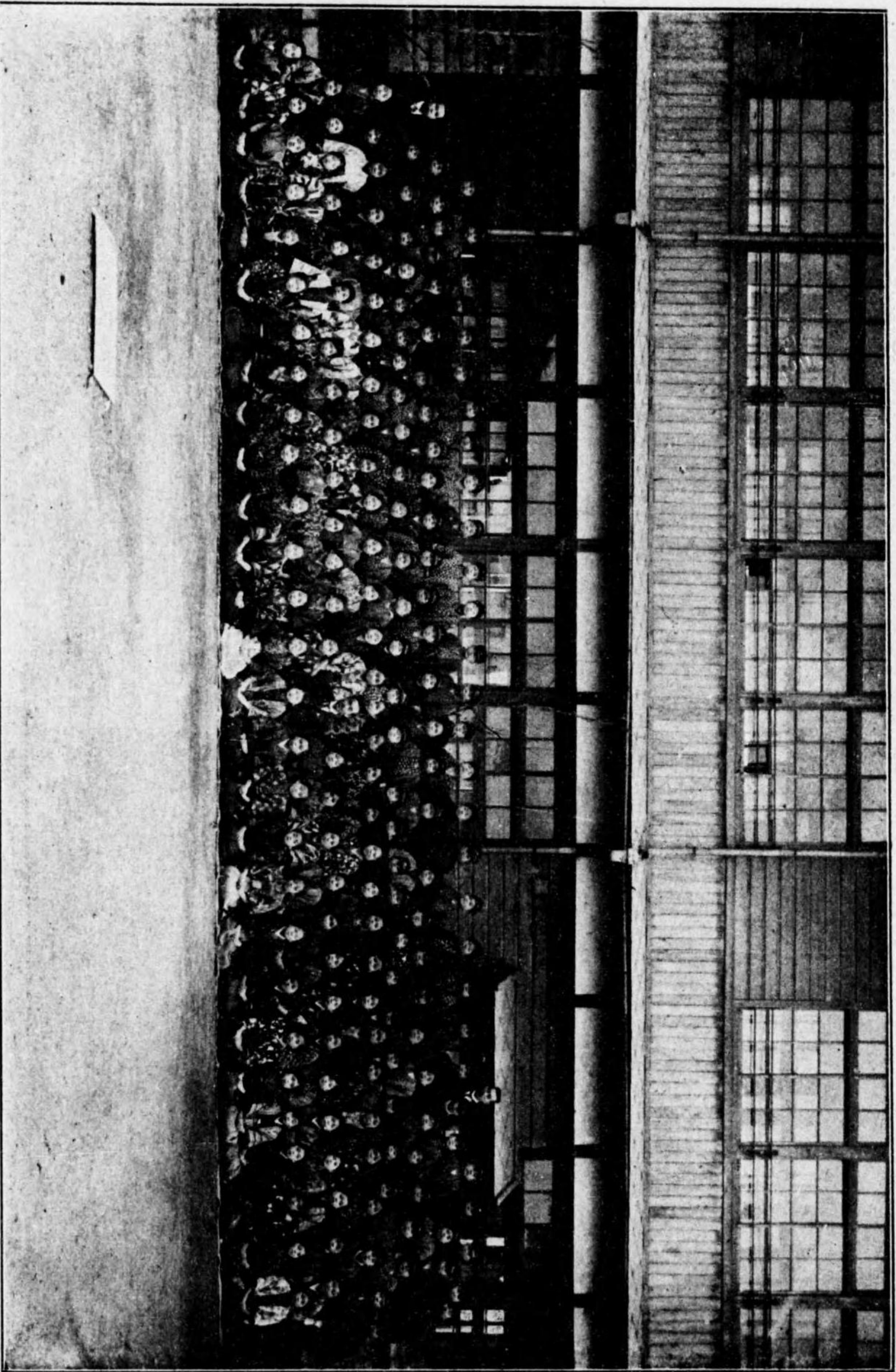
今宮第四小學校常科卒業生(三十二年)



氏 郎 太 権 岡 井 長 校 及 舎 校 學 小 五 第 宮 今



(慶 年 三 十) 生 業 卒 科 等 高 校 學 小 五 第 町 宮 今



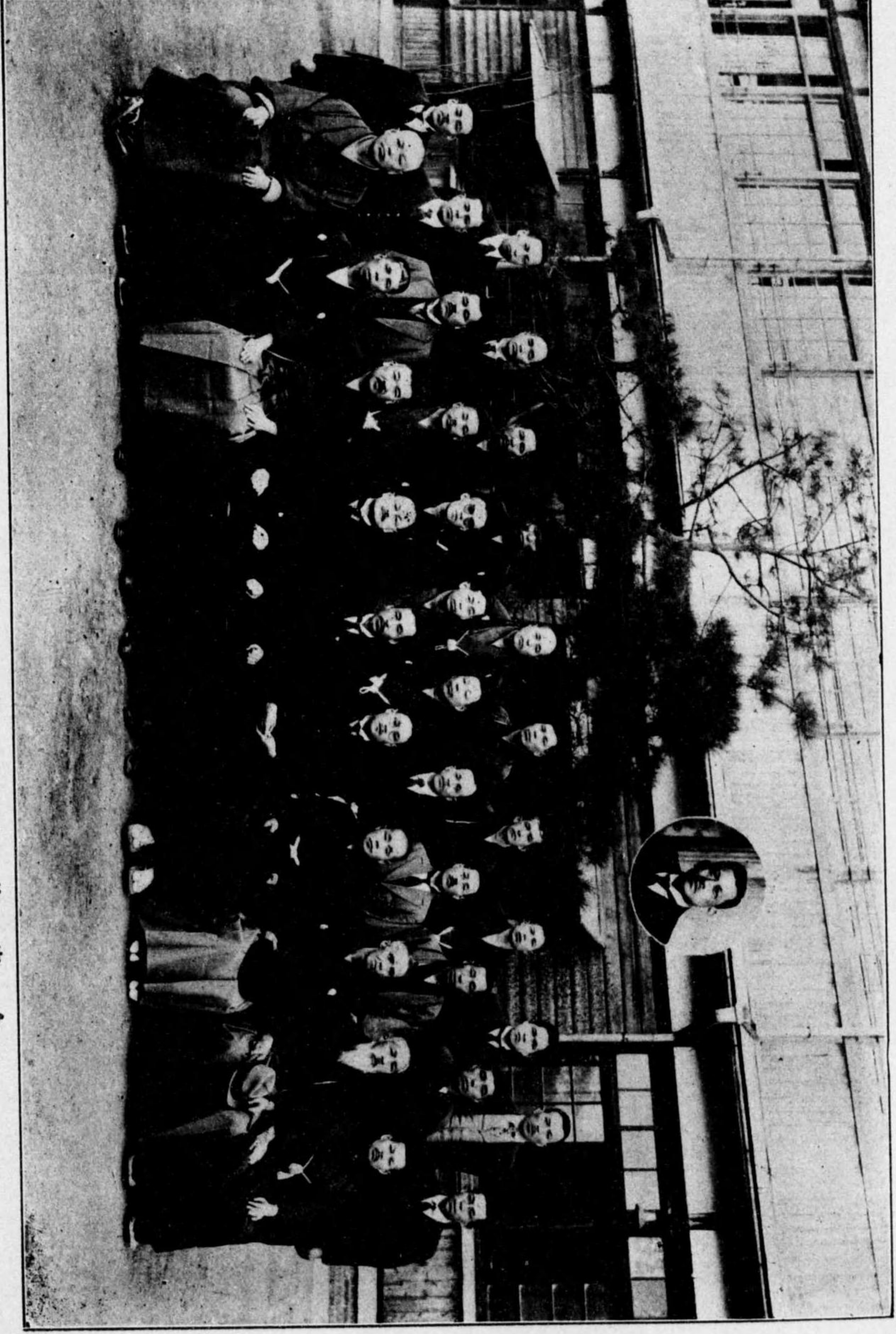
今宮第五小學校常科卒業生(十三年度)

- 沼 秀行氏 正木 聖氏
- 衣笠 圭介氏
- 中村岩太郎氏 荒井 虎夫氏
- 中野 顯正氏 巽トミノ氏 中塚 政義氏
- 二宮 敏三郎氏
- 山本 秀子氏 佐野しやう氏
- 宮崎 彰樹氏
- 堀内 助吉氏
- 鳥田 富榮氏 岡島フサエ氏
- 水口啓三郎氏
- 邊淺 義衛氏 牧野 敬順氏 高橋 靜江氏
- 井岡梅太郎氏
- 松田 靜香氏 坪井 幸子氏
- 中村 長治氏
- 奥本 民榮氏 平林トシエ氏
- 中川 慶次氏
- 鳥田 勇雄氏
- 瀬谷マツエ氏
- 加藤 あい氏
- 松浪甚四郎氏
- 信田 ナニ氏
- 喜田シカエ氏
- 井戸 孝一氏
- 梅田久壽枝氏
- 池田千代吉氏
- 藤田 公義氏
- 山崎 繁藏氏
- 下鳥 昌貞氏
- 岡本 亮一氏

水口 啓三郎氏
 湯淺 義衛氏 谷 彦次氏
 中川 慶次氏 橋本 善之輔氏
 寺下 伊三郎氏 田中 信一氏
 藤井 孝太郎氏 稻津 吉次郎氏
 新玉 佐喜太氏 佐々木 國太郎氏
 石田 松太郎氏 松岡 金太郎氏
 西岡 新次郎氏 山岡 清吉氏
 八代 德太郎氏 向井 常三郎氏
 松岡 清一氏 岡村 太平氏
 稻田 利二郎氏 河野 長太郎氏
 宮崎 彰彌氏
 木本 政次郎氏
 大石 大郎吉氏
 大川 小一郎氏
 森岡 義治氏
 吉田 敬道氏
 榎本 梅太郎氏
 山野 傳次郎氏
 齋藤 順次郎氏
 井内 惣八氏
 鈴木 福太郎氏

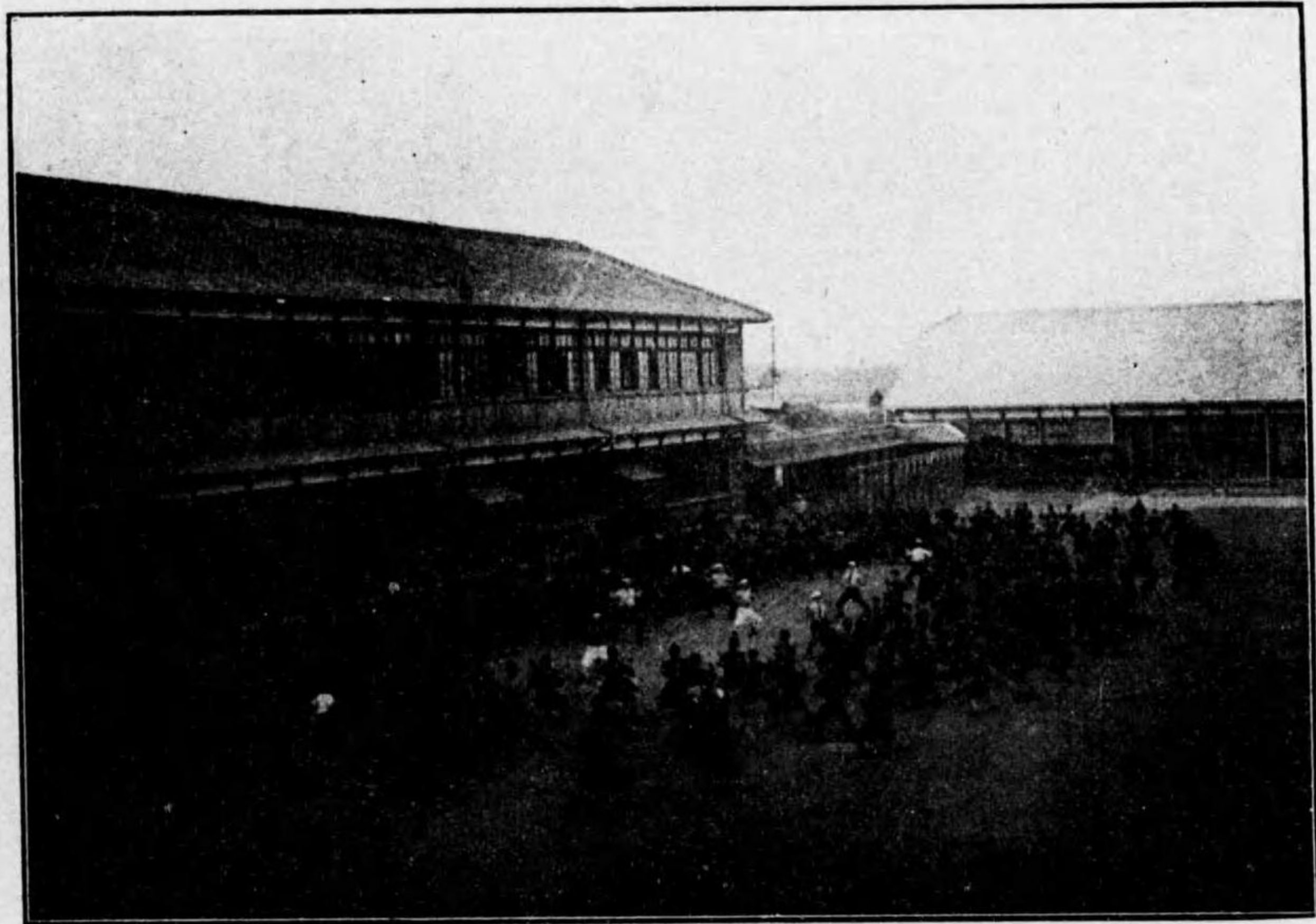
會長 山本 常石氏

今宮第五小學校後援會役員



山本 常 任 員

- | | |
|-------------|-------------|
| 宮 御 導 員 | 鈴木 圓 太 員 |
| 篠田 味 一 員 | 西 野 長 太 員 |
| 森 岡 常 一 員 | 岡 村 太 平 員 |
| 八 分 康 太 員 | 向 井 常 三 員 |
| 西 岡 藤 太 員 | 山 岡 常 吉 員 |
| 江 田 盛 太 員 | 森 岡 金 太 員 |
| 藤 正 武 喜 太 員 | 森 木 國 太 員 |
| 藤 井 幸 太 員 | 藤 井 吉 太 員 |
| 寺 下 常 三 員 | 田 中 常 一 員 |
| 中 川 彌 太 員 | 藤 本 善 之 助 員 |
| 新 野 謙 太 員 | 谷 善 太 員 |
| 水 口 常 三 員 | |



第五小學愛汗少年團



第五小學愛汗學校

町長 貞本義保氏

助役 松岡金太郎氏

助役 藤田安次郎氏



現 理 事 者

伊 貝 貞 本 義 君 丑

伊 野 益 岡 金 太 郎 丑

伊 野 藤 田 定 次 郎 丑

中野豊三郎氏

渡邊麻治郎氏

四谷福松氏

廣江武藏氏

勝田横太郎氏



長町代歴

中 理 豊 三 浪 汎

新 藤 源 舒 浪 汎

四 谷 彌 孫 汎

岡 丘 友 藤 汎

堀 田 勝 太 浪 汎

市來圭一氏

天正信藏氏

柴田伊勢松氏

中村伊三郎氏

江上彦助氏

濱田己之助氏

伊原勝太郎氏



氏 諸 役 助 代 歴

市 來 圭 一 氏

天 五 計 藤 氏

柴 田 母 徳 盛 氏

中 林 母 三 浪 氏

山 土 斎 健 氏

齋 田 五 之 健 氏

母 原 綱 太 浪 氏

高善四郎氏(前町長)

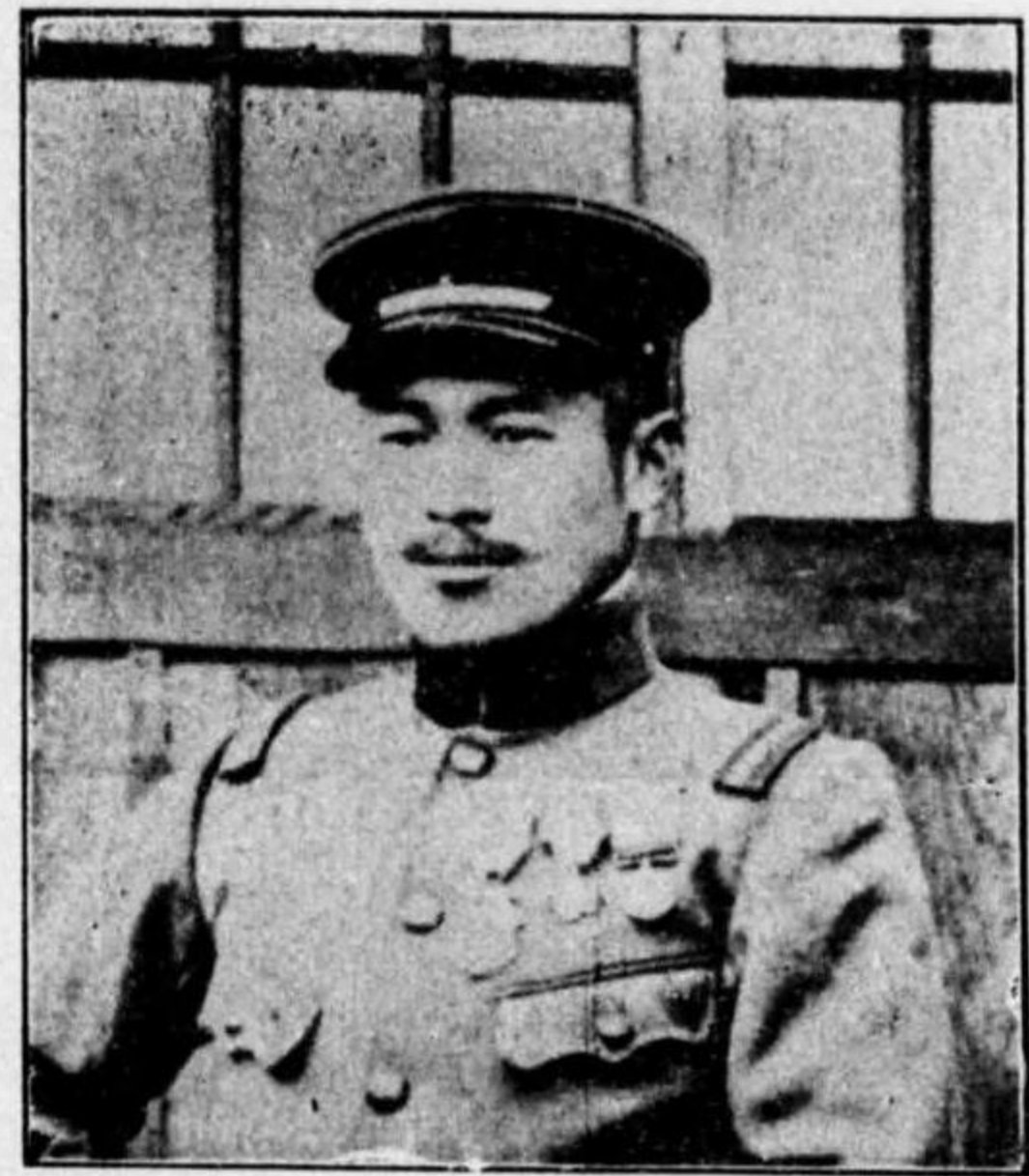
谷野清吉氏

濱田徳松氏

堂本安三郎氏

關野英之助氏

岩間繁吉氏



(一) 員 議 會 町

堂本 定三 君

關 裡 英 五 郎 君

岩 間 兼 吉 君

高 善 四 郎 君 (浦 田 君)

森 裡 清 吉 君

高 田 勲 吉 君

廣岡爲治氏

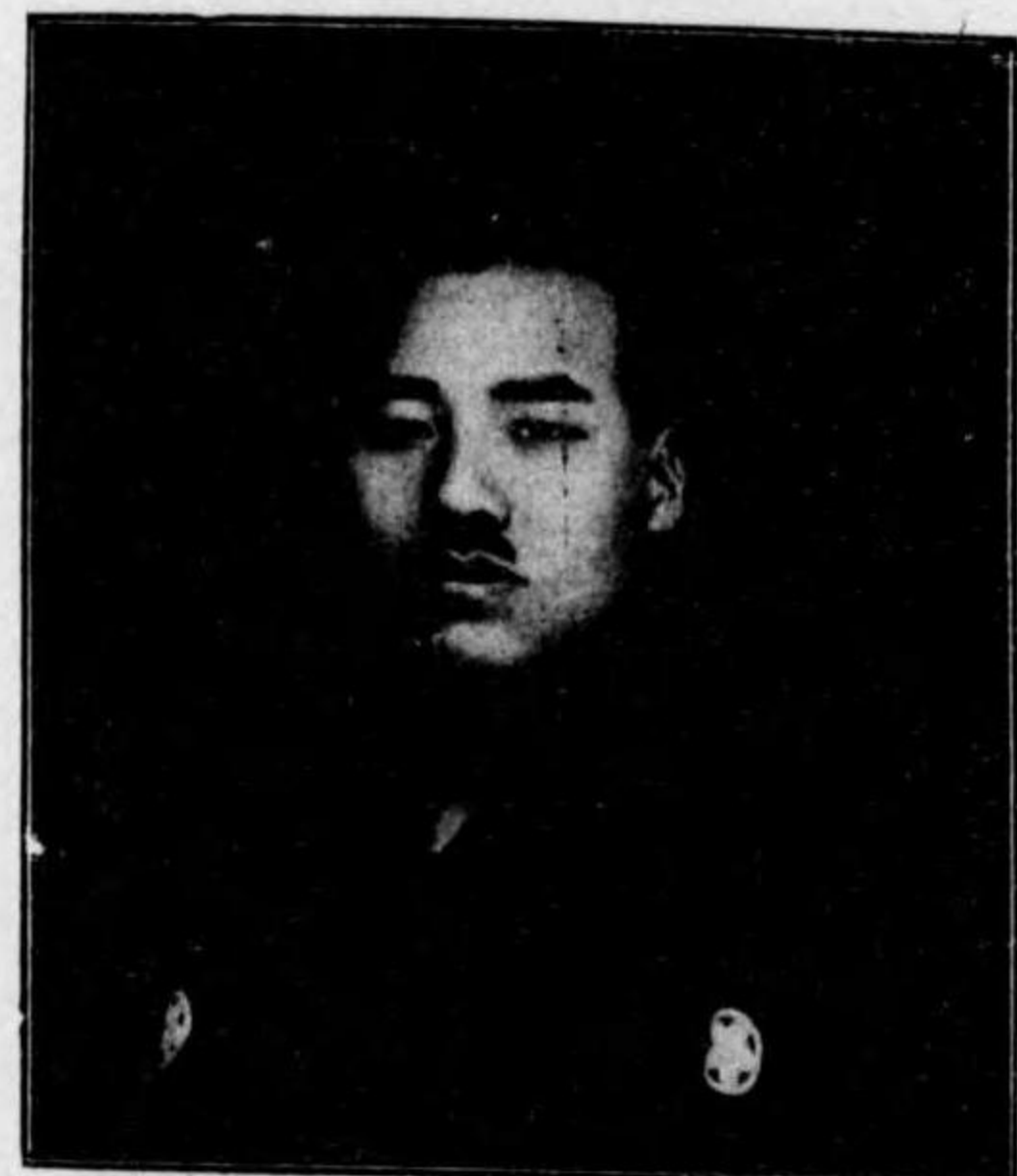
久富矩直氏

平田市太郎氏

柴田藤吉氏

久島諦氏

齋藤順次郎氏



(二) 員 議 會 町

榮 田 藤 吉 氏

八 島 龍 氏

齋 藤 隼 夫 氏

岡 田 益 前 氏

八 富 耿 直 氏

平 田 市 太 狼 氏

福田 濱五郎氏

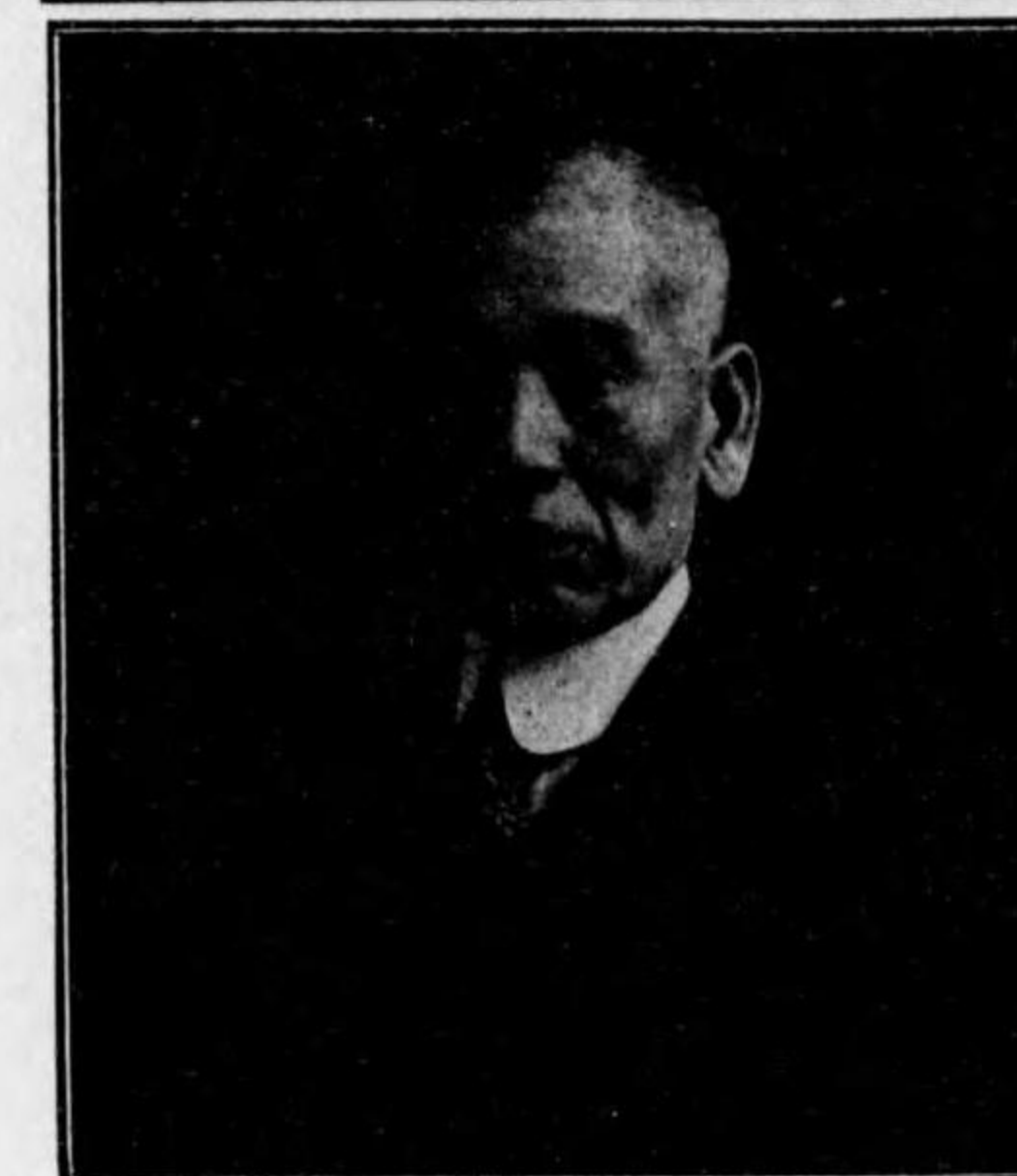
野本 吉三郎氏

木原 純一氏

濱田 源三郎氏

山本 宇太郎氏

榎並 善次郎氏



(三) 員 議 會 町

藤田 隆五 浪 刃

藤田 隆三 浪 刃

榎本 吉三 浪 刃

山本 宇太 浪 刃

木 原 棘 一 浪 刃

野 並 善 夫 浪 刃

渡部 熊八氏

平井 春之丞氏

中川 菊松氏

濱田 吉二郎氏

小川 竹治郎氏

井邊 榮一氏



(四) 員 議 會 町

新田吉二郎

小川竹節

井上榮一

新田八郎

平井春彦

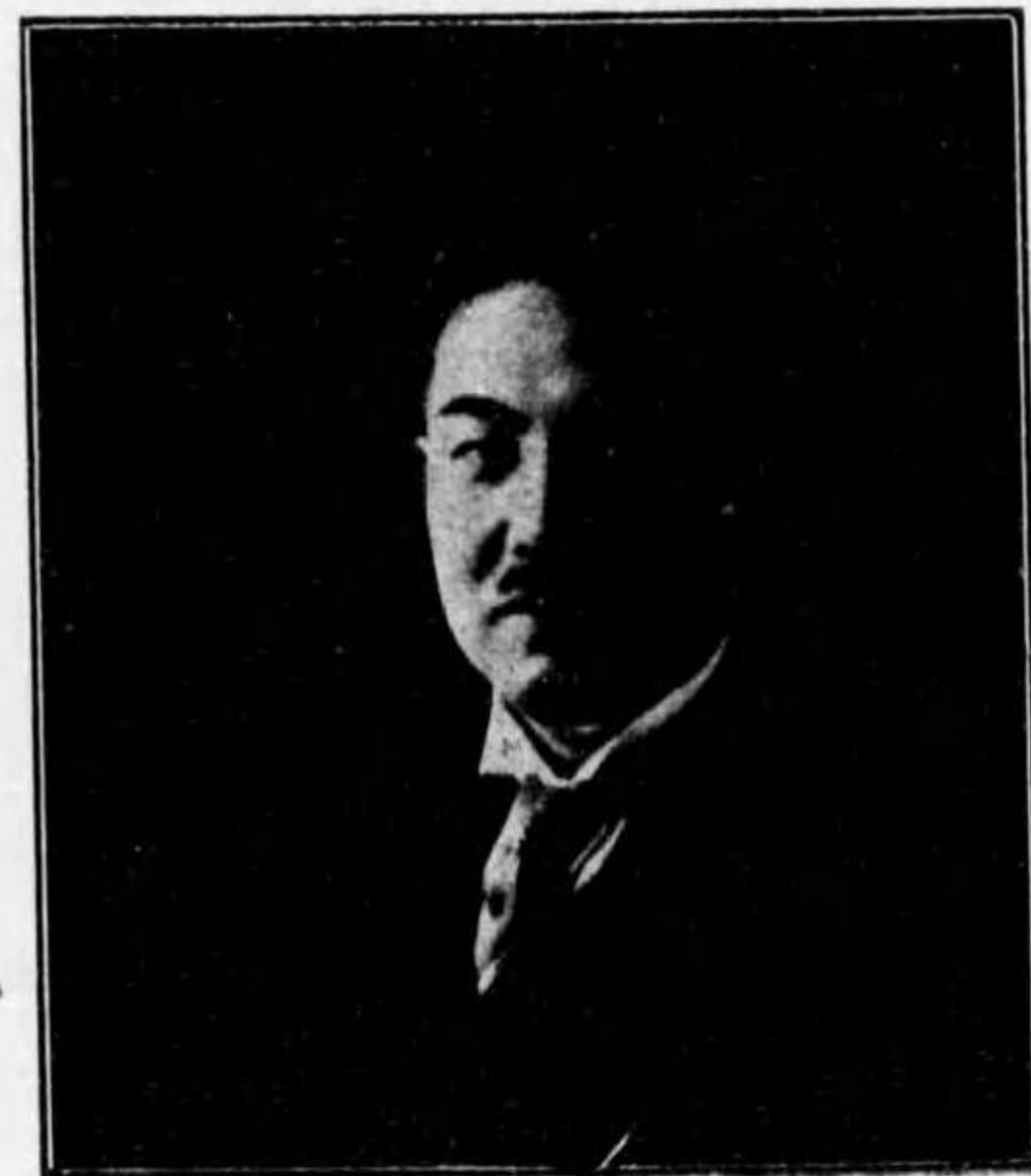
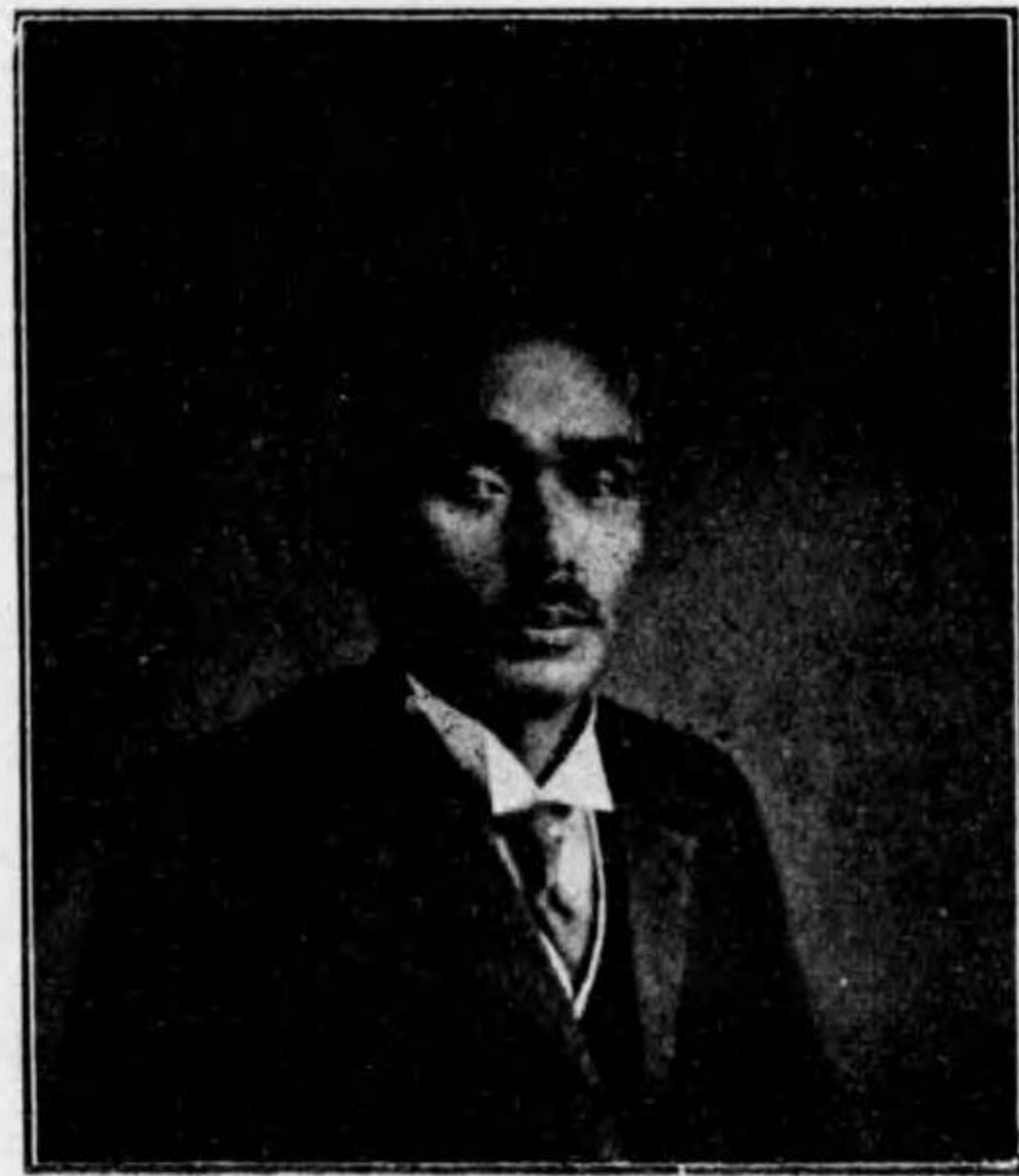
中川藤吉

梅本乙治郎氏

四宮九平氏

野口安五郎氏

岩崎彌一郎氏



(五) 員 議 會 町

四宮 大平 君

藤本 心齋 君

岸 謙一 君

櫻口 安正 君

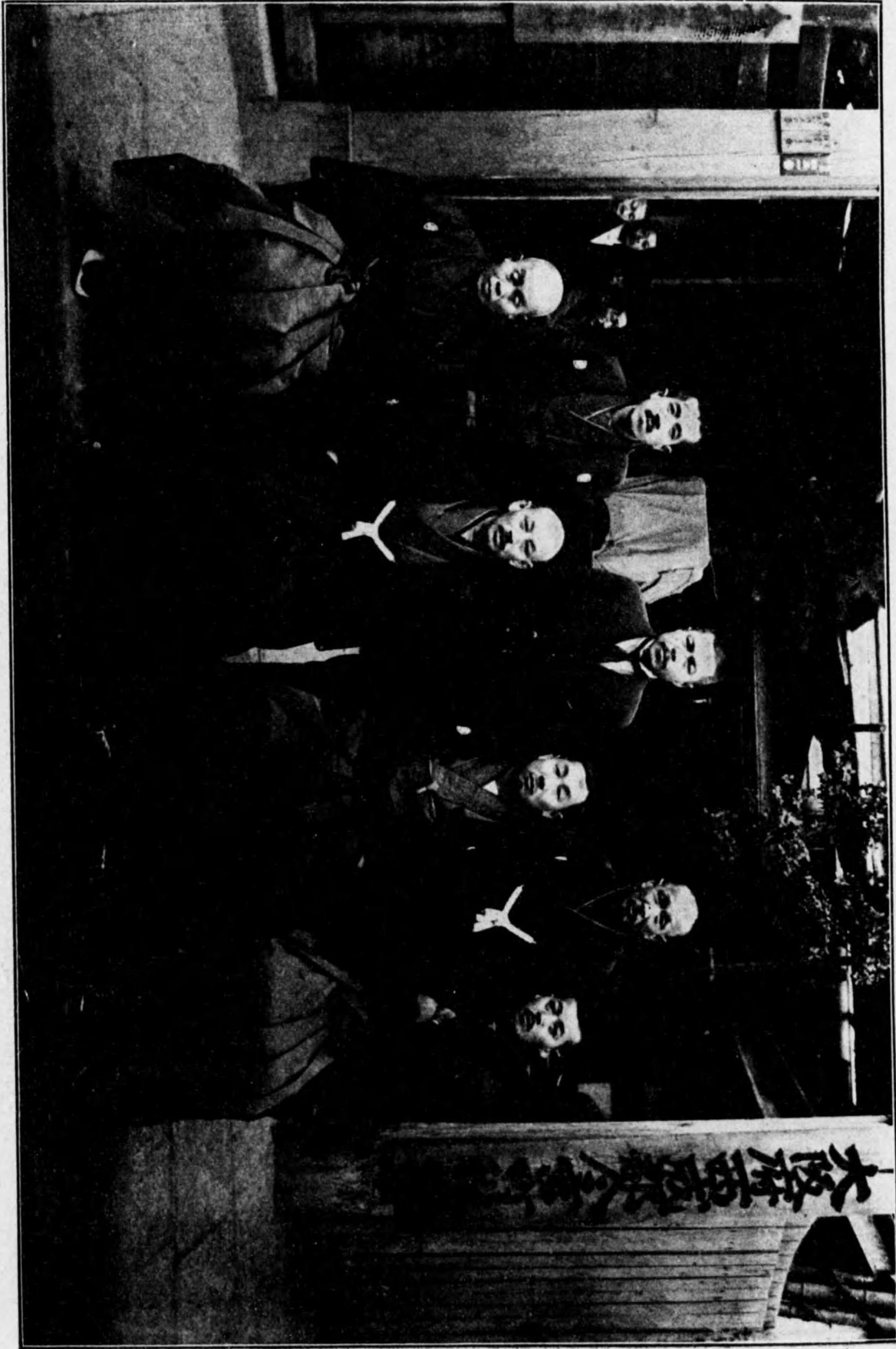
水道 保
 長谷氏
 藤岡氏
 奥田氏
 岩下氏
 山本氏
 坂本氏
 藤田氏
 鳴戸氏
 門脇氏
 江島氏
 金本氏
 柴田氏
 川崎氏
 水口氏
 森本氏
 福田氏
 田山氏
 田守氏
 新家氏
 増田氏
 錢家氏
 游水氏
 長谷氏
 藤岡氏
 奥田氏
 岩下氏
 山本氏
 坂本氏
 藤田氏
 鳴戸氏
 門脇氏
 江島氏
 金本氏
 柴田氏
 川崎氏
 水口氏
 森本氏
 福田氏
 田山氏
 田守氏
 新家氏
 増田氏
 錢家氏

水道 保
 長谷氏
 藤岡氏
 奥田氏
 岩下氏
 山本氏
 坂本氏
 藤田氏
 鳴戸氏
 門脇氏
 江島氏
 金本氏
 柴田氏
 川崎氏
 水口氏
 森本氏
 福田氏
 田山氏
 田守氏
 新家氏
 増田氏
 錢家氏
 游水氏
 長谷氏
 藤岡氏
 奥田氏
 岩下氏
 山本氏
 坂本氏
 藤田氏
 鳴戸氏
 門脇氏
 江島氏
 金本氏
 柴田氏
 川崎氏
 水口氏
 森本氏
 福田氏
 田山氏
 田守氏
 新家氏
 増田氏
 錢家氏

大野氏
 柳原氏
 川崎氏
 波濰氏
 米谷氏 (給仕)
 太田氏 (給仕)
 布施氏 (給仕)
 三木氏
 宮崎氏
 大槻氏
 奥田氏
 大野氏
 柳原氏
 川崎氏
 波濰氏
 米谷氏 (給仕)
 太田氏 (給仕)
 布施氏 (給仕)
 三木氏
 宮崎氏
 大槻氏
 奥田氏

玉木氏
 長豊氏
 工藤氏
 長谷氏
 藤田氏
 貞本氏 (町長)
 松岡氏 (助役)
 近藤氏 (課長)
 近藤氏 (課長)
 西井氏 (課長)
 榎倉氏 (會計)
 三角氏 (課長)
 錢谷氏 (課長)
 齋藤氏
 久井氏
 大谷氏
 戸上氏
 阿部氏
 近藤氏
 近藤氏
 松岡氏
 貞本氏
 藤田氏
 長谷氏
 工藤氏
 長豊氏
 玉木氏

岩間 繁吉氏
中川 菊松氏
井邊 繁一氏
濱田 源三郎氏
野口 安五郎氏
濱田 吉二郎氏
平井 春之丞氏



齋田 吉二 氏	平井 春之丞 氏
井 龜 梁 一 氏	裡口 安正 氏
中川 藤 益 氏	齋田 爾三 氏
	岸間 兼吉 氏

奥本民藏氏今官第二等
常小學校長

山田富之助氏

安福敏昭氏

貞本義保氏今官
町長

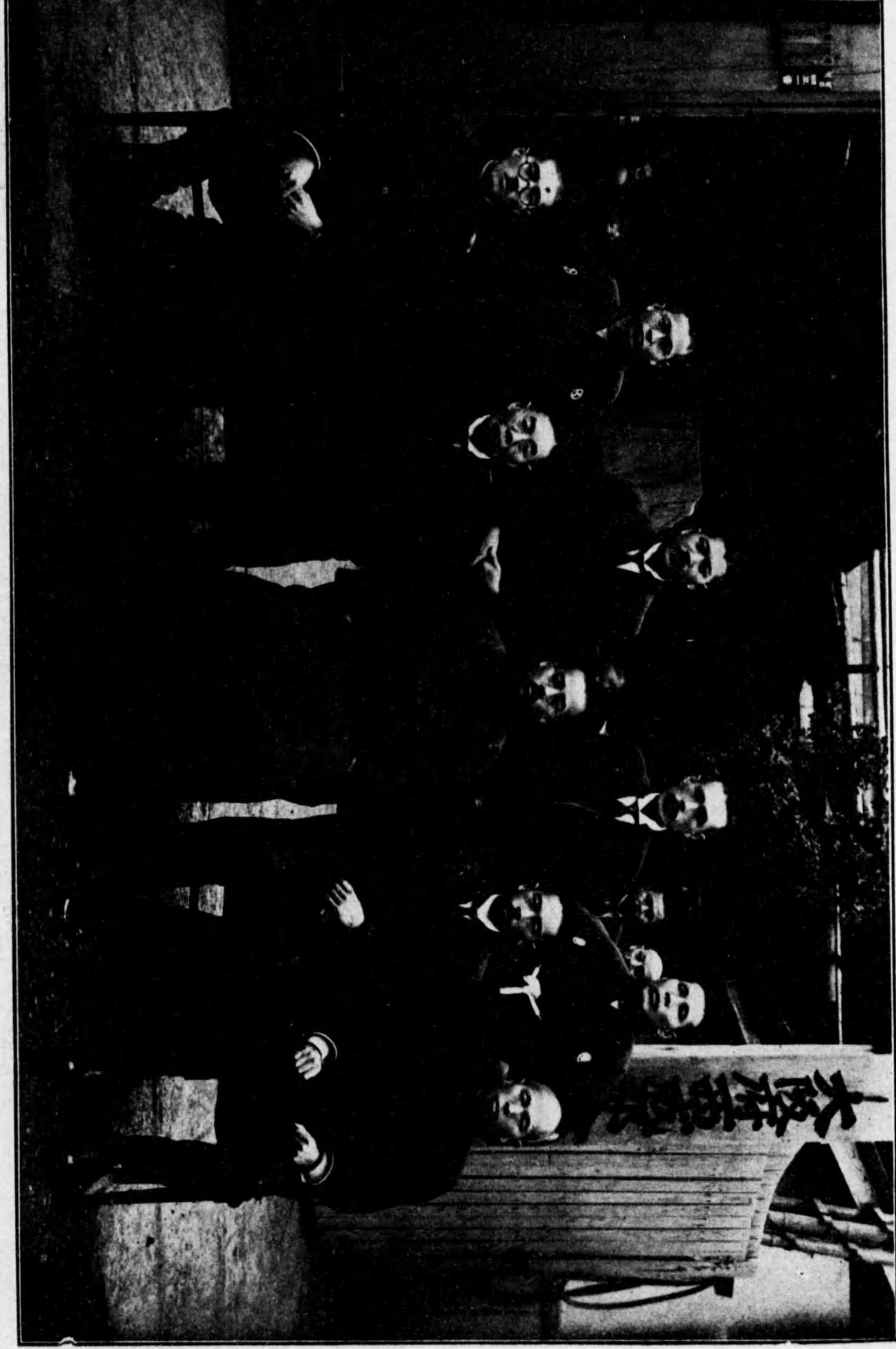
柴田藤吉氏

長田寛三氏今官第三等
常小學校長

久鳥謙氏

堂本安三郎氏

坂部健太郎氏



丸 根 大 贊 研 延

丸 根 三 安 本 愛

丸 根 謙 員 人

丸 根 三 實 田 長
長 崎 縣 立 小 學 常 會 員
三 縣 立 小 學 常 會 員

丸 根 吉 謙 田 榮

丸 根 裕 善 本 貞
長 崎 縣 立 小 學 常 會 員

丸 根 謙 延 隔 安

丸 根 之 富 田 山

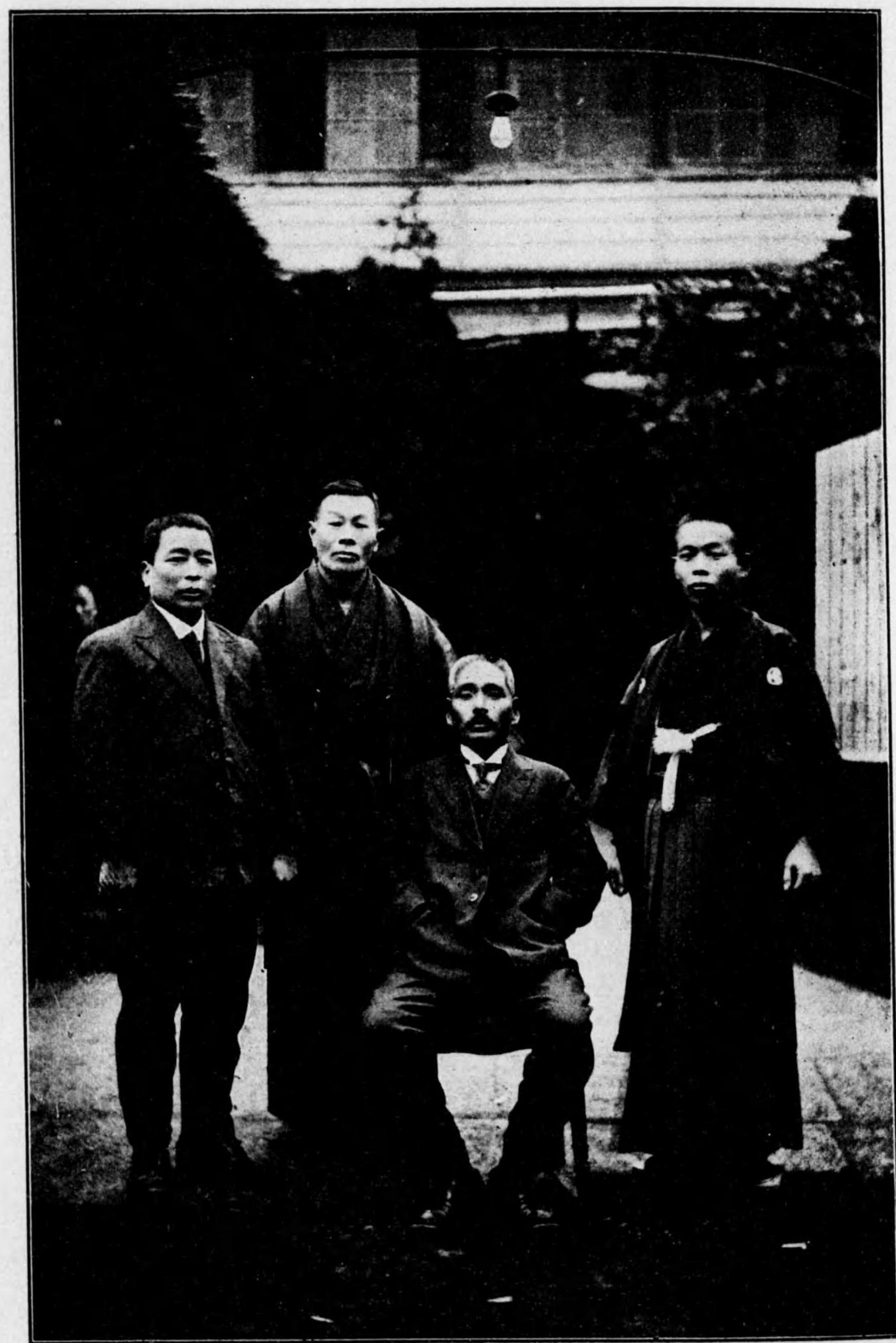
丸 根 謙 員 本 奧
長 崎 縣 立 小 學 常 會 員
二 縣 立 小 學 常 會 員

畚野清吉氏

梅本乙治郎氏

平田市太郎氏

廣岡爲治氏



水 道 委 員

翁
裡
壽
吉
丑

琳
本
心
館
順
丑

平
田
市
太
順
丑

岡
岡
益
館
丑

波部熊八氏

山本太郎氏

岩崎彌一郎氏

福田濱五渡氏

濱田吉二郎氏



員委場市設公

新	山	岸	岡	新
橋	本	本	田	田
煎	宇	波	野	吉
八	太	一	近	二
丸	浪	浪	野	浪
	丸	丸		丸

關野 葵之助氏
渡部 雄八氏

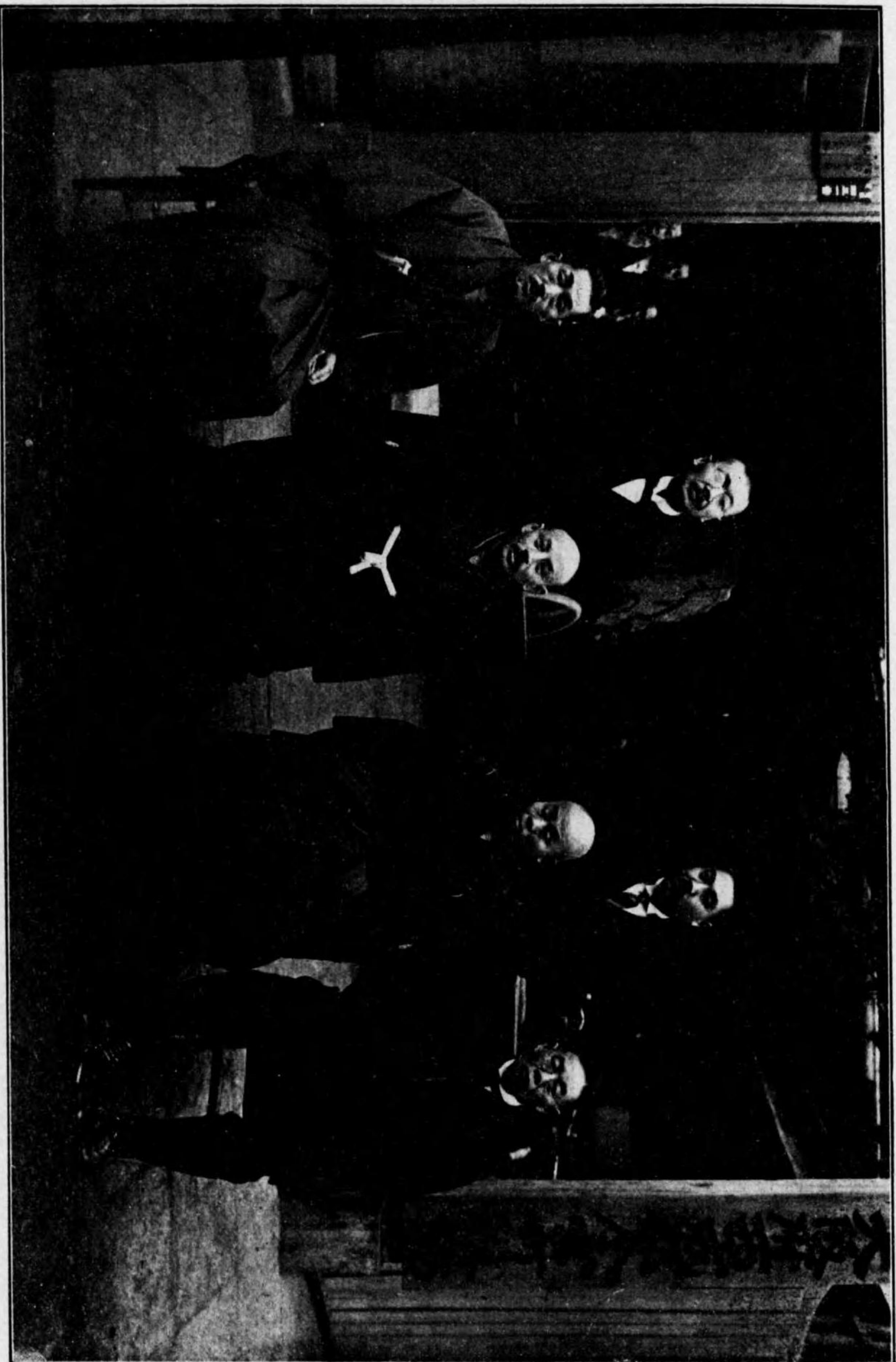
野口 安五郎氏

平井 春之丞氏

久島 謙氏

岩崎 彌一郎氏

衛 生 委 員 員



關 禮 英 之 佩 丑

趙 雅 鎮 八 丑

禮 口 兌 五 丑

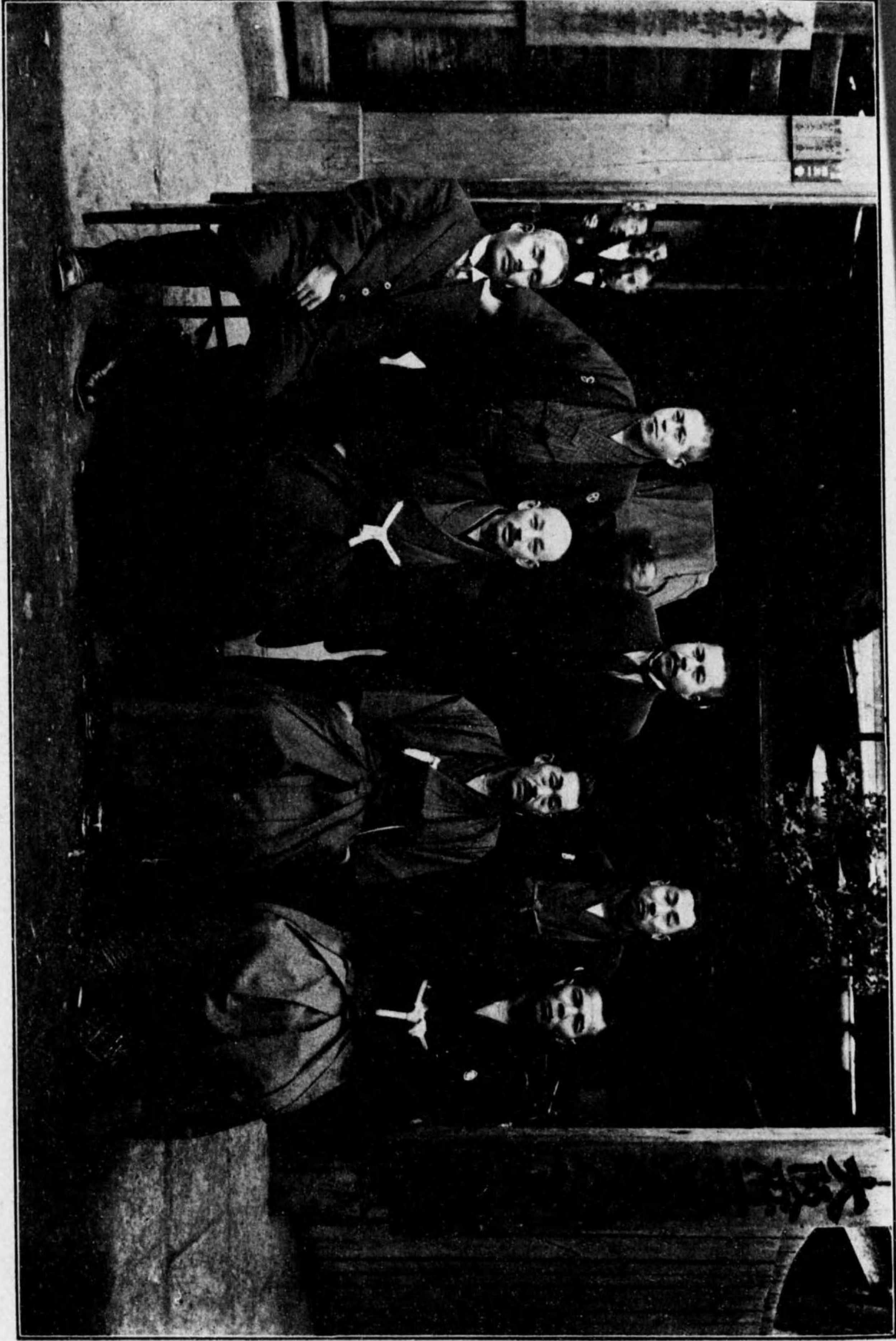
平 非 春 之 丞 丑

崇 積 隆 一 頤 丑

八 嶺 龍 丑

梅本 乙治郎氏
野口 安五郎氏
井邊 繁一氏
横田 源三郎氏
渡部 熊八氏
福田 資五郎氏
豊本 安三郎氏

消 防 委 員



藤本 三郎 氏

櫻口 茂正 氏

高橋 兼人 氏

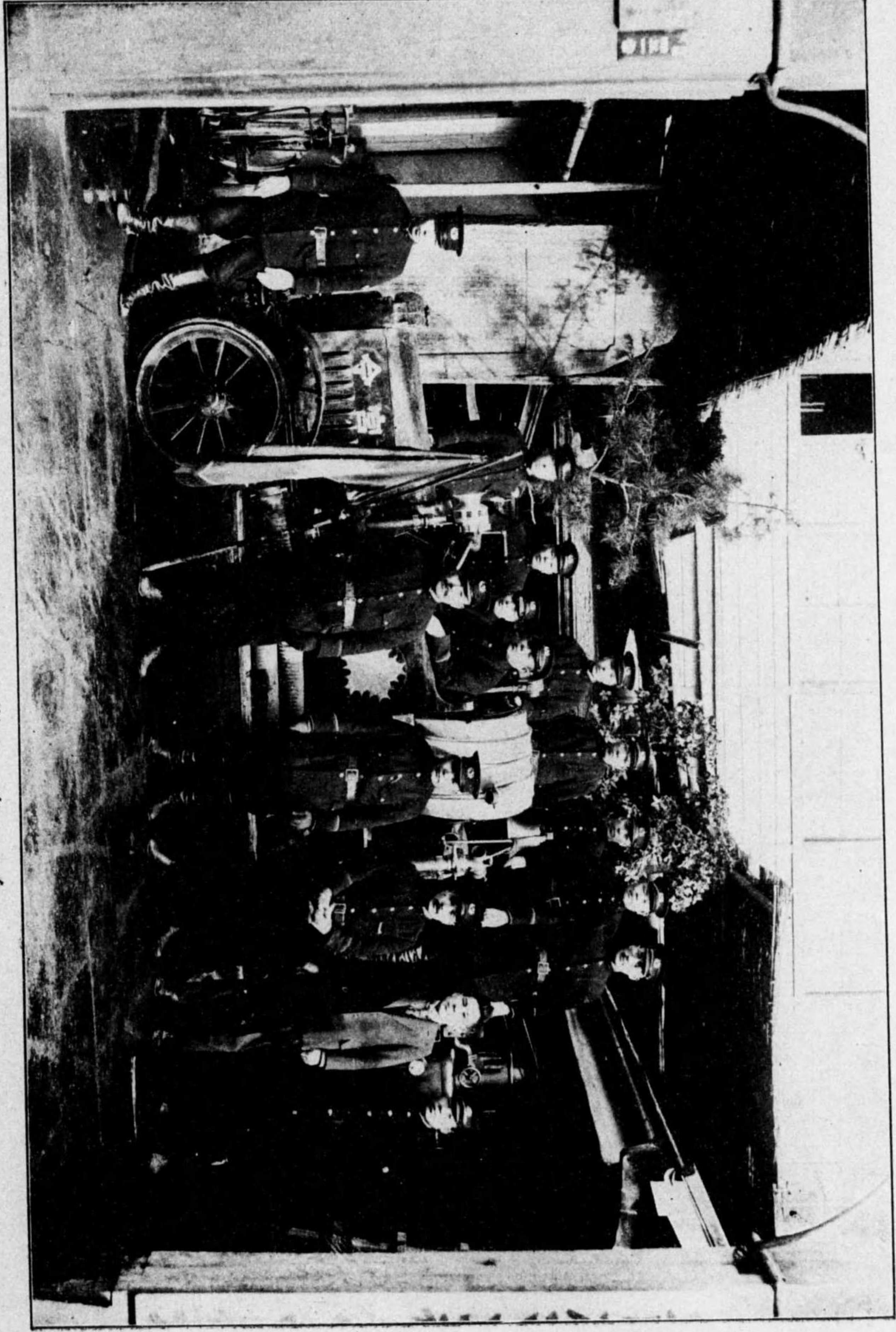
藤田 隆正 氏

堂本 空三 氏

井 繁 榮 一 氏

藤田 隆三 氏

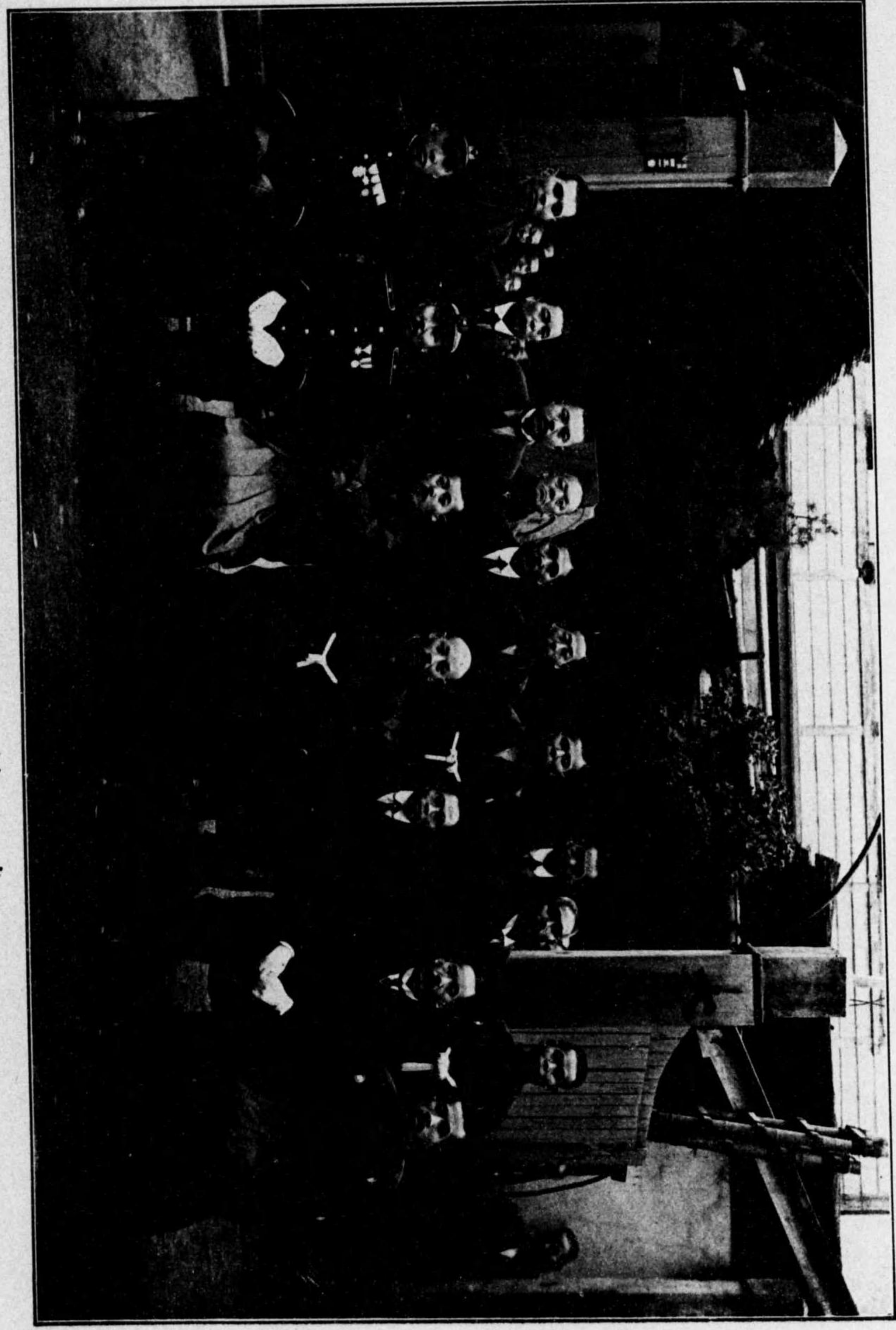
車上向字右ヨ、
前列向字右ヨ、
小頭 三木 才二 消防手 村上 利三郎
消防手 阿形 福太郎 役場吏員 谷口 美之助
同 工藤 熊吉 消防手 米谷 熊吉
同 川野 伸治 小頭 新家 好太郎
同 南 保司 消防手 西崎 伸輔
組頭 佐久間 秀太郎
消防手 平田 吾市 消防手 田邊 菊松
同 田淵 勇吉
同 清水 潔



同 務 水 部
 同 田 崎 原 吉
 警 視 手 平 田 吾 市 警 視 手 田 藝 藤 益
 監 視 公 人 間 表 本 狼
 同 南 菊 同 警 視 手 西 部 中 神
 同 川 裡 中 館 小 原 藤 案 我 本 狼
 同 工 藤 藤 吉 警 視 手 米 谷 藤 吉
 警 視 手 岡 塚 藤 本 狼 警 視 手 谷 口 美 之 順
 小 原 三 木 本 二 警 視 手 替 上 隆 三 狼
 車 上 向 之 古 三 狼 前 隊 向 之 古 三 狼

田中 鶴吉氏	廣岡 爲治氏	井邊 榮一氏	水谷 總之助氏 (書記)	山本 字太郎氏	松岡 金太郎氏	福田 禮五郎氏	南雲 清次郎氏	梅本 乙治郎氏	森野 清吉氏
眞綱 喜三郎氏	小寺 正吉氏	岩間 繁吉氏	野口 安五郎氏	高木 伊佐吉氏	四ノ谷 福松氏	濱田 吉二郎氏			

員 委 面 方



- | | |
|----------|--------------|
| 田中 健吉 氏 | 島 隆 喜三 氏 |
| 菊岡 益 氏 | 小寺 五吉 氏 |
| 井 藤 榮一 氏 | 水谷 勝之 氏 (書頭) |
| 山本 宇太 氏 | 岩間 兼吉 氏 |
| 松岡 金太 氏 | 理口 安正 氏 |
| 藤田 正 氏 | 高木 竜吉 氏 |
| 南 雲 祐次 氏 | 四ノ谷 藤吉 氏 |
| 坂本 乙 氏 | 野田 吉三 氏 |
| 香 根 尚吉 氏 | |

瀧川 清太郎

南雲 清次郎氏

田村 庄次氏

? 氏

福田 清五郎氏

天正 秀太郎氏

柴田 藤吉氏

北川 彌太郎氏

井邊 榮一氏

横木 熊藏氏

牧 港次郎氏

平田 市太郎氏

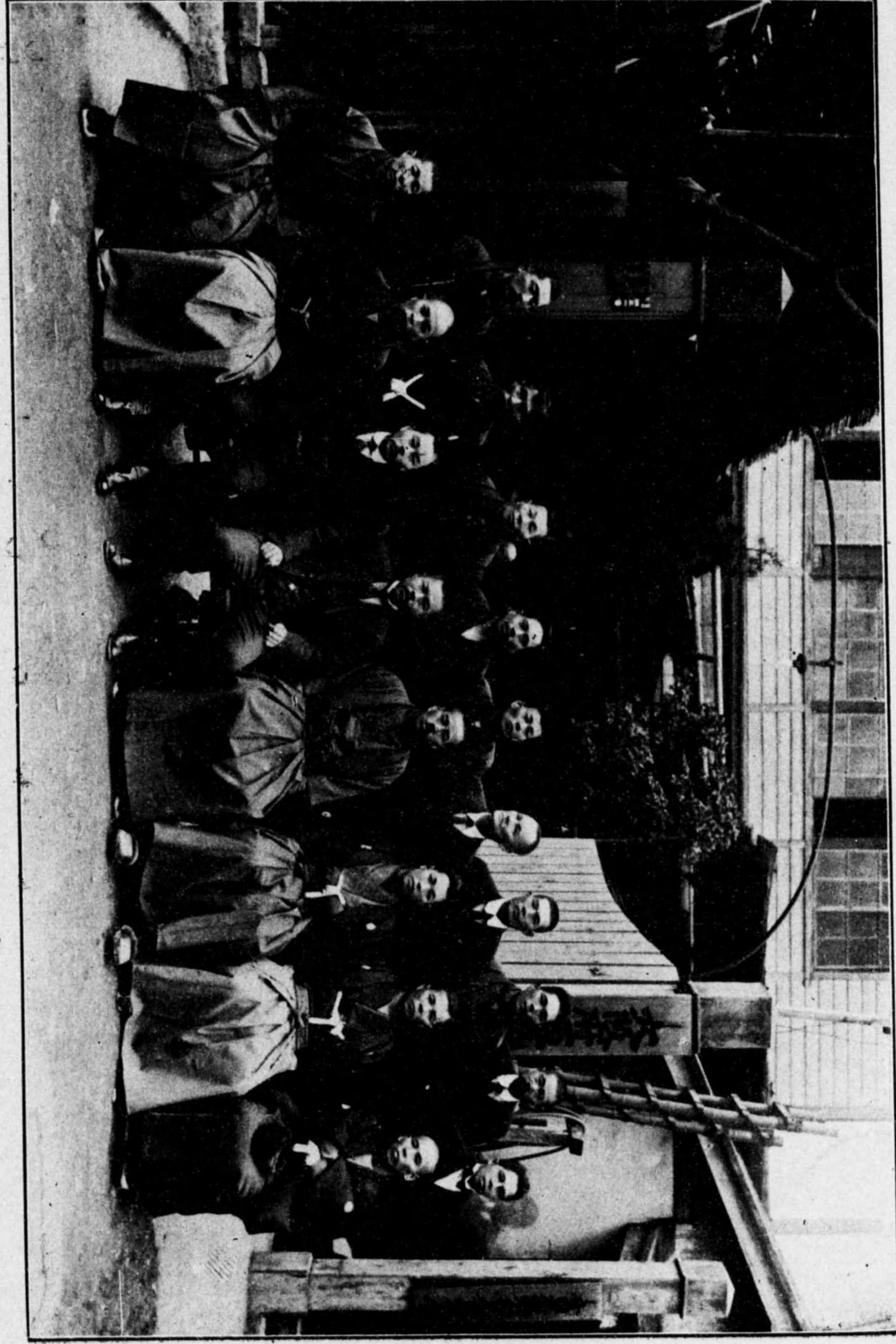
淺田 卓爾氏

? 氏

大塚 利三郎氏

濱田 甚三郎氏

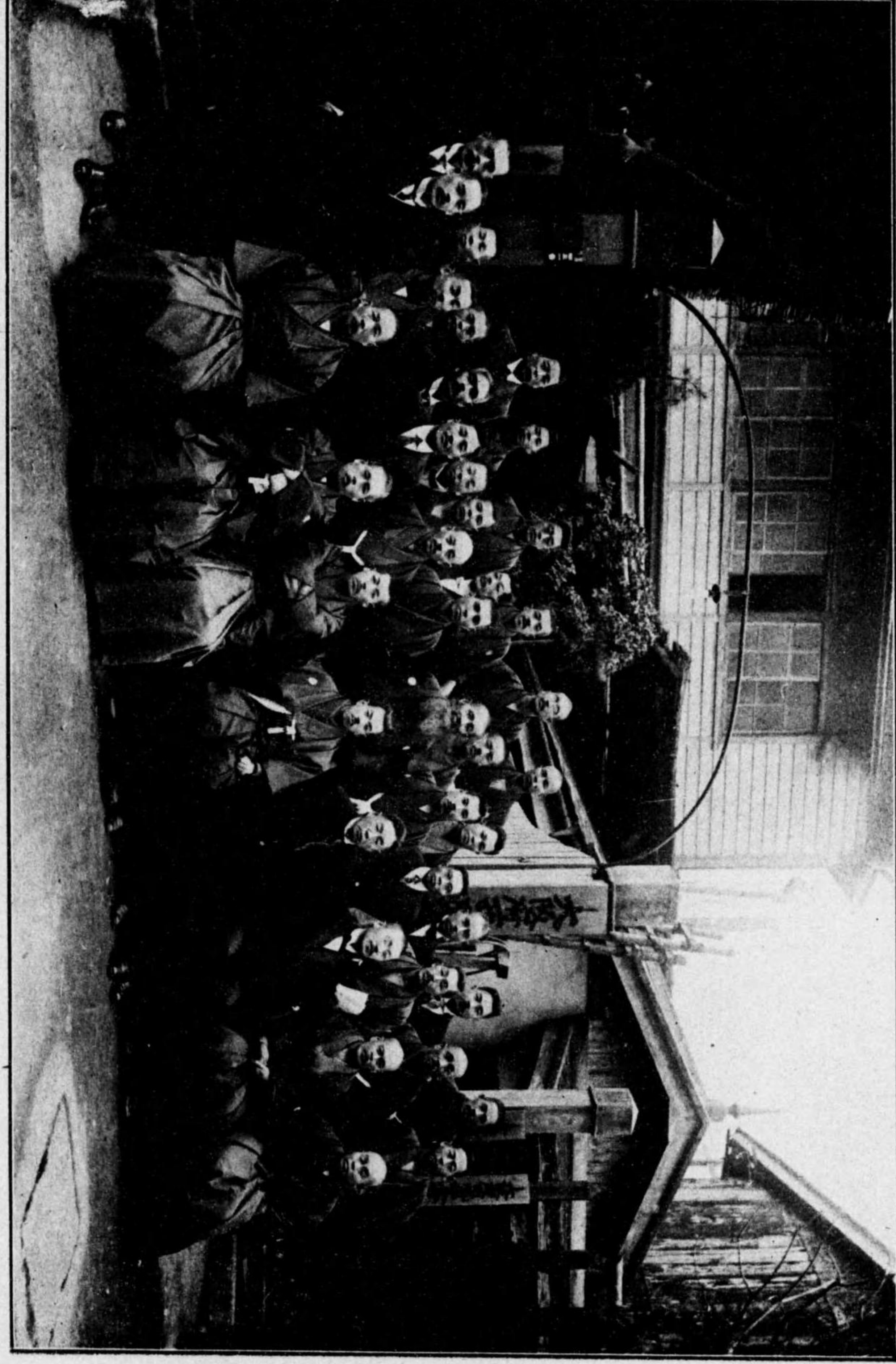
今宮米法專指委員



齋田 甚三郎 氏	大塚 味三郎 氏
?	齋田 卓爾 氏
平田 市太郎 氏	野 齋次郎 氏
勝木 龍彌 氏	井 益 榮一 氏
井川 龍太郎 氏	榮田 龍吉 氏
櫻林 神彌 氏	天五 幸次郎 氏
?	藤田 龍正 氏
田林 五夫 氏	中川 龍吉 氏
南雲 龍次郎 氏	
	藤川 龍太郎

松岡 金太郎氏
 ? 氏
 中川 菊松氏
 平井 春之丞氏
 岩崎 彌一郎氏
 渡部 熊八氏
 櫻井 知厚氏
 藤井 信太郎氏
 榊原 皇治氏
 高木 伊佐吉氏
 天正 秀太郎氏
 關野 英之助氏
 竹中 光之助氏
 柴田 藤吉氏
 谷村 政吉氏
 久鳥 謙氏
 田中 鶴吉氏
 藤浦 岩次郎氏
 板野 久氏
 鈴木 米太郎氏
 野口 安五郎氏
 福田 積五郎氏
 佐々木 國次郎氏
 岩間 繁吉氏
 宮野 丈吉氏
 山本 宇太郎氏
 榎本 乙治郎氏
 岡村 治三郎氏
 堂本 安三郎氏
 廣岡 爲治氏
 濱田 源三郎氏
 山根 武助氏
 平田 市太郎氏
 四ノ谷 福松氏
 貞本 義保氏

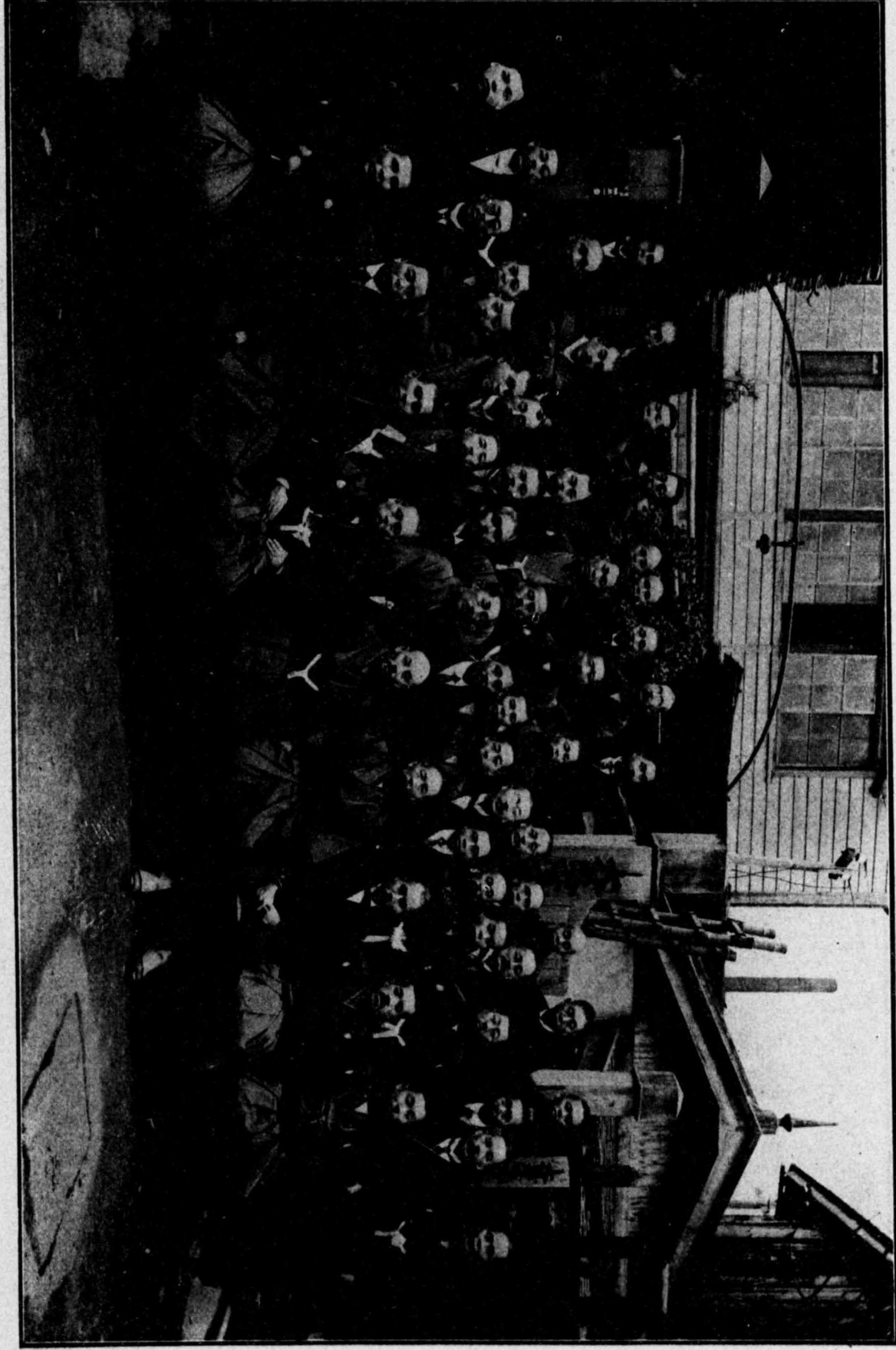
今宮町衛生組合評議員



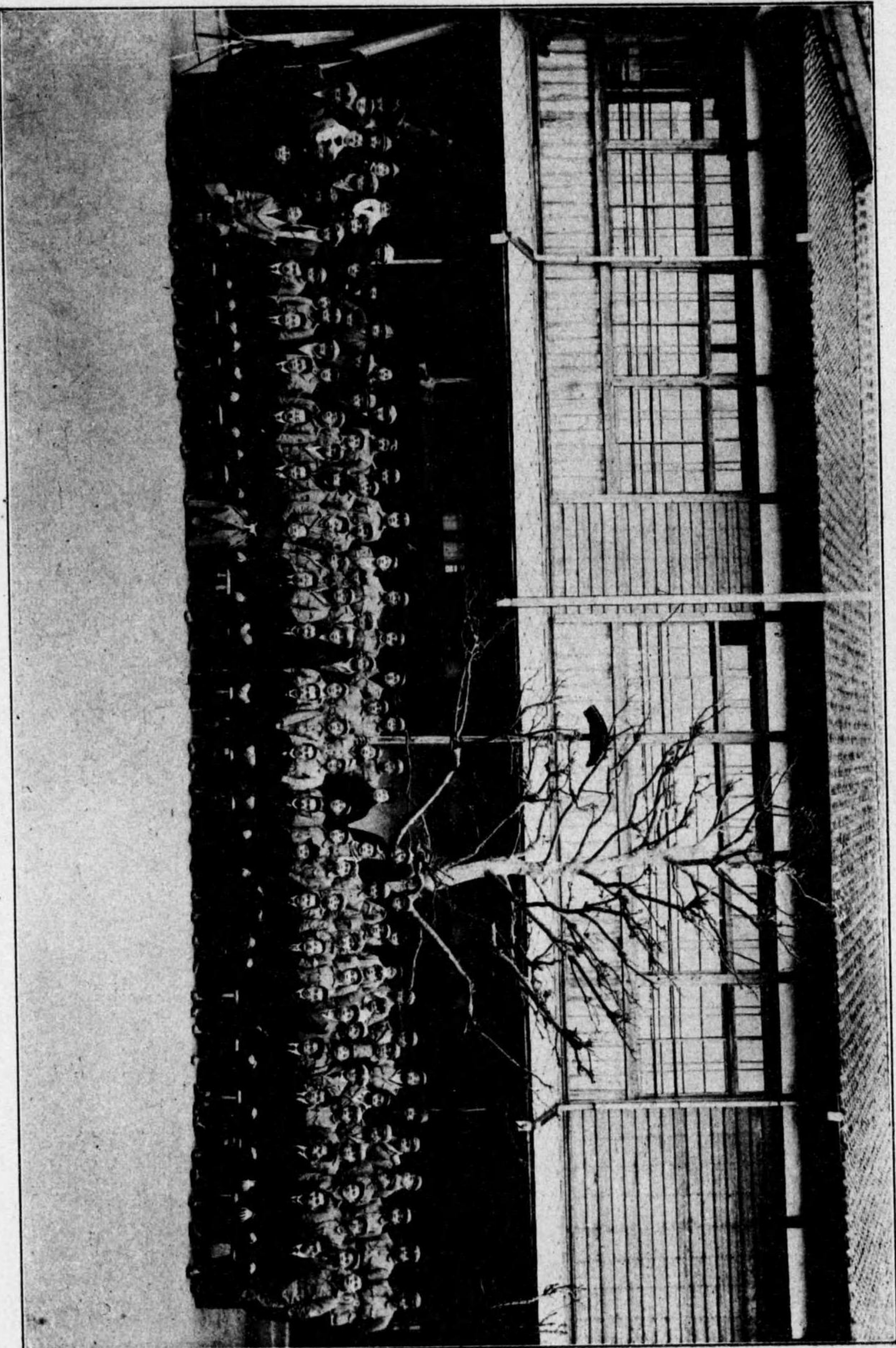
- | | | |
|---------|-----------|----------|
| | 貞本 義 君 | |
| | 四ノ谷 顯 君 | |
| | 平田 市太 君 | |
| 岡田 益 君 | 齋田 隆三 君 | 山縣 九郎 君 |
| | 堂本 茂三 君 | |
| | 藤本 五郎 君 | 岡村 信三 君 |
| 宮裡 大 君 | 山本 宇太 君 | |
| | 森 木 國夫 君 | 岩間 兼吉 君 |
| | 藤田 正 君 | |
| | 裡口 定正 君 | |
| 鈴木 米次 君 | 總部 崇夫 君 | 坂 裡 八 君 |
| | 田 中 鶴吉 君 | |
| | 谷 林 延吉 君 | 八 島 橋 君 |
| 野田 吉二 君 | 柴田 藤吉 君 | |
| | 竹中 米之 君 | |
| 轉 眞 是 君 | 天五 泰太 君 | 關 裡 英之 君 |
| | 高木 伸吉 君 | |
| | 藤 井 味 眞 君 | 藤 井 富太 君 |
| | 新 井 龍八 君 | |
| 中川 祐吉 君 | 岩 崎 一 君 | 平 井 春之 君 |
| | 中川 藤 君 | |
| | ? | |
| | 松岡 金太 君 | |

長澤辰治郎	四ノ谷福松	南雲清次郎	山本雅太郎	濱田吉二郎	三宅佐太郎	櫻井知厚	高木伊佐吉	松岡金太郎	山根武助	山本字太郎	野口安五郎	渡部熊八	岡村治三郎	梅本乙治郎	佐々木彌太郎	丹波道彦田中鶴吉	山本公義	岩間繁吉	廣岡爲治	浦上谷次郎	東	東山田富之助	勝浦岩次郎	福田米八							
榎並善次郎	久島謙	平井春之丞	川端末治郎	安藤峰吉	關野英之助	福田積五郎	柴田藤吉	大塚利三郎	吉田繁治郎	天正秀太郎	牧港次郎	井邊榮一	丹波道彦田中鶴吉	山本公義	岩間繁吉	廣岡爲治	浦上谷次郎	東	東山田富之助	勝浦岩次郎	福田米八	瀧川清太郎	中川菊松	中川梅吉	千原米松	構原軍治	岩崎彌一郎	瀧成太郎	平田市太郎	安滿勝憲	中川清太郎

氏諸員委勵共興作神精民國



藤川 裕太郎	中川 義吉	細節 崇太郎	藤田 米八
安部 細藏	代野 正次	東	東山田 富之助
平田市 太郎	新 如太郎	節上 谷次郎	岩間 兼吉 阿部 勉吉
新 如太郎	新 田 卓爾	山本 公壽	山本 公壽
中川 義吉	野 田 卓爾	野 田 卓爾	代野 重彦 田中 健吉
千原 米藏	天五 泰太郎	井 野 榮一	新 本 三郎
藤原 軍吉	吉田 繁吉	栗田 藤吉	新 藤 八
岩 神 一	大 崎 三郎	藤田 隆五郎	山本 宇太郎 櫻口 安正郎
		關 根 英之助	岩 岡 金太郎
		安 藤 伸吉	高木 母吉
		川 崎 末吉	三 宇 次 郎
平井 春之丞	山 根 新太郎	南 雲 新太郎	岩 根 新吉
八 島 福		山本 藤太郎	藤 田 吉三郎
野 並 善太郎		四 谷 順吉	藤 田 三郎
		長 野 元吉	

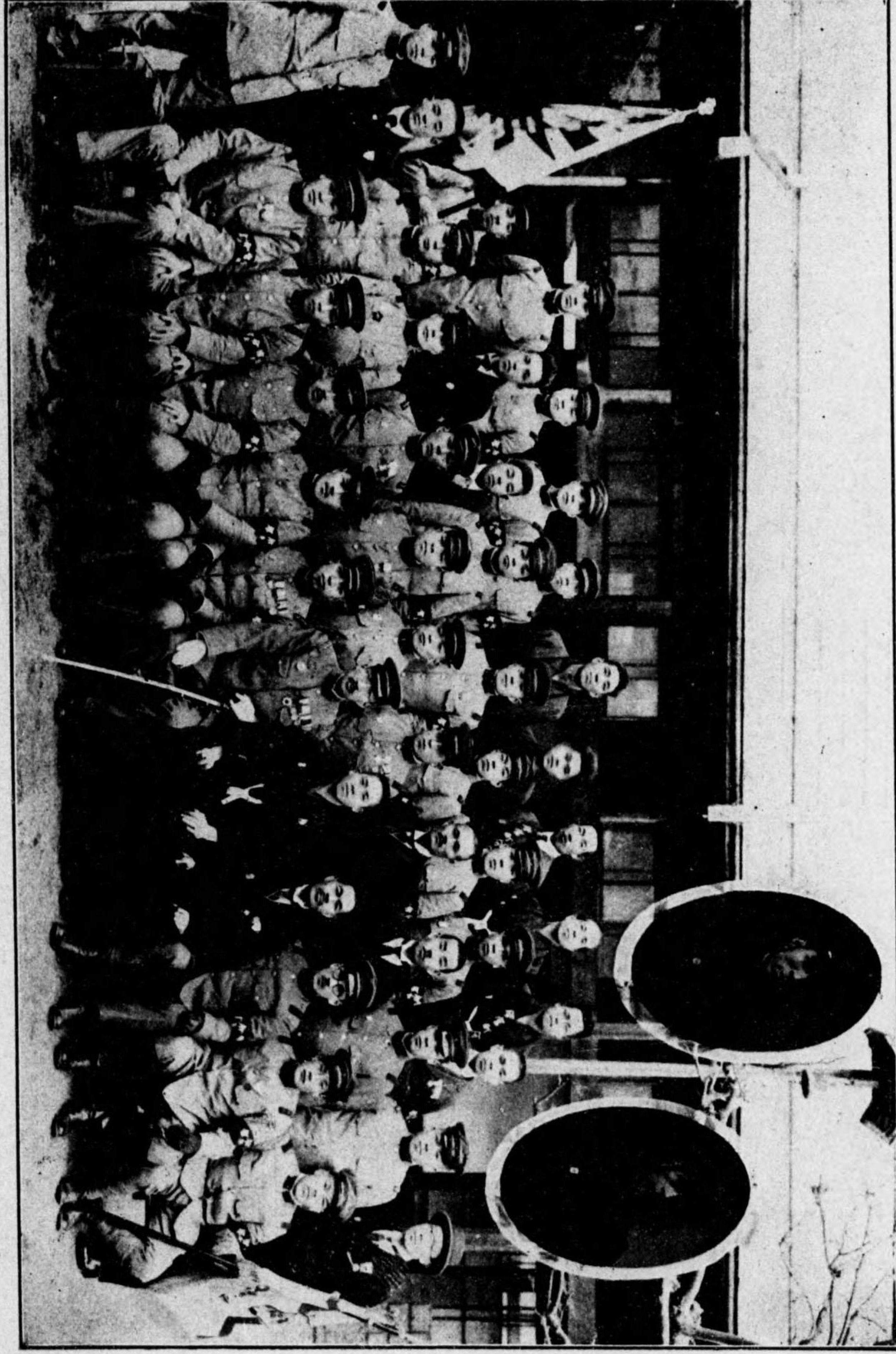


今宮町青年團

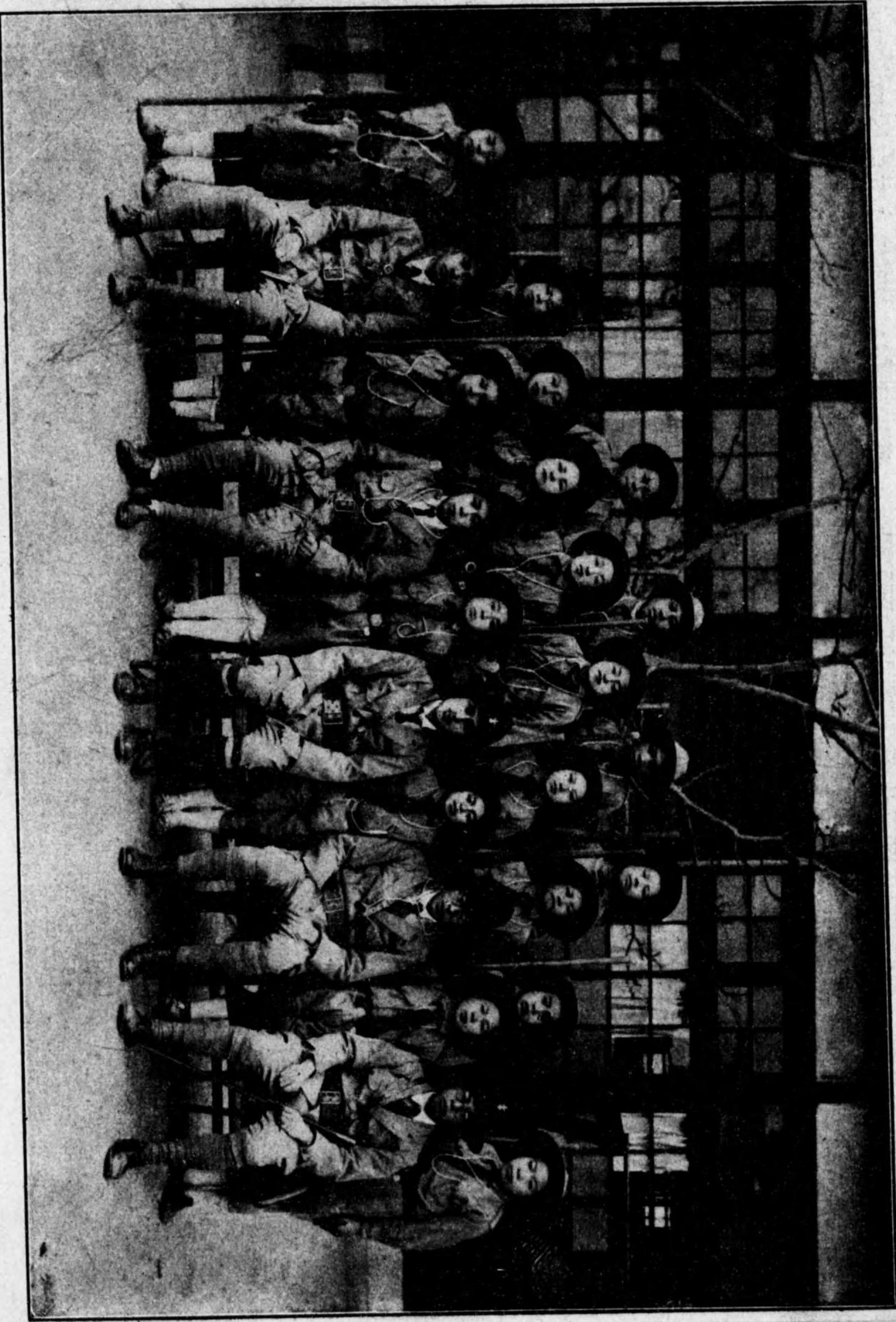
鈴木米太郎

久城四郎 佐光竹市
 青木武次 白石常市
 脇田一雄 中川宮雄
 奥田伊三郎 松田安治 森本伊作 菅源之助
 川口安次郎 山下光雄 谷口喜平 川本泰一
 北野井秀太郎 後藤梅男 中平氏 吉田繁次郎
 天根久次郎 林安二郎 土井清次郎 高橋眞夫
 天野安治郎 中西喜二郎 俵啓作 山田太郎
 辻井榮太郎 鈴木田光太郎 田村庄次 松本賢次郎
 木内竹次 竹内徳市 安福寛 吉田徳次郎
 北村善三郎 三河吉之輔 山口茂男 寺田健次
 荒木常雄 增井久太郎 辻岡岩治 田中辨太郎

今宮町在郷軍人團



田中 權太郎
 菅井 久太郎
 北林 善三郎
 木内 竹次
 菅井 榮太郎
 天裡 安次郎
 天里 久太郎
 北裡 井茂太郎
 川口 安次郎
 奥田 特三郎
 田中 健吉
 磯木 米太郎
 田中 權太郎
 北林 善三郎
 木内 竹次
 菅井 榮太郎
 天裡 安次郎
 天里 久太郎
 北裡 井茂太郎
 川口 安次郎
 奥田 特三郎
 田中 健吉
 磯木 米太郎
 田中 權太郎
 菅井 久太郎
 山口 英良
 安藤 實
 田林 丑夫
 岩 登
 土井 常夫
 中平 九
 谷口 喜平
 森本 特三郎
 湖田 一華
 新木 寅夫
 八坂 四郎
 寺田 勤夫
 吉田 勘次郎
 森本 實次郎
 山田 太郎
 高橋 貞夫
 吉田 繁次郎
 川本 泰一
 菅 隆之助
 中川 宮華
 白 正常市
 若 光竹市



今宮町少年義勇隊

序

明治新政以來の吾が自治制を顧るに、明治五年郡制の下に區長戸長を置き幕府時代の庄屋五人組制を襲がしめ以て新自治制の萌芽となし、次で十一年郡區長村長の制により、自治行政首腦者選舉の端を啓き二十一年新に町村政を布き茲に地方自治の制度を確立して以來、星霜既に四十年、其成果漸く見るに足るものあらんとす。然れども尙改廢更新を要するもの一にして足らず、地方によりては或は現制によるの施設を不便とするものあるは何が爲ぞや、蓋し其原因一にして足らざる可きも、政教の施策未だ其地方の變遷發達に基調を置かざるに因らざる可らず。溫故知新の語は陳舊なる如きも苟も經綸を行はんとするもの深く思を茲に致さざる可らず。吾朝にありては一千二百餘年の古昔元明天皇の和銅六年を以て近畿七道に詔して風土記を撰進せしめ給ひしが如き、又支那に在りては、宋元の古より明清に至るの歷朝に於て、方志、府志、縣志の撰輯相踵げるが如き皆此に見る所あるがゆゑのみ。此意味に於て、余は吾郷土志の益々討究せられ地方志の愈々俱備せんことを冀ふものなるが、今宮町に於ても亦茲に覺る所あり町志編纂の議を決し、査究年餘、今稿成りて將に剞劂に附せんとす、就て見るに其史實口碑傳説より行政機關の變遷、地理氣象、教育、經濟、土木、衛生、産業、社會事業、寺觀、名

序

554-144

蹟、人物、風俗に至る迄細大綱羅して殆んど遺す所なし、其地方將來の施設に對し參考となるの大なるべきは勿論、又社會の進展人文發進の上に裨益する所尠少なからざるを信じて疑はず、即斯舉の完成を欣び、一言を述べて序とす。

大正十五年孟春

内務次官 川崎卓吉
貴族院議員

今宮町志序

今宮町の地勢は大阪市の南部を擁し古來畿内の要津に當り海陸共に重要な地位を占む。故に浪速の昔より大大阪の今日に至るまで幾多の變遷を経、之を中心として起れる國內の治亂興廢及制度文物の消長等大阪の發展と關聯する所頗る深し、從つて其の沿革最も古く由緒の傳ふべきもの亦尠なからず。史を按するに平安遷都の頃は今宮供御人より朝役として日々鮮魚御贄を禁裏御厨子所に奉るの古例あり。又毎年六月祇園會に輿丁上洛して神役を奉仕し今宮神人の名を傳へたり。曾て戎神社の靈境を背景として農圃相連り登戸其の間に點綴せる村里は今や變じて會社工場となり、商肆檐を聯ね人口年と共に加はり、殷賑なる大都の一要衝となるに至る。此の趨勢に對して變遷の跡を顧れば眞に隔世の感なき能はず。町當局思を爰に致し具に辛酸を嘗めて諸般の事歴を輯録し將に剗削に附せんとす。洵に意義ありと謂ふべし。今本志の内容を見るに史實傳記より行政機關の變遷、地理教育經濟衛生產業土木社寺古跡等に至るまで排列適正討究明確、郷土と人生とを統合すること廣汎にして且深密なり。由來地方志の編纂は其の旨

最も高く其の効頗る廣し。本志の成る獨り絶好の記念物たるに止まるのみならず、永く郷土の明鑑となり、地方將來の施設に對し有益の資料たるや疑を容れず。茲に其の美譽を賛し聊か一言を叙して序となす。

大正十五年六月

大阪府知事 中 川 望

序

今宮町志成る、洵に欣賀に禁へざる也、想ふに其の地難波の南邊に接し古來本市の發展と關聯する最も深し。曾ては瀬海漁撈の村里として禁裏御厨子所御肴物の御用を奉仕し、京洛祇園會には出でて輿丁を勤むるの例たりし等、其の發祥極めて古く由緒の傳ふべきもの亦鮮からず。明治三十年四月其の半地を割きて本市に容れ、更に昨十四年四月全域を擧げて編入せられ、今大阪南部の樞要地區たり、豈滄桑の變のみならんや。町志の編纂蓋し甚だ意義ありと謂ふべし。舊町當路夙に其の要を認め百難を排して輯纂を完了せらる、其の功永く記すべき也。一言叙して以て祝意を表す。

大正十五年六月

大阪市長 關

一

序

自治制の下に於て、地方の市又は町村等に記念す可き事件の發生する場合には、夫々何等か記念事業を行つて、永遠に其著大なる事件を記念想起せしむる料に供するのである。吾が今宮町は大正年間に入つて、大阪市の發展に伴ひ實に驚異す可き發達を遂げ明治年間には僅々數千人に過ぎなかつた人口が大正十年には十萬の壘を摩するばかりになつた。併し何分にも急激な發展であるよりして、自治の諸施設は未だ完備せず今後に於て次第に教育、衛生、社會事業、道路等の施設を全うして、眞に日本國中に於て、第一等と屈指せられるも第二等には墮ちないだけの、模範的の町であらしめようとして、町政の局に當つた私などは鋭意努力する所があり、職業紹介所の新設やら、公民病院の建設やら、日本國中には未だ一つも見受けない所の最新式の塵埃焼却場の設置やら其他各般の設備完成を急いだのであつた。然るに多年の宿題であつた所の大阪市の隣接町村併合による大大阪市建設の事は、大正十四年になつて急轉直下して、其議愈々熟して其實現を見ることになり、今宮町も遂に併合せられることゝなつた。

於是乎、鋭意努力してゐた町の行政は擧げて之を大阪市に引繼ぎ、町は茲に市の一部分となつて吾等の忘れ難い町そのものは、解體されたと同様の形になつた。就ては何か記念の事業を

行ひたいとの議が町の當路者、町會の議員諸君により提唱された。それには種々な説も起つた。記念碑を立てることも一つの方法である。或は公會堂を建てることも亦意義あるものであつた。併し公會堂の如き建設物は時代の變遷と共に兎角に亡び易い、碑石の如きも質のよい花崗石に刻しても、能く三百年を保ち得ないもので何れも記念として餘り適當なものと言へない。永遠性を帯びさせるといふ點に於てはどうしても文書に勝るものは無い。殊に吾が今宮町の口碑傳説等、すべて史實に關する文献は頗る缺如して居るのであるから、町史といふ意味のものを基礎とし、それに後人の爲めに現在の町の状態を記述したものを加へ、支那に於て一千年以前から行はれて居る方志、府志の體に倣ひ、町志を編纂刊行し以て記念とし永遠に傳へるのみならず後人を裨益したらばといふ私の提案が幸にも多數を以て容られ、茲に大正十三年末を以て内議を決し大正十四年に豫算を可決し、愈々其事に着手するに至つたのであつた。

編輯は町の吏員は固より町の内外關係者に於て其材料を蒐集し、羽原熊二郎、戸田芳助、楢垣精三郎氏等に其取纏めを囑托し、更に監修として全體の取捨統一並に文献上の調査等を東京の寒川陽光氏に依托したのであつた。斯くて固より完全を期する積りであつたけれども、經費も十分ならず、與へられた時日も極めて短かく、僅々數ヶ月の内に全部を編輯し印行するといふのであるから、到底他の町村の斯うした事業が數年の歲月と數萬の資とを以て行ふやうに満

足なものが出来なかつたのは事情の已むを得ざるものである。材料の如きも、文献には大阪市の記録や傍近天王寺、住吉等の著名なもの、下に隠れてゐて、今宮町として特記せられてゐるものが少く、明治以前の史實に於て聊か物足らぬ感のないが、之れは本來無いものなのであるから亦已むを得ないことであらう。尤も年月を構はず費用を吝まらず研究したならば、尙ほ隨筆雜書等の記述から幾らかの材料を見出し得たであらうけれども、それ等は恐らくば必ずしも信用し得るものゝみではあるまいから、寧ろ本志の記述せる所くらゐを以て満足するを賢しとするであらう。其代り後代人の爲めに記し遺す所の明治及び大正年間の町の史實に至つては極めて精細に記して殆んど間然する所なきものと言へる、勿論これとても豫算に限りがあり紙數の制限を受けた爲めに省略した點が多々あるけれども、而かも先づ此位ならば、大綱を失はず傳へ得たと信ずる。

大正十三年末に議を決して、愈々着手したのは十四年一月で、編輯を終つたのが十四年五月印刷も大體は十四年十月に終つてゐたのであるが、高貴の序文だの、一部訂正などに案外人の知らない苦勞手間を費し、年を越えて、大正十五年孟夏に漸く製本完了するに至つたのである。是を以て恐らく最も永遠性を持つ記念事業として其目的を達し得たものと信ずるからして町の關係方面は勿論、帝國圖書館其他有力な圖書館へも寄贈配附する豫定なのである。

序

終りに監修として多大の勞を吝まれなかつた寒川氏を始め編輯に努められた羽原、戸田、楢垣の諸氏並に材料提供と蒐集に献身的努力を吝まれなかつた左記諸氏の勞を多とし、謝意を表するものである。

- △堂本安三郎 △四ツ谷福松 △岩間繁吉 △岩崎彌一郎 △柴田藤吉 △野本吉三郎
- △野口安五郎(以上町會議員)
- △坂部健太郎 △奥本民藏 △長田寛三 △安福敏昭 △井岡梅太郎(以上各小學校長)
- △近藤正吉 △戸上常吉 △南雲清次郎 △福川紋吉 △工藤襄 △長谷茂扁 △近藤源一郎 △阪本喜三郎 △大谷熊市(以上町吏員)

大正十五年夏

今宮町長 貞本義保識

凡例

- 一、郷土史の研究考覈は近來次第に意を注がれるに至つた。初め今宮町史の監修を依頼せられた時に、史の研究は容易の事業でない。短日月に卒業する如き到底不可能として之を謝絶した。然るに町長貞本義保氏は、時日と經費の許す範圍に於て之をなせ、大成は後世を俟つて不可なしと使嗟止まない。即ち敢て菲才を顧みず、客將軍として其任に當るに至つた。當初の目的は右の如くであつた。愈々編輯諸子の努力により蒐集せられた材料を見ると、史と稱す可きものよりも寧ろ志どいふを適當とするものが多かつた。依て史を斷念し、志として之を編むこととなつた。
- 一、蒐集提供せられた材料は實に浩瀚なものであつた。併し紙數を制限されてゐる爲め其大部分を省略割愛するの已むを得なかつたことは、編輯諸子の諒せられんことを望むのである。
- 一、反對に稍々冗漫の嫌あるも他との權衡を保たしむる爲め忍んで之を收載したのもある。教育に於ける各小學校の記述の如きである。これは兒童教育機關であるため、出來可く丈け甲乙なからしめんことを期した。
- 一、卷頭寫眞は、初め各其事項の記事の間に挿入する豫定であつたが餘りに頁數多き爲め製本

凡例

困難といふ理由の下に之を斯く一纏めに巻首に置いたのであることを諒とされたい。

一、紙数は初め三百頁の豫定であつたのが五割を増加するの已むなきに至つた。従つて諸事番狂せを來し、總ての不完全を忍ばねばならぬことになつたのは已むを得ない。

一、當時の内務大臣若槻禮次郎君、同内務次官川崎卓吉君、中村不折畫伯等は、余が此事に關與するゆゑを以て特に題字、序文、表幀を惠まれ、又柴田泰助君は多大の援助を吝まれなかつた。茲に深く謝意を表する。

大正十五年夏

寒川陽光識

今宮町志 目次

第一 緒論……………一

第二 沿革歴史……………三
 △今宮の名稱と其由來 △地形上から見た今宮地方の變遷 △足利時代以來戰亂の影響 △庄園時代の今宮 △木津村 △今宮村の二大奉仕 △今宮町の發展

第三 地理氣象……………三
 (一)概況 (二)位置 (三)町役場位置 (四)境界 (五)廣袤及面積 (六)地勢 (七)氣象 (八)地質

第四 人口及其動態……………五

第五 行政機關……………五
 △難波造都以來の治政 △舊幕時代の村政 △明治維新以後 △今宮村町村政時代別 △村制施行前後 △公民總會 △今宮津守組合役場時代 △今宮村津守村公民協議會 △第二次村會 △村會より町會へ △歴代の町政當局者 △大阪市へ編入

目次

第六 教育……………一三五

△德川時代以前 △德川時代 △幕末から明治初年 △明治時代

△今宮第一小學校△今宮第二小學校△今宮第三小學校△今宮第四小學校△今宮第五小學校△今宮商業補習學校△私立學校△教育後援會

△社會教育諸機關……………一八六

青年團△處女會△淑德會△今宮少年義勇軍△今宮汗愛少女團△家庭修養會△同窓會△修身研究會

△今宮町立圖書館……………二〇〇

第七 衛生……………二〇四

△町の状態と衛生機關 △上水道 △今宮公民病院 △屠場 △組合傳染病院 △

汚物の處理方法 △傳染病 △家畜市場 △衛生組合 △治病的私設機關 △衛生

組合 △家畜傳染病 △衛生宣傳

第八 財政經濟……………二〇八

△歲出入 △町有財産 △當町の土地

第九 耕地整理……………二六四

△第一耕地整理組合 △第二耕地整理組合

第十 土木……………二八一

第十一 産業……………二八四

△耕地及主產物 △工業△商業 △雜業

第十二 社會的事業……………二九三

△公設市場 △公民病院 △職業紹介所 △今宮町方面委員及其後援會事業 △救

濟事業 △私設社會的事業 △臨時社會的事業

第十三 交通……………三一九

△交通機關の發達並運輸交通状態 △陸路 △鐵道 △諸車 △水路

第十四 通信機關……………三三二

△天下茶屋郵便局以前 △郵便貯金 △簡易保險

第十五 警備機關……………三四〇

第十六 兵 事……………三四三

第十七 名所舊跡……………三四四

△十三間川 △鮎川 △萩の茶屋 △天下茶屋 △宗了庵 △星ヶ池 △猫塚と大

近松の碑 △飛田墓址 △木津の墓

第十八 神社佛閣

△今宮神社 △廣田神社 △大國神社 △敷津松之宮神社 △海泉寺 △圓融寺
△正樂寺 △淨安寺

第十九 人物

△小西來山 △伊藤勝右衛門及其父字内 △木津勘助

第二十 風俗

△十日戎 △今宮祭 △臺昇 △村民上洛

今宮町々勢參考諸表

(一)失業關係事項 (二)勞働調査表 (三)敬老會年齡別 (四)社會事業 (五)警察
(六)交通及通信 (七)電氣 (八)金融 (九)社寺 (十)産業上より見たる戸數
(十一)會社組織と事業別 (十二)産業

目次終

今宮町志

今宮町編纂

第一 緒論



大阪市の南、名高い住吉の北、茅海を西に受けた一帯の平地、其處に今宮町は位置して居る。大都會に接してゐるのだから、古へより都會繁榮の餘澤を被つたに相違ない。併し明治より大正へかけて、吾邦の急速な膨脹に伴ふ都會の發達と共に、今宮町も亦奇蹟と言ひたいほどの大發展を遂げたけれども、明治以前、徳川氏の封建時代までは、難波商都の餘慶を被ること比較的少く、鹽倉農櫛疎らに斷續する一寒村たるに過ぎなかつた。蓋し難波は有史以來最も古い要衝でもあり、神武帝東征の時、備前兒島に數年を屯駐して東方諸國を偵察し、遂に難波が政治、軍事上最も緊要な地であることを認め、此處から上陸しようとして企てられたが、敵勢侮り難きものがあり、且つは浪の速き爲め紀路に轉ぜられたのは史上に明かな所で、それ以來、「ナニハ」の名に因つて知られ、次で仁徳帝が、天の探女の舟を泊てたと傳へらるゝ高津に宮居し給ひしより、茲に一千六百餘年、其久しい間を都會とし商埠として榮えて來た大阪の郊外地で

ある今宮町が、千五百年もの長い歳月を、大なる發達も遂げずに、一寒村で終つたことは、全く政治の悪かつた爲めと兵亂の屢々あつた爲めとに他ならぬ。それは、ひとり今宮町のみでない、日本國中何處でも同じ状態に置かれたのだから仕方がない。併し、他の僻陬の村落に比しては、いかばかり都會の餘澤を被つたかは、朝役神役などいふ、京都の内裏と祇園社に對し大切な役目を仰付けられて居るので想像し能ふのである。

斯く遠い昔より開けた大都會附近の地であるから、其歴史は文獻にも相當に明記されて居りさうなものだが、それが全く缺如して居るのは不思議なほどだ。難波及び住吉に關する記載は決して乏しくない、然るに其中間に挟まつてゐる今宮町に關しては殆んど見當らない。其最も古く現れてゐるのは今宮町を包有してゐる所の西成の地名で、これは天平九年今より千七十餘年前に既に記載を見るとは日本紀に依て知られるのであるが、其西成は何處から何地までを限つた名前であるかは明白ではない、其後此邊一帯の地は難波小郡、三野郷など呼ばれ、今宮町は其内に包含されてゐたらしい。下つて延喜の朝に至り、改めて百濟郡となり、更らに北條氏時代から百濟欠郡となり、以て戰國に及んだことは今宮神社に残つてゐる所の弘治三年の繪旨に「欠郡今宮庄」と記されてゐるのを見て明かである。即ち今宮を包有せる郡名ですらも、極く古い時代は明白でなく、臆氣に想像し得らるゝのみで、延喜の百濟郡に至つて木津、難波、西

高津、及今宮、勝間等を總括しての郡名であつたことが知られるだけである。

郡名の内容が既に斯く其古へを確かに知ることが出來ない。況んや其郡内の一部分である所の今宮といふ地名に就てをやで、古い文獻の全然缺如してゐるのは甚だ物足らない。今宮の地名も初めて文書に見るのは今宮神社に藏せらるゝ大永二年の神役下知狀に於てあつて僅かに四百三年以前の事に屬し、それ以前の文書には曾て見當らない。此後には同じく今宮神社所藏の弘治三年（三百六十九年前）の繪旨にも今宮庄の文字を見ることが出来るから、今宮庄の名は先づ四百年前頃か遠くとも五百年以前頃からの名前であらうと想定し得るのみであつて、果して何時から呼び來つたかの年月が明かでないのである。

然らば四五百年前は全然不明であるかといへば、其以前には津江の庄と呼んだことだけは明かであるらしい。これも今宮神社に藏する所の文永十一年正月廿五日付の書類に「津江ノ庄」の文字が認められるので、此時代即距今六百五十五年前頃には津江の庄と呼んだことだけは確かである、併し其津江の庄の廣袤や限界は固より明白ではない、今宮神社の宮司津江氏は、此地での舊家で三百年も遠い墓さへあるといふから、其の姓氏より考へても津江の地名は相當古いことだけは確かであるが、これも亦た何時頃から斯く呼んだかの、年代は不確である。

津江の庄以前の名に至つては更らに漠然たるものである。此邊は古へにいふ「名吳の濱」で

あらうといふ説が是認せられて居るだけである。それも唯だ古歌によつて徴するばかりで、其の呼びなした年代や、又其限界等は固より確知すべくもない。古歌に出てゐる所の「名吳濱」とか「耶吳江」とか「耶吳海」とかいふのは、歌の意味から想像すると、日本橋以南から住吉に至るまでの海濱を總稱した名であるらしい。だから今宮町が古へ名吳濱であるとは言へず、名吳濱の一部分だと言ひ得るのみである。茲に注意すべきは古歌に名吳海、耶古濱など出てゐるものに攝津の外に越前の名吳海もあることである。之れを混用してゐる書物もあるから注意を要する。

斯くの如く其地名の起つた年代や由来や、又漸く知り得る名吳濱、津江ノ庄、今宮庄などの其の廣さや、限界やそれ等總てが皆な朦朧として鮮明でないのは甚だ残念であるが、夫等は短日月の調査では到底確かめ得ないから、今後の討究に俟ち、大方博雅の垂教を仰ぐのみである。想ふに今宮町の前身今宮庄時代や津江の庄時代は、瀬海の寒村に過ぎないで政治上に左まで重視せられなかつたのであらうし、又一層遡つた古い昔は奈良朝の大宮人等が玉を拾うて遊んだ白砂青松の一勝區であつたのみで、人家など殆んどなく、又平安朝以後より徳川氏時代に互つても尙ほ且つ鹽焼く蟹の煙を見たくらるるもので、當局の年貢帳にさへ閑却されたほどの場所であつたらう、それが徳川氏に至つて、三百年の泰平の爲め、難波商都が繁盛殷賑を極めた

結果として、都會に需用せらるゝ蔬菜魚貝の供給地として、稍々漁家農屋が増加し、村らしい形態を供へるに至つたに過ぎなからう。夫れが最近人口は萬を以て數へるに至つたのだから、明治新政以來の吾邦が如何に發達し、吾々此時代の國民が如何に幸福な生活をなし得つゝあるかは之れを古へに比すると、實に霄壤月籠も管ならぬ相違なのである。今左に名吳の海時代の歌を擧げて往時を想察する資料に供して置かう。

萬葉時代 (即奈良朝時代)

住吉の名吳の濱邊に駒なめて玉ひろひしく露わすらへず……………(人麿)

名兒の海を朝漕きくれば海中にかこぞ呼ぶなるあはれ其かこ……………(人麿)

奈吳の浦の朝けのなこり今日もかも磯の浦わに亂れてあらむ……………(萬葉卷七讀人不知)

これらの歌によつて見ても、住吉の名吳の濱とあるからして、住吉あたりまでかけて、大阪以南は一帶に名吳の海と呼んだことが知り得らるゝ、さうして貝でも拾つたやうな、さびしい場所であつたことも想ひやられる。奈良朝の大宮人は、よく此の邊の海濱へ遊びに來たことは、萬葉集に出てゐる數多き歌で知り得らるゝ、慶雲三年にも行幸があり、志貴の皇子以下扈從の人々が歌を作つてゐるのが残つて居る。それには「大伴の高師の濱」、「大伴の三津の濱」、「住吉の得名津」なども詠じてある。それ等いづれの歌に徴しても、人家稀少な、景色のよい海邊

であつたことが知り得られるのである。

それは單だ奈良朝の古へのみではない。平安朝から戦國時代に入つても同じやうな有様に置かれてゐた。尤も平安朝以後の歌人は居乍らにして名所を知ると云ひ、自ら其地を踏まず、殿上に坐して名所の歌を詠じたものであるから、歌に徴してのみ其地方の状態を論斷することは出来なけれども、大體に於ては左まで架空な歌は少いやうである。

なごの江に妻喚交し鳴く田鶴の聲うらかなし夜や更けぬる……(玉葉…宗尊親王)

なごの江にとまりをすればしきたへの枕に高き沖つ白波……(新葉…關白左大臣)

なこの浦にとまりをすればしきたへの枕に高き沖つ白波……(續千載…後二條院)

月出て、今こそかへれ名古の江に夕べ忘るゝあまの釣舟……(藤原光俊朝臣)

名吳のうみ汐干のかたの秋きりに猶あらはれぬ磯のうら松……(民部卿爲家)

あられふるなこの濱邊の眞砂路にいつれをもとの玉とひろはん……(左近中將具氏卿)

斯うした歌は數限りもない。いづれを見ても、藻鹽焼く蟹の小屋から立つ煙さびしく、沖つ白

波をわけては歸る釣舟の心細い漁村に過ぎなかつたことが想ひやられるのである。斯様な状態

は、戦國以後の徳川氏時代に入つても尙ほ打續いたものである。今宮町に住んだので、今宮町

唯一の人物とされる所の來山の句集を覗くと

今宮に幽居せしはじめ

花の春命に枝や東うけ

と云つて居る。實に尙ほ幽居に適するほどの閑寂玄隱の地であつたらう。

今宮は蟲どころなり聾なり 來山

此句を見ても今日の人は一寸意外とするであらうほど、それほど變遷して居る。天明時代の京

都の俳人で有名な蕪村の友たる召波の句に 召波

今宮の煤掃しばし郭公

といふ句もある。郭公がしば鳴くやうな地であつたと云つても今の今宮住者は恐らく驚くこと

であらう。又化政時代の京都の俳人に

今宮の萩見にまかりて 梅室

萩ふくや二月こしに秋の花

今宮の茶店にて 樽良

うば玉の烏芋のにしめ花柚哉

などの句がある。萩の名所であり芋の生産地であり柑橘の累々たる茅檐など打續くやうな、田舎々々した所であつたことを想見し得られる。又文化七年に歿した上田秋成に左の如き長歌及